Ⅱ　調査研究の結果

Ⅱ　調査研究の結果

1　アンケート調査

(1)　回収状況

表 1

対象	調査数	回答数	回収率
教育委員会担当	12	11	91．7%
学校担当	97	84	86．6%
(小学校)	(74)	(67)	90．5%
(中学校)	(23)	(17)	73．9%
地域コーディネーター	65	62	95．4%
学校支援ボランティア	130	96	73．8%

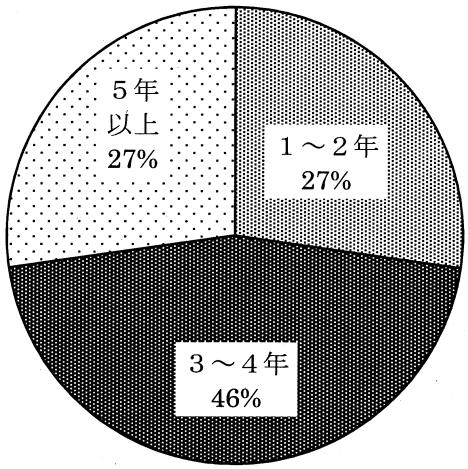
(2)　担当者について

ア　教育委員会担当者について　（回答のあった全市町の事業担当課は生涯学習課）

(ア)　勤務年数

担当者の現職場での勤務年数をおたずねします。　教委問 4 (1)

図1 －ア(ア)



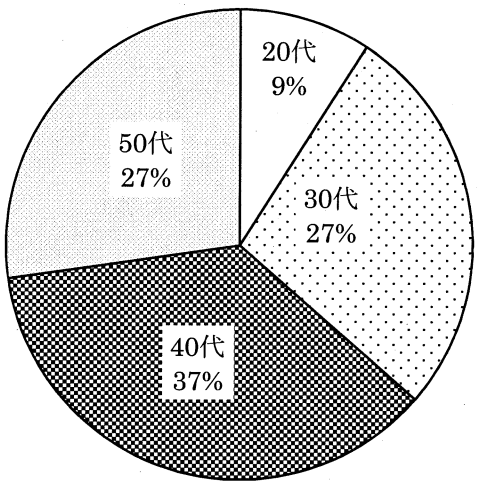
5 年以上現職場で勤務している教育委員会担当者は 27%、3～4 年が 46%、1～2 年は 27%となっている。

(イ)　担当者の年齢

担当者の年齢をおたずねします。　教委問 4 (2)

図1－ア(イ)

教育委員会担当者の年代別割合 n=11



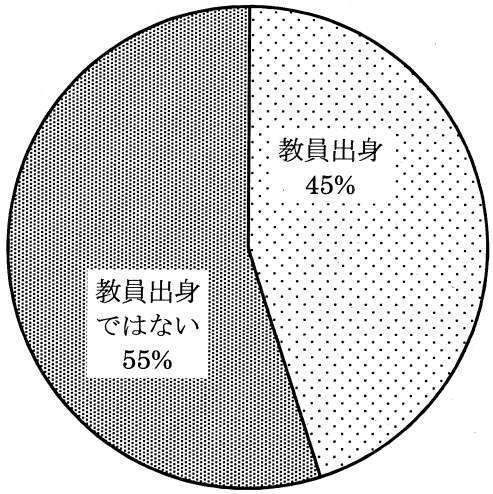
担当者の年代では、40 代が最も多く 37%、50 代と 30 代がいずれも 27%、20 代の担当者が 9%であった。

(ウ)　担当者の属性（教員）

担当者は教員出身ですか。　教委問 4 (3)

図1 －ア(ウ)

担当者　n=11



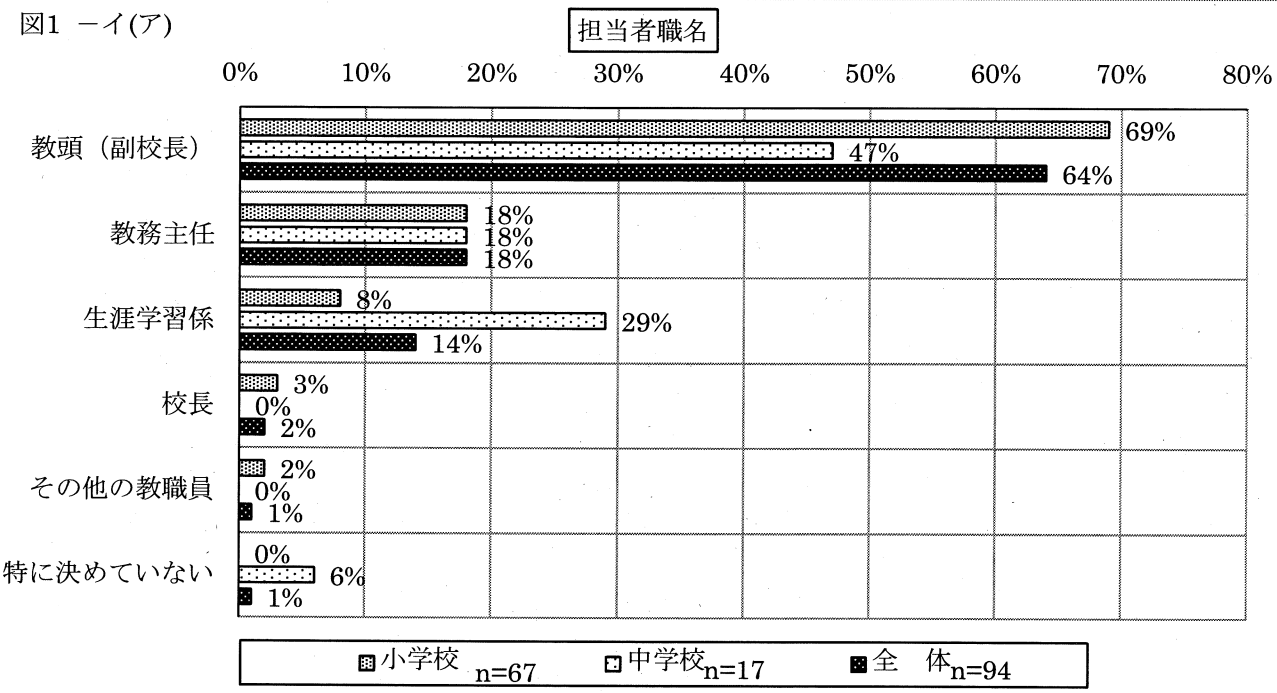
教育委員会担当者の 45%（6 人）が教員出身であり、すべて社会教育主事として発令されている。
なお、教員出身ではない担当者については、社会教育主事有資格者はいなかった。

イ　学校担当者について

(ア)　担当者職名

担当職員（窓口教員）はどなたですか。　学校問４(1)

図1 －イ(ア)



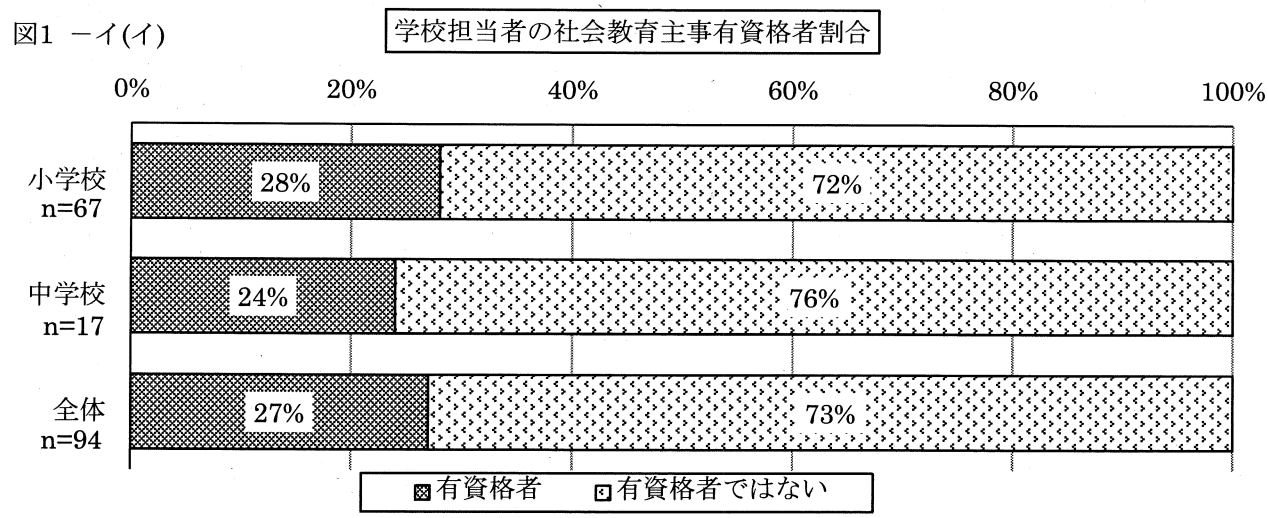
教頭（副校長）が担当している学校が全体の 64%で最も割合が高い。これは、多くの学校で教頭（副校長）が渉外を担当していることからであると思われる。

また、中学校では、「生涯学習係」の割合が 29%と教頭（副校長）に次いで高い。

その他の教職員・・・学習指導主任。

(イ)　担当者の社会教育主事有資格者割合

図1 －イ(イ)



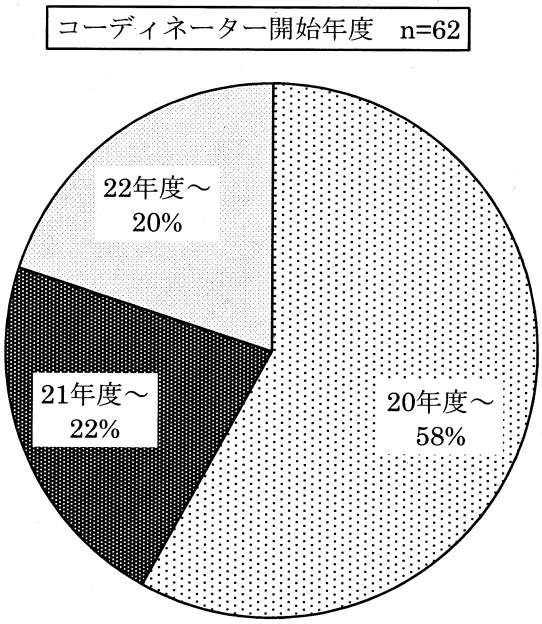
回答のあった学校担当者に占める社会教育主事有資格者の割合は、小学校が全体の 28%、中学校が 24%、全体では 27%であった。社会教育主事有資格者が教員全体の 6. 9%(平成 23 年度)であることからみると、高い割合であるといえる。

ウ　地域コーディネーター

(ア)　コーディネーター開始年度

あなたがコーディネーターを始めたのはいつからですか　　コーディネーター問１（1）

図1－ウ(ア)

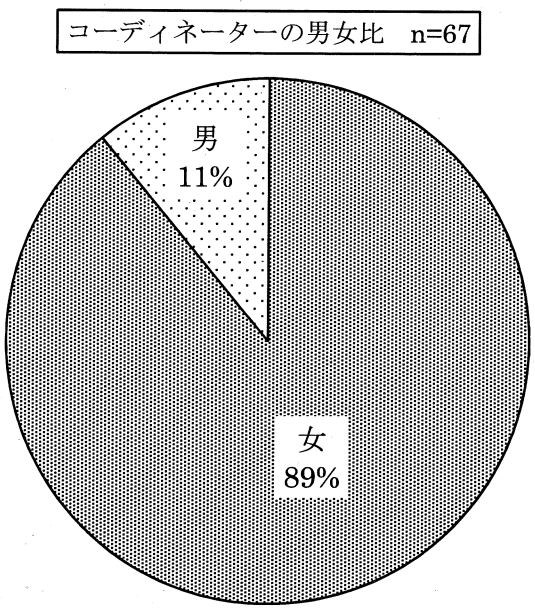


事業初年度である平成20年度から開始したコーディネーターが58%で最も多い。2年次である平成21年度から開始したコーディネーターは22%、最終年度である平成22年度から開始したコーディネーターは20%であった。全体の80%は2年以上の経歴があるということになる。

(イ)　コーディネーターの性別

性別をお答えください。　　コーディネーター問4(1)

図1－ウ(イ)

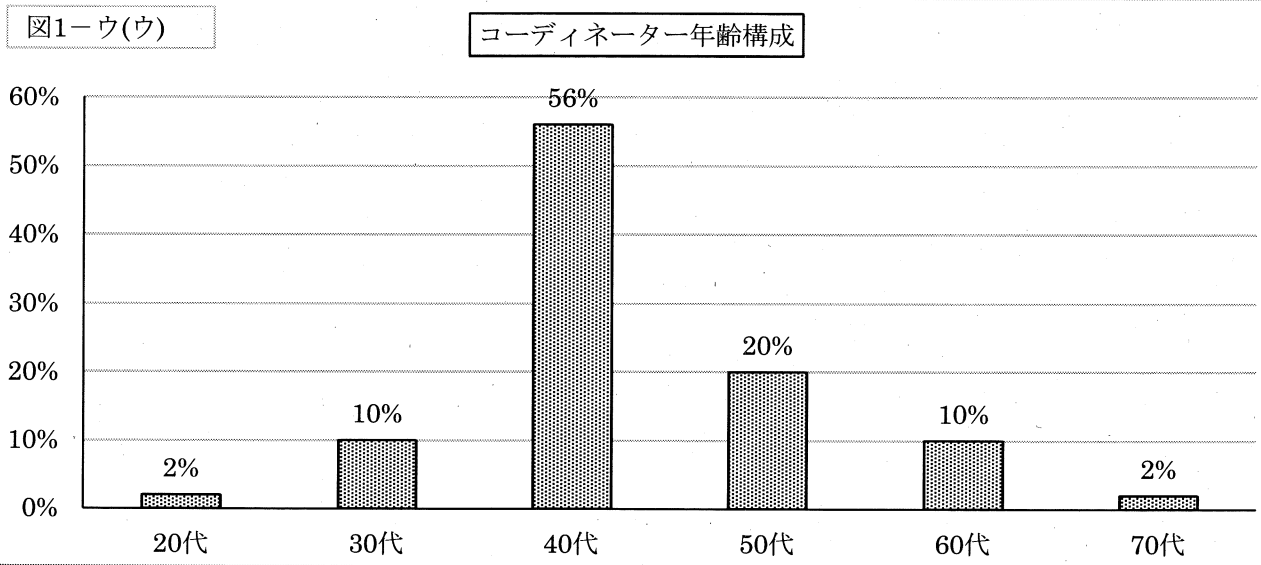


回答のあったコーディネーターの89%が女性、11%が男性である。

(ウ)　コーディネーターの年齢

年齢であてはまるものを選んでください。　　コーディネーター問 4 (2)

図1－ウ(ウ)

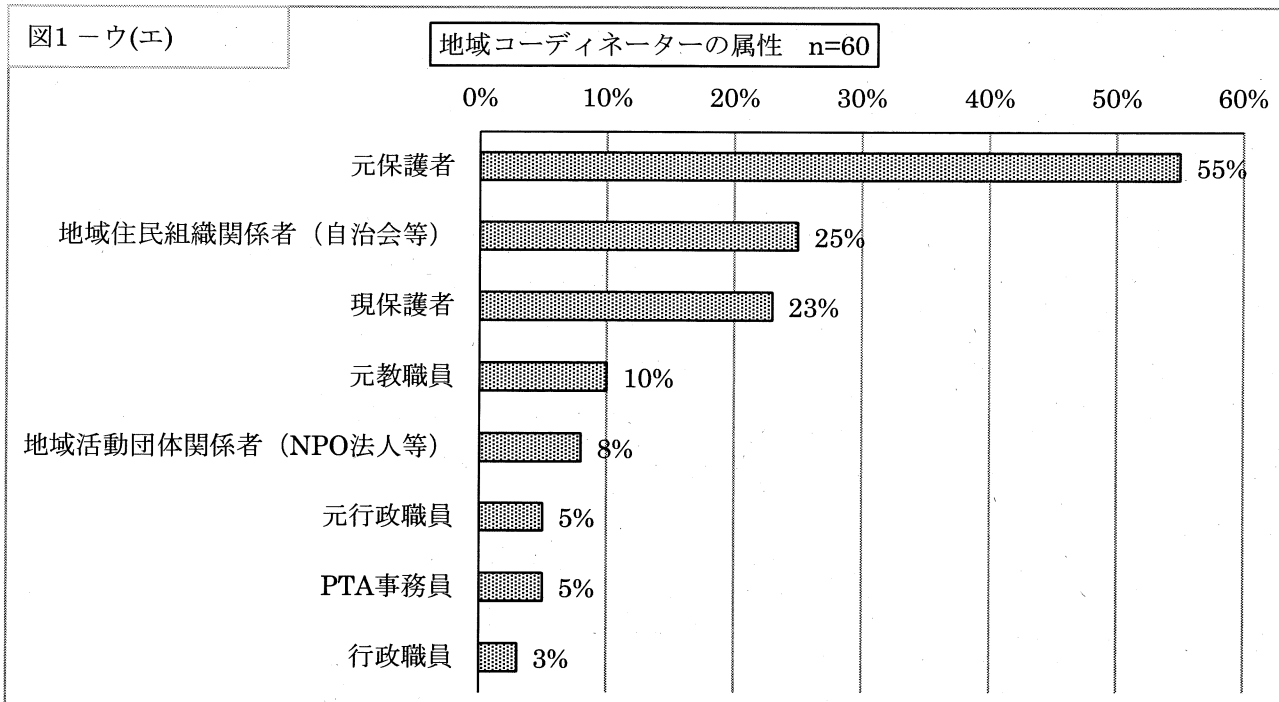


回答のあったコーディネーターの年齢は、40 代が 56%と半数以上で最も多く、続いて 50 代が 20%であった。

(エ)　コーディネーターの属性

属性は何ですか。(あてはまるものすべて)　　コーディネーター問 4 (3)

図1 －ウ(エ)



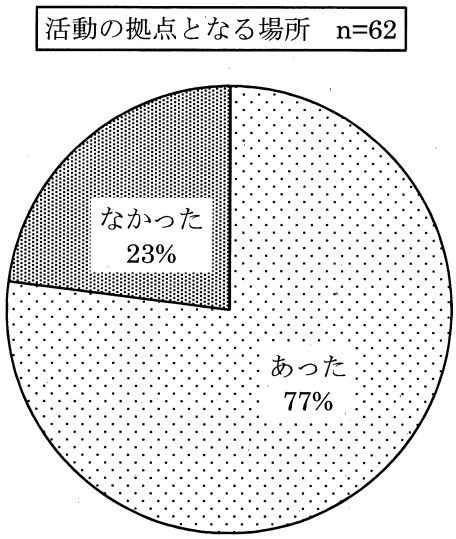
回答が最も多かったのは「元保護者」で 55%であった。続いて、自治会や地域協議会等に関わっている「地域住民組織関係者」の 25%、「現保護者」の 23%であった。

PTA 活動等によって、学校の状況を良く把握している「元保護者」がコーディネーターになっていることがうかがえる。また、図 1－ウ(ウ)との関連から考えると、40 代から 50 代のコーディネーターの多くがここに含まれると考えられる。

(オ)　コーディネーター活動拠点①

活動の際に、拠点となる場所（ボランティア室など）はありましたか。　　コーディネーター問１（3）

図1－ウ(オ)

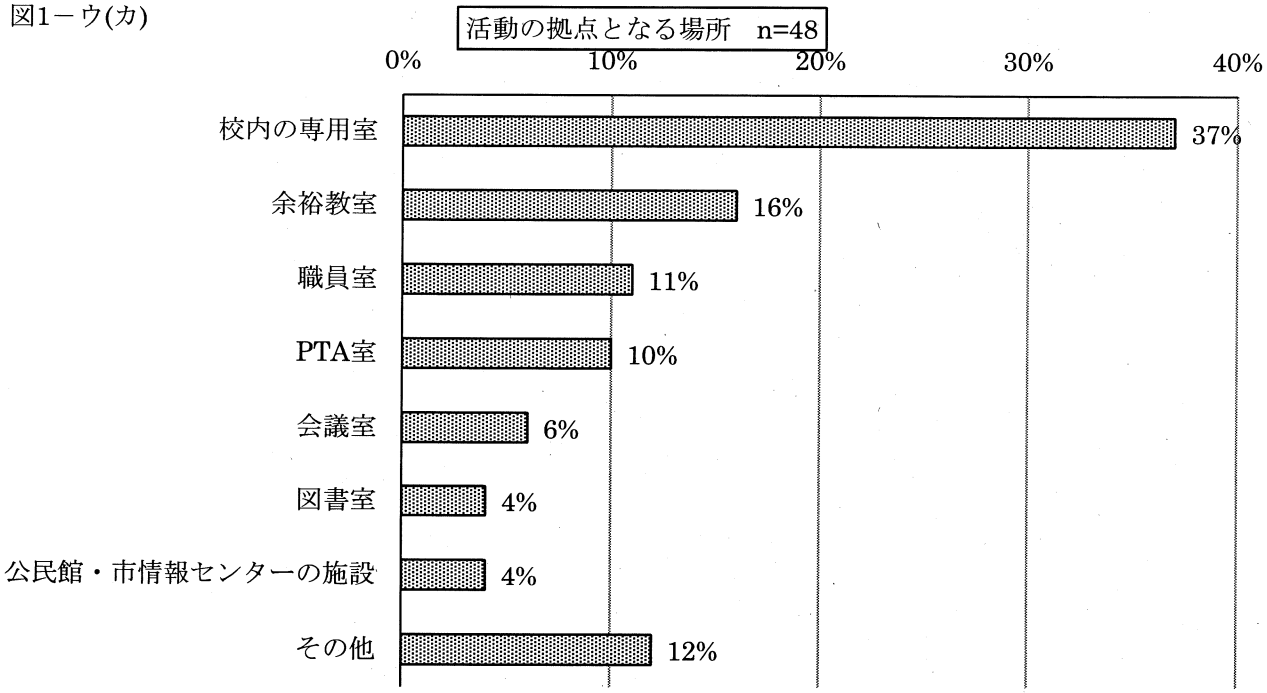


ボランティア室等の活動の拠点となる場所があったと回答したコーディネーターは 77%、なかったというコーディネーターは 23%であった。

(カ)　コーディネーター活動拠点②

そこはどこですか。　　コーディネーター問１（4）

図1－ウ(カ)



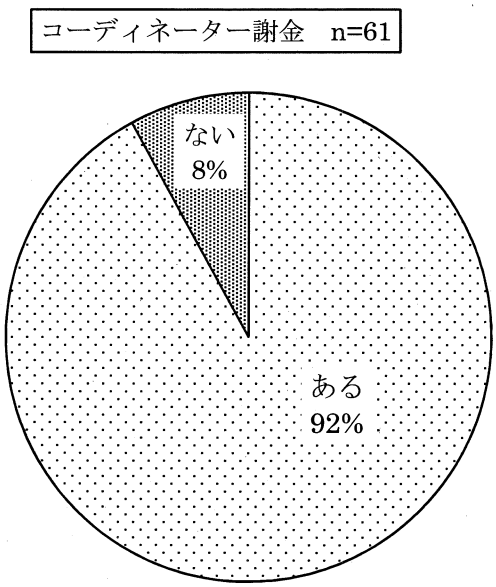
活動拠点があったと回答したコーディネーターのうち、37%が校内に専用室が設けられていたと回答している。続いて余裕教室が 16%、職員室が 11%、PTA 室が 10%であった。

その他・・・放送室。児童会室（児童会室とボランティア室併用）。印刷室。資料室　等

（キ）　コーディネーターの謝金

コーディネーターとしての謝金はありましたか。　　コーディネーター問１(5)

図1－ウ(キ)



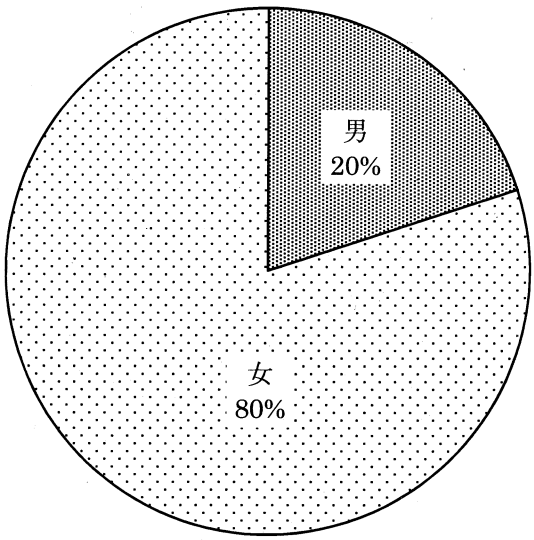
謝金があったと回答したコーディネーターは92%であった。

エ　ボランティアについて

(ア)　ボランティアの性別

性別は何ですか。（どちらか１つ）　　ボランティア問１(1)

図1－エ(ア)

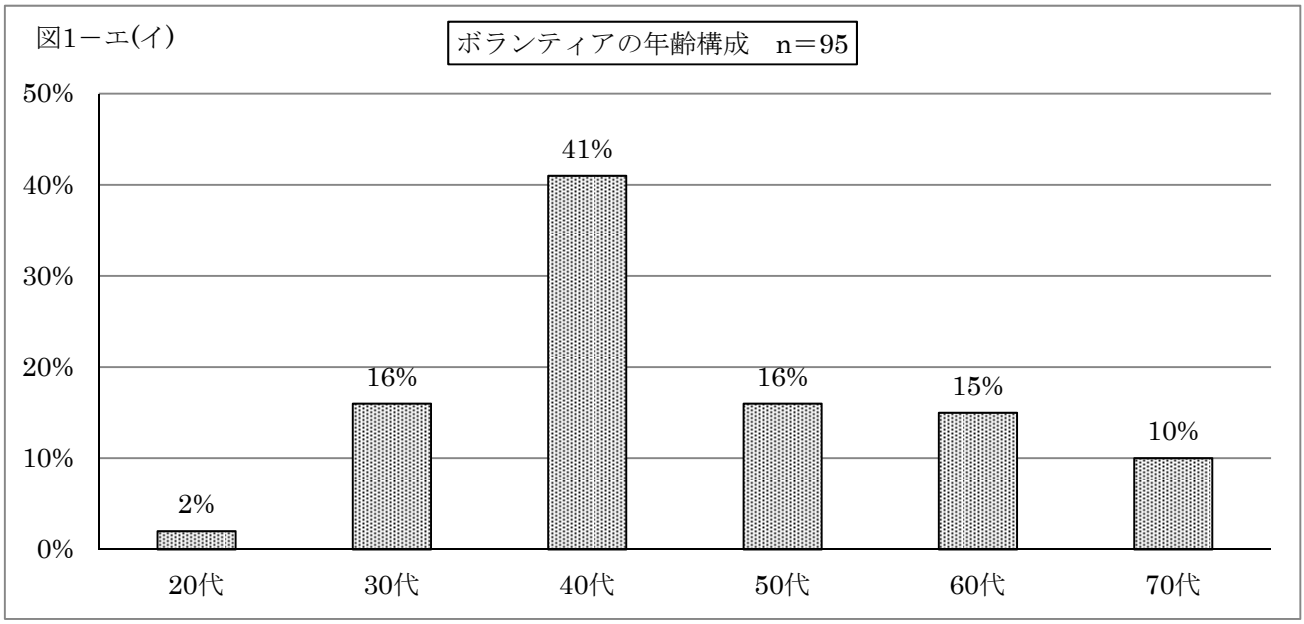


回答のあったボランティアの80%が女性、20%が男性である。

（イ） ボランティアの年齢

年齢であてはまるものを選んでください。　　ボランティア問１(2)

図1－エ(イ)

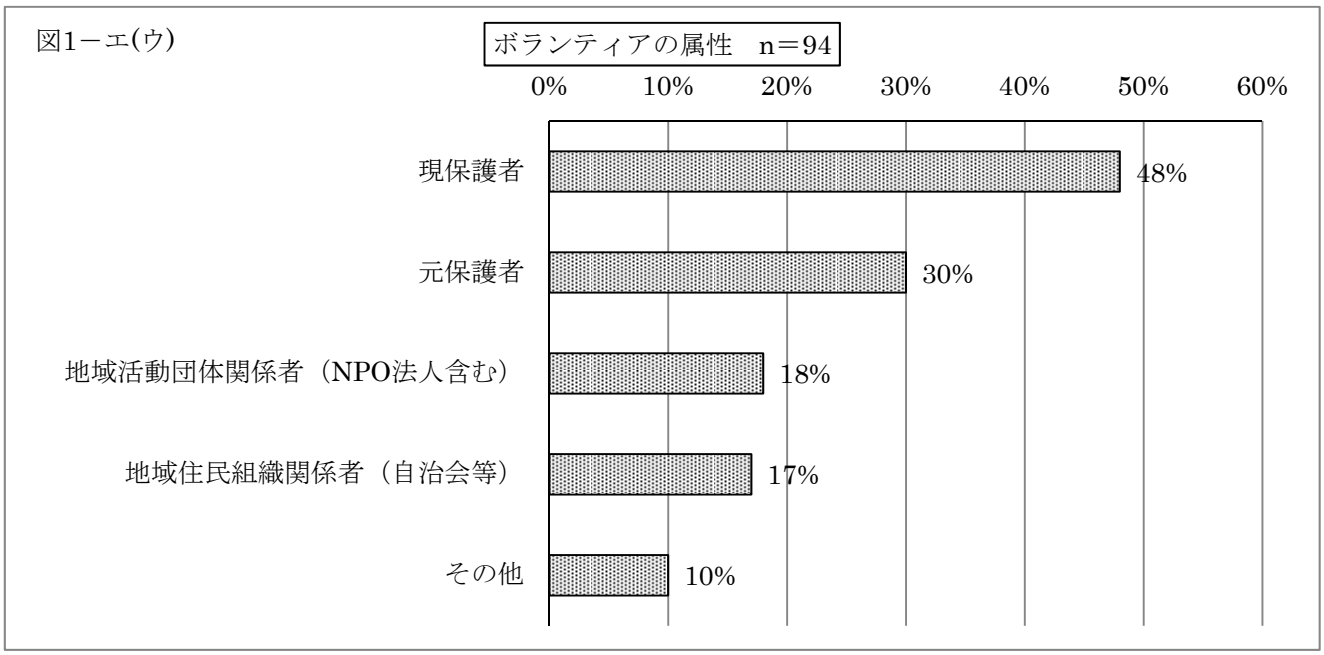


回答のあったボランティアの年齢は 40 代が 41%で最も多く、次いで 30 代と 50 代が 16%で同じ割合である。さらに 60 代 15%、70 代 10%となっている。

（ウ） ボランティアの属性

属性は何ですか。(あてはまるものすべて)　　ボランティア問１(3)

図1－エ(ウ)



回答が最も多かったのは「現保護者」で 48%、次いで「元保護者」で 30%であった。地域活動団体関係者 18%、地域住民組織関係者 17%とあり、地域での活動に取り組んでいる方も学校支援ボランティアとして活動していることが分かる。

その他・・・大学生。教員。元教員。

(3) 事業開始時期

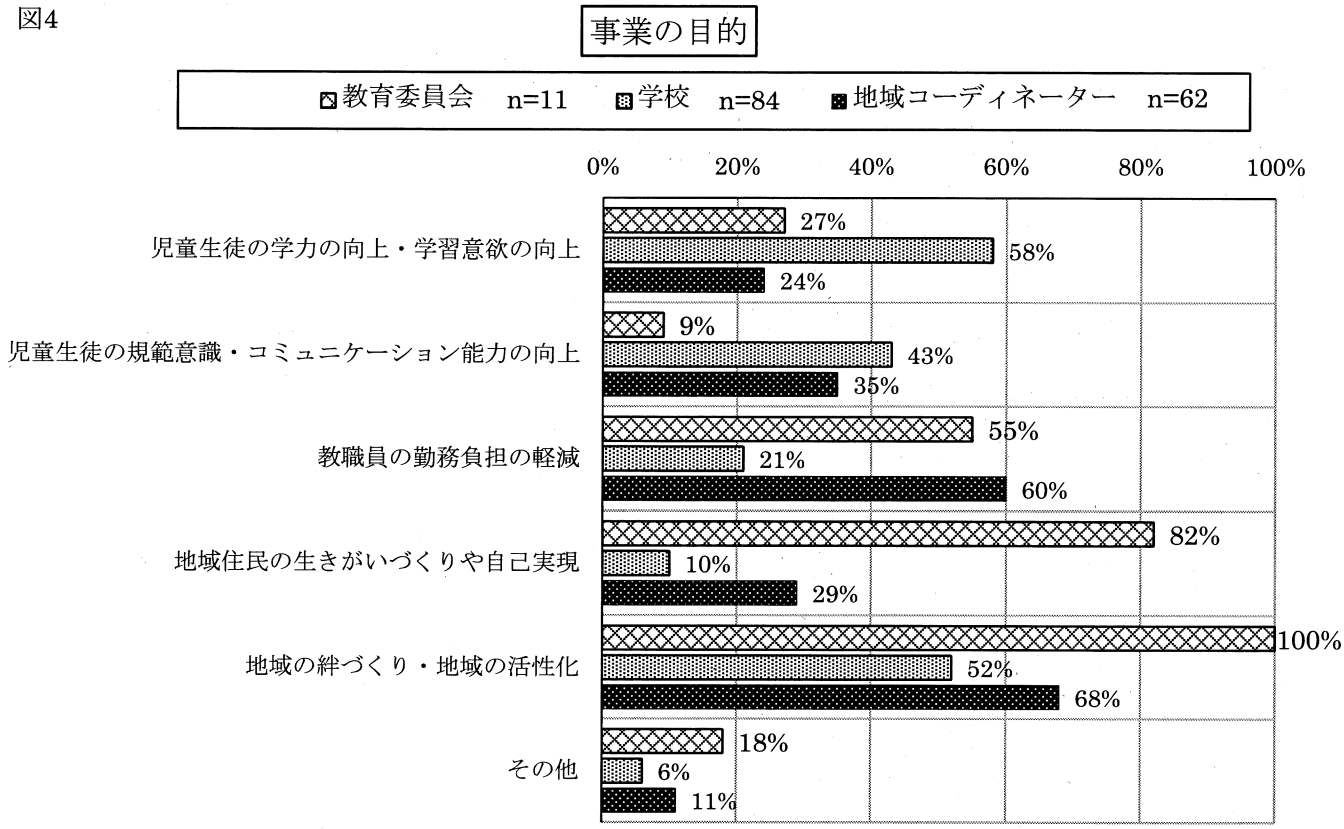
事業の実施は何年からですか。　教委問１(1)

県内実施市町のすべてが平成20年度からの実施である。

(4) 実施目的

事業を実施した目的は何ですか。(2つまで)　教委問１(1) 学校問１(1) コーディネーター問１(8)

図4



事業を実施した目的について、事業の推進にあたってきた教育委員会では、「地域の絆づくり・地域の活性化」を選んだ担当者が100%であった。続いて「地域住民の生きがいづくりや自己実現」が82%、「教職員の勤務負担の軽減」が55%となっている。学校の担当者では、「児童生徒の学力の向上・学習意欲の向上」が58%、「地域の絆づくり・地域の活性化」が52%、「児童生徒の規範意識・コミュニケーション能力の向上」が43%と続いているが、「教職員の勤務負担の軽減」は21%にとどまっている。地域コーディネーターでは、「地域の絆づくり・地域の活性化」が68%で最も高く、続いて「教職員の勤務負担の軽減」が60%となっている。

このことから、教育委員会では、地域住民の活動の活性化を、学校では、児童生徒に対してよりよい効果が得られることを期待していたと考えられる。地域コーディネーターについては、「地域の絆づくり・地域の活性化」と「教職員の勤務負担の軽減」を上位にしていることから、学校と地域の両者をつなぐ立場であることを初めから強く意識していたことが分かる。また、教育委員会、学校、地域コーディネーターの三者とも、「地域の絆づくり・地域の活性化」を選んだ割合が高く、事業の大きな目的が「地域づくり」であることがそれぞれに認識されていたことがうかがえる。

その他自由記述

(教育委員会)

教員の資質向上のため(教材研究の時間の確保・大人とのコミュニケーション力向上)。教員や地域住民が子どもと向き合う時間の拡充。

(学校)

地域の教育力を生かし、学校教育の充実を図る。学校区が文科省の指定を受け、この事業を行うことになったため。地域との連携を深め、地域に根ざした開かれた学校づくりをすること。学校環境の維持向上のため。花壇整備・環境美化。

(コーディネーター)

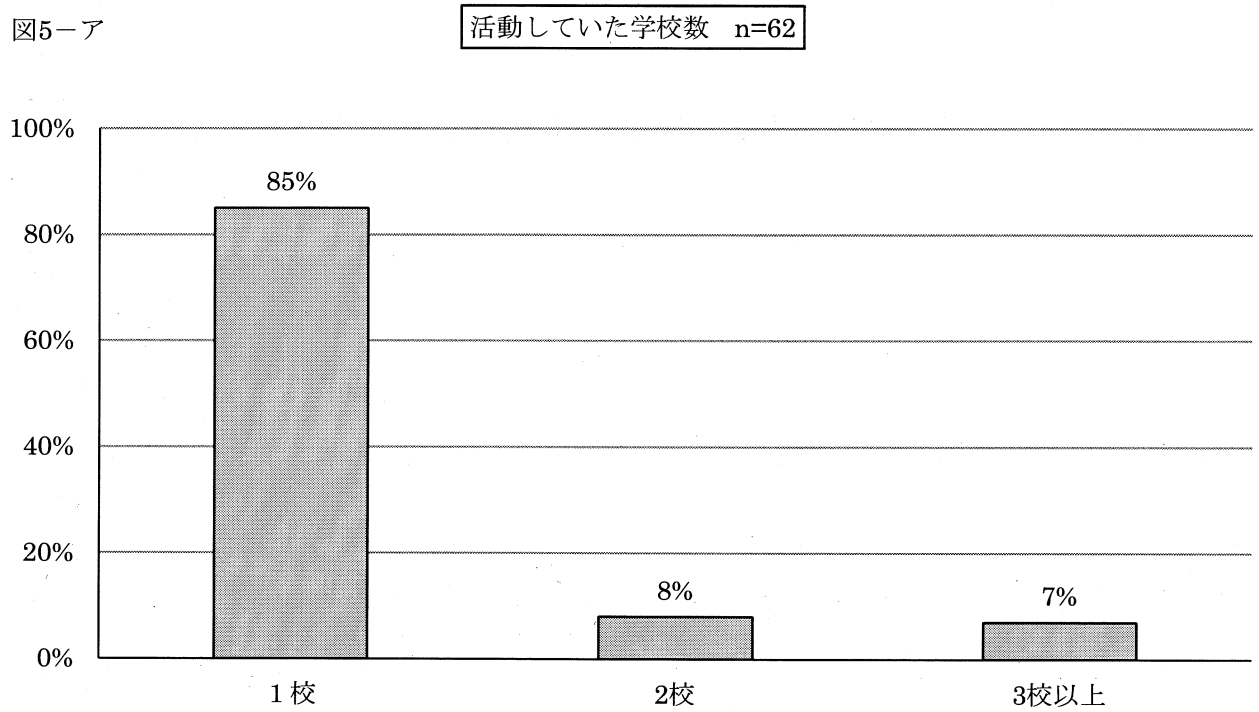
子どもたちに学校の中の常識や世界だけではなく、色々な価値観の人々に出会う体験をしてもらい、視野を広げ、大きな夢と希望を持って欲しいと思ったから。児童の健全育成を学校・ＰＴＡ・地域が一体で推進する。地域住民と小規模特認で通う人たちの交流を図るため。子どもたちの学び、育ちを豊かなものにするため、自分の力が貢献できると考えたので。

(5)　活動校数

ア　コーディネーターが活動した学校数

あなたが活動していた学校数はいくつですか。　　コーディネーター問１(2)

図5－ア

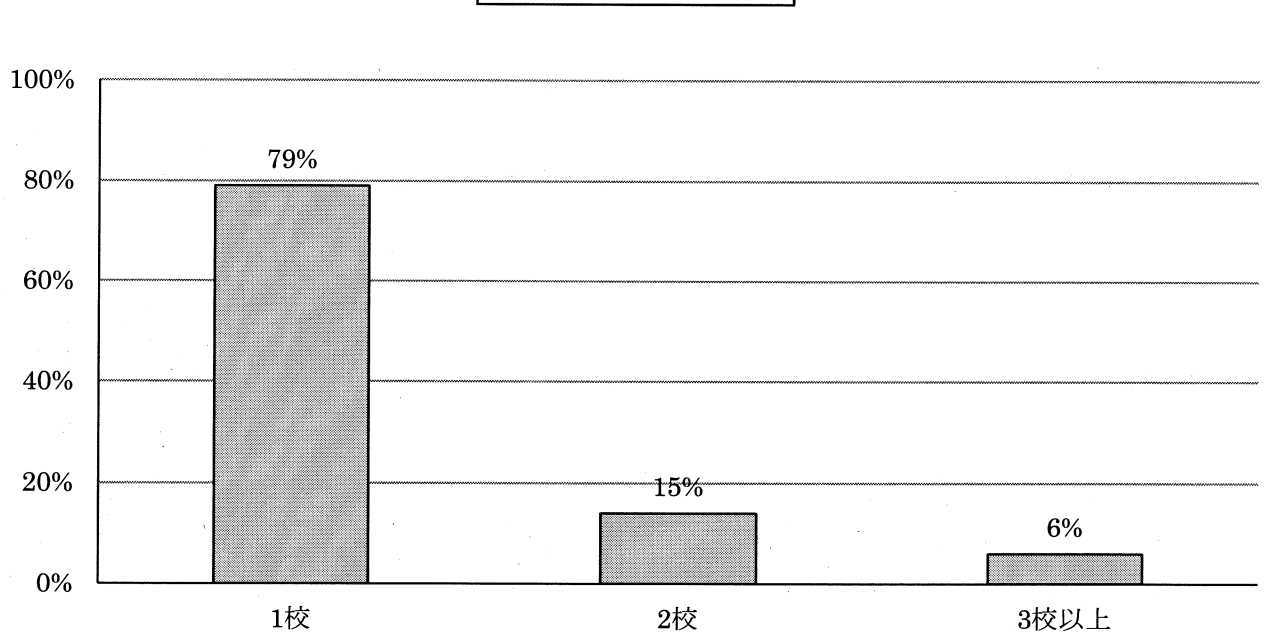


活動した学校数が１校のみのコーディネーターが85%と大半を占めていることが分かる。

イ　ボランティアが活動した学校数

(ボランティア) 活動している学校数は何校ですか。　　ボランティア問２(1)

図5－イ



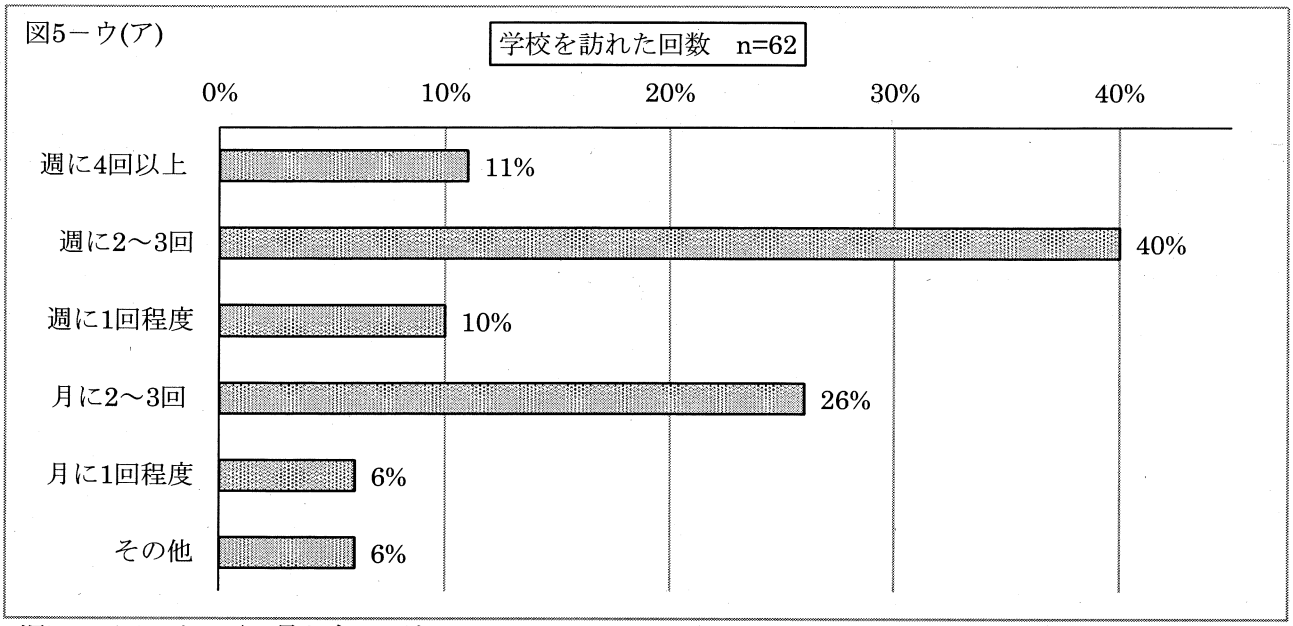
回答があったうち、79%のボランティアが１校のみの活動である。２校が15%、３校以上6%である。

ウ　学校訪問頻度

(ア)　コーディネーター

あなたが昨年度学校を訪れた回数はどのくらいですか。　　コーディネーター問１（6）

図5－ウ(ア)



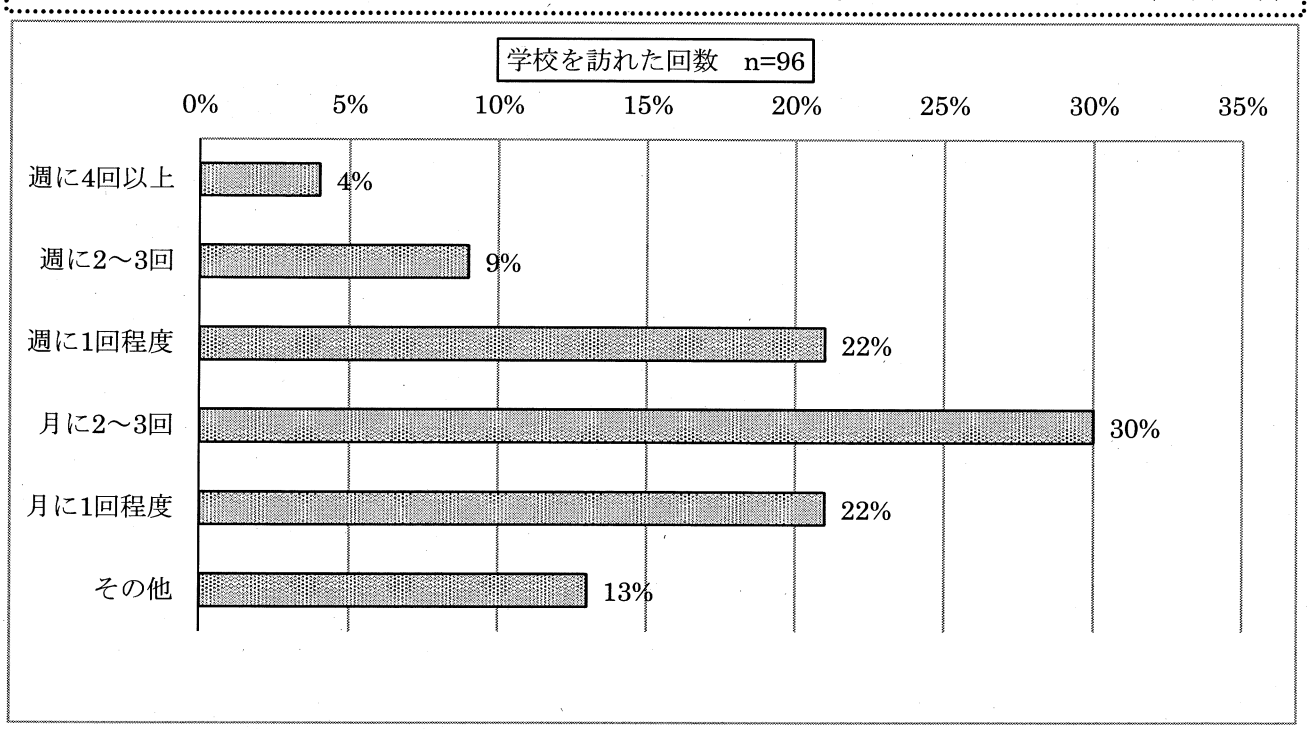
週に2～3回が40%で最も多い。続いて月に2～3回が26%で続く。

週に2～3回と週に4回以上とを合わせると、コーディネーターの約半数は週に2回以上は学校を訪れていたということができる。

その他・・・不定期。

(イ)　ボランティア

（ボランティア）あなたが昨年度学校を訪れた回数はどのくらいですか。　　ボランティア問２（2）



月に2～3回が30%、週に1回程度が22%、週に2～3回が9%と続き、週に4回以上というボランティアも4%みられる。その他年8回、年に5～6回、年に2回、自分のスケジュールがあったとき、時期により変動等。

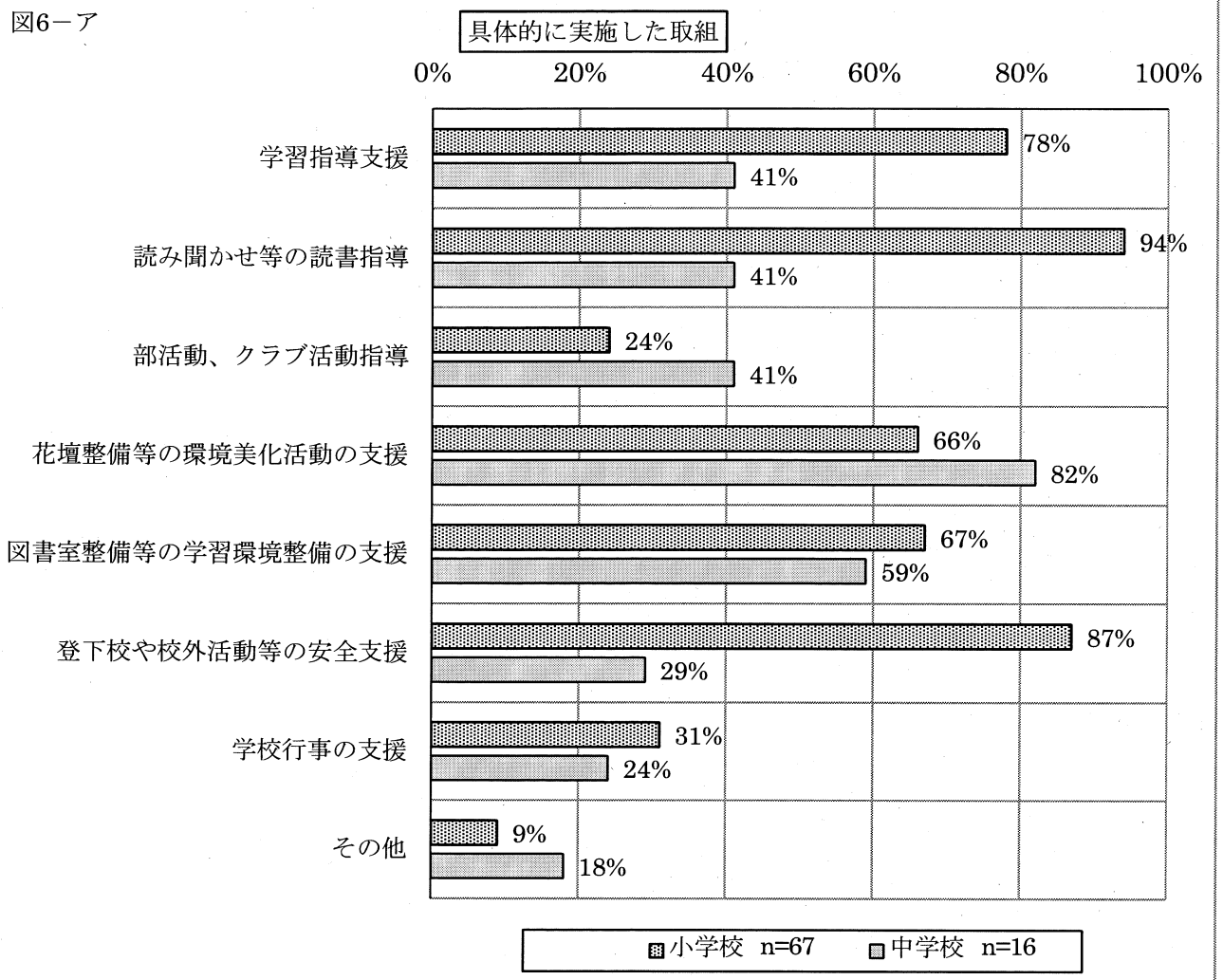
その他・・・年8回。年に5～6回。年に2回。自分のスケジュールが合ったとき。時期により変動。

(6) ボランティア活動の内容（取組）

ア 学校担当者回答

具体的に実施したのはどのような取組ですか。（あてはまるものすべて） 学校問１(5)

図6－ア



小学校では「読み聞かせ等の読書指導」を実施しているという回答が94%で最も高く、県内の各小学校で活発に活動されている様子がうかがえる。続いて「登下校や校外活動等の安全支援」が87%、「学習指導支援」が78%と、多くの小学校で実施されていることが分かる。「図書室整備等の学習環境整備の支援」と「花壇整備等の環境美化活動の支援」も、約３分の２の学校で取り組まれている。

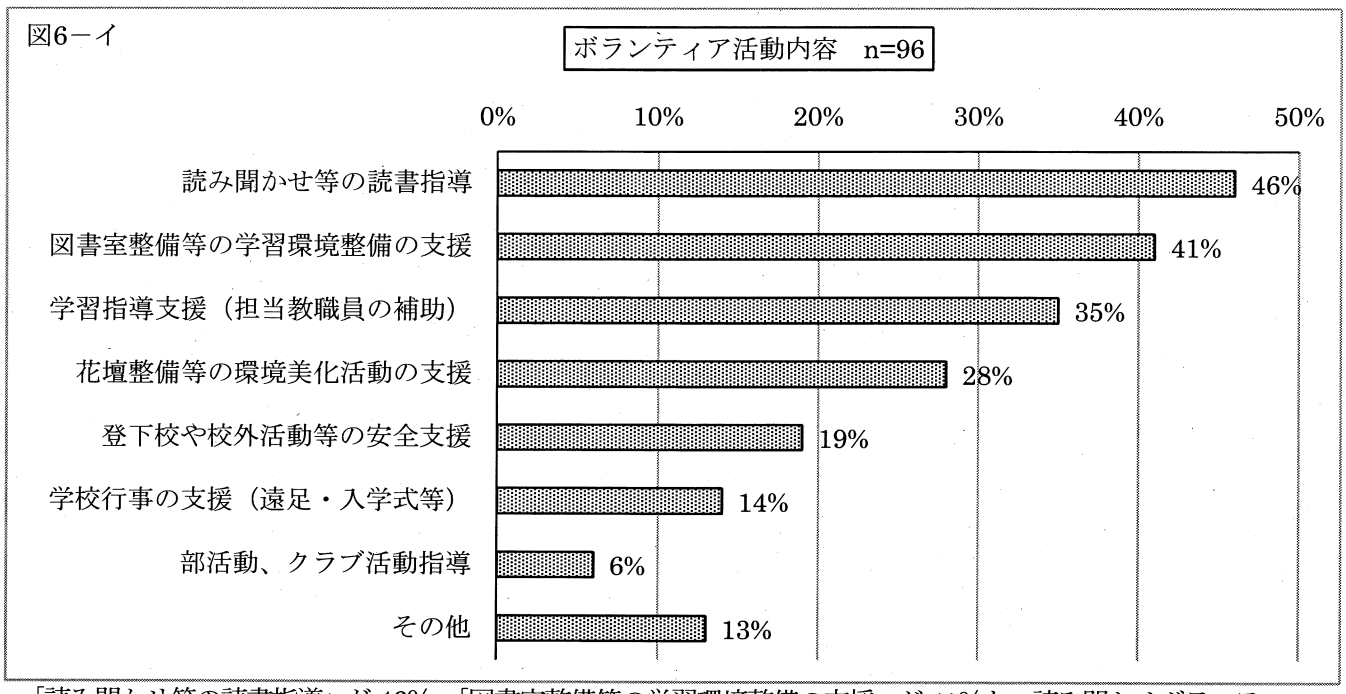
中学校では「花壇整備等の環境美化活動の支援」が82%で最も多く、「図書室整備等の学習環境整備の支援」が59%と、環境美化支援・環境整備支援等へのボランティアの取組が活発である様子が分かる。「部活動、クラブ活動指導」では、小学校が24%に対し、中学校は41%と、中学校の割合が高いことが分かる。

その他・・・学校宿泊体験。地域団体との交流。あいさつ運動。授業以外の体験活動の支援（昼休み・放課後・夏休み等）。
地域の行事への参加支援。

イ　学校支援ボランティア回答

学校支援ボランティアとしてどのような分野で活動していますか。　ボランティア問２（4）

図6－イ



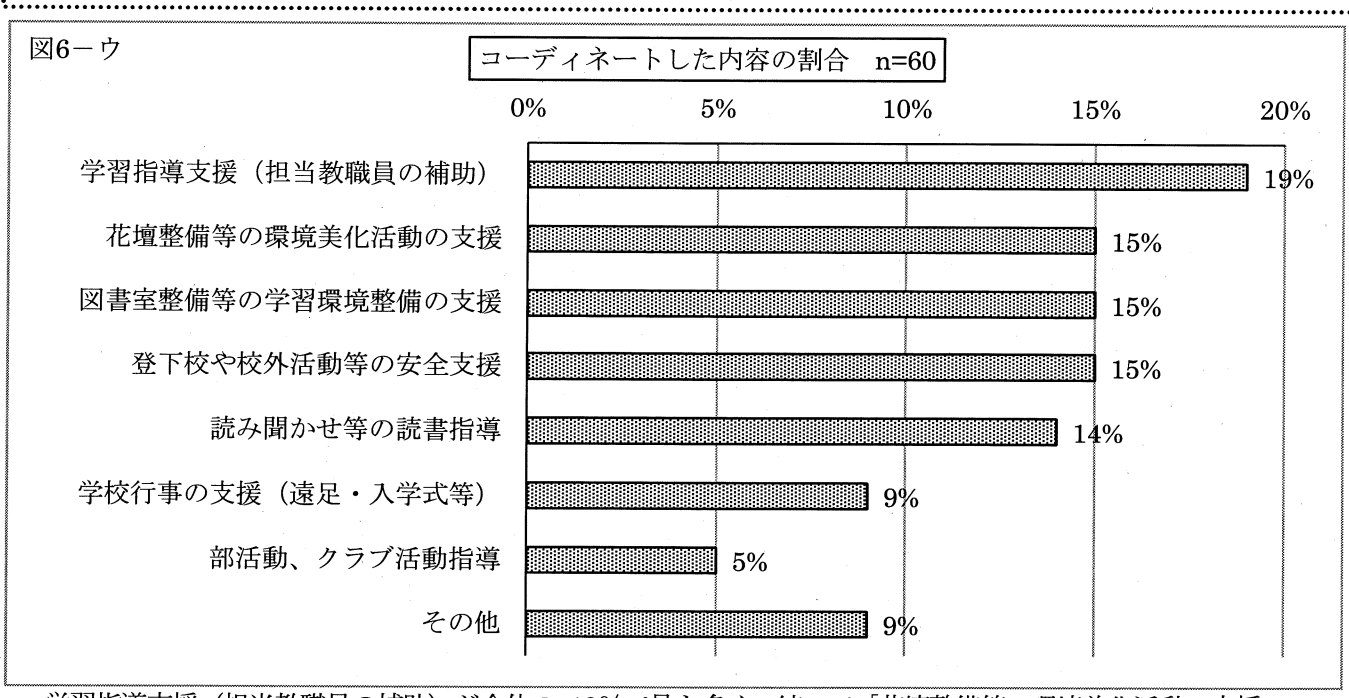
「読み聞かせ等の読書指導」が46%、「図書室整備等の学習環境整備の支援」が41%と、読み聞かせボランティアや図書ボランティア等が県内でよく組織化され、活発に活動している様子がうかがえる。続いて「学習指導支援」が35%であった。具体的な支援内容として「ミシンの学習の補助」という記述が複数みられた。

その他・・・昼休みの昔遊び支援 。学校農園管理の支援。パソコンボランティア。放課後子ども教室等の指導。

ウ　コーディネートした割合

具体的にコーディネートした内容の割合を全体が10になるようにお答えください。（全体の５割であれば5／10のように）　コーディネーター問１（12）

図6－ウ



学習指導支援（担当教職員の補助）が全体の19%で最も多く、続いて「花壇整備等の環境美化活動の支援」、「図書室整備等の学習環境整備支援」、「登下校や校外活動等の安全支援」がいずれも15%であった。

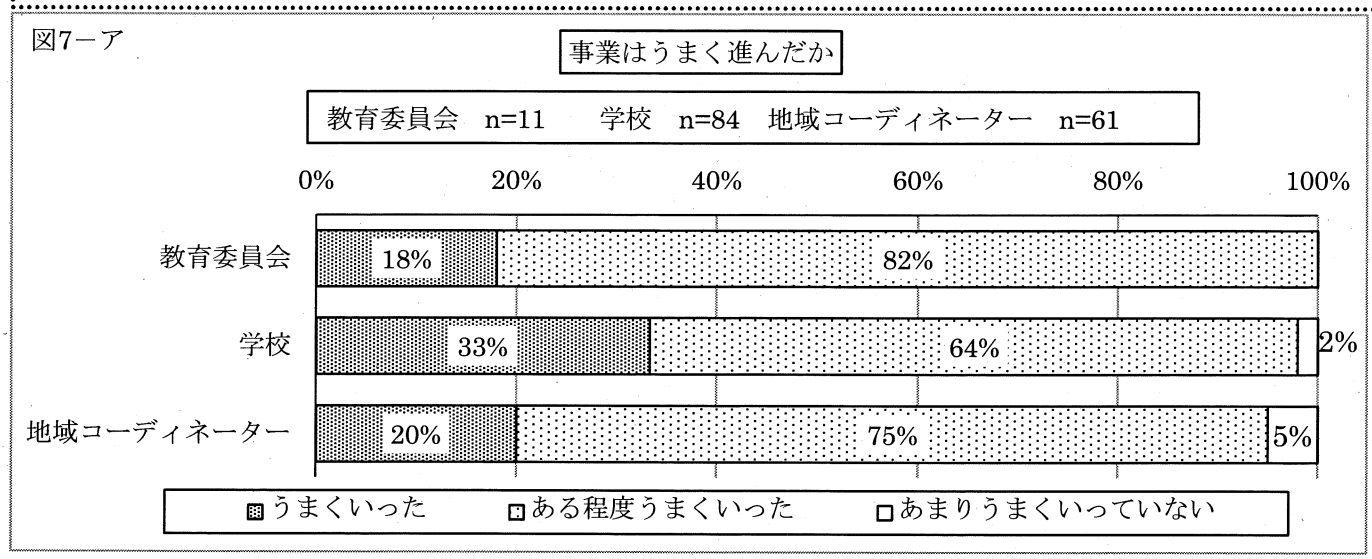
その他・・・豆腐作り・そば打ち・土器作り等の体験活動。児童英検・数研・漢検の事務局。

(7) 事業の進ちょく状況

ア　教育委員会・学校・地域コーディネーターから

事業（活動）はうまく進みましたか。（どれか１つ）　　教委問１（3）　学校問１（3）　コーディネーター問１（9）

図7－ア



イ　うまくいった理由

うまくいった理由は何ですか。（主なもの３つ）　　教委問１（4）　学校問１（3）　コーディネーター追加

図7－イ

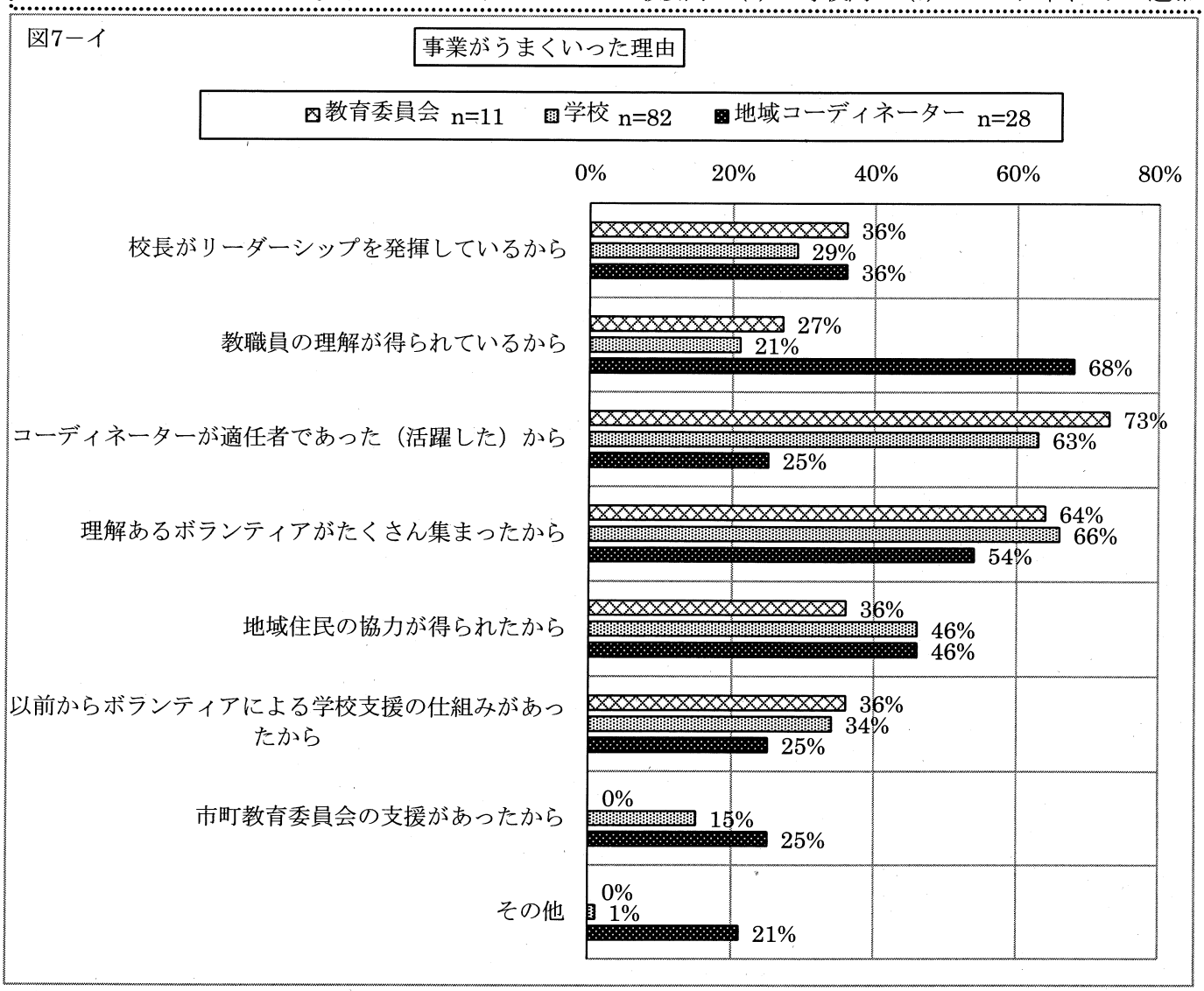


図 7ーアから、教育委員会・学校・地域コーディネーターからの事業の評価についての回答では、「うまくいった・ある程度うまくいった」の割合が、教育委員会 100%、学校 98%、地域コーディネーターは 95%と高い割合であり、いずれも事業がうまくいったと実感していることが分かる。

また、事業が「うまくいった」と回答した理由として図 7ーイから、「理解あるボランティアがたくさん集まったから」を、教育委員会担当者 64%、学校担当者 66%、地域コーディネーター54%と、いずれも半数以上の高い割合で選んでいることが分かる。また、地域コーディネーターは「理解あるボランティアが集まったから」の他に、「教職員の理解が得られているから」を選んだ割合が 68%と高いことが分かる。さらに、「コーディネーターが適任者であったから」については、教育委員会 73%と最も高く、学校も 63%と高い割合で選んでいる。

「理解あるボランティアがたくさん集まった」「教職員の理解が得られた」ということは、それぞれの理解を促してきた地域コーディネーターの努力によるものである。このことから、事業がうまくいった理由をまとめると、教育委員会と学校の指摘のとおり、優れた地域コーディネーターの活躍により、教職員やボランティアの理解が得られたからということができよう。

その他・・・うまくいった理由　地域コーディネーター自由記述より抜粋

- 副校長先生だけでなく、教職員全員が信頼してくれていたこと。
- 月に一度のコーディネーター会議を行ったこと。
- 日頃より地域や社会活動に熱心に活動されている地域住民の方々の理解と協力。
- なるべく早く広報紙により、みんなに伝えること。
- コーディネーターが動きやすい環境の学校なので。
- 保護者やボランティアの意見・感想を吸い上げたり、教職員のニーズ（独り言）を拾うようにした。
- 地域全体で盛り上がっている。
- 校長・副校長・コーディネーターのコミュニケーション・意思統一がうまく行ったこと。
- コーディネーターどうしが連携しており、２か月に１度のペースで全体会議。
- 定期的（月１回実施）にコーディネーター会議を行ったこと。
- コーディネーター間の人間関係がうまくいっている。
- 世代を超えて小学校に愛着のある人が数多く住んでいる。
- 協議会長、学校長、ＰＴＡ会長、そしてコーディネーター間で大変コミュニケーションがうまくとれている。
- 以前から地域の皆さんの協力がある。
- 共通のくくりができたため横の協力体制や情報の共有化ができるようになった。

ウ　うまくいかなかった理由

うまくいかなかった理由は何ですか。(主なもの３つ)　　教委問１(5)　学校問１(4)　コーディネーター追加

表　事業がうまくいかなかった理由　(学校ｎ＝2　地域コーディネーターｎ＝3)

理　由	学　校	コーディネーター
教職員の理解が得られなかったから		2名
教職員の負担が大きかったから		1名
コーディネーターが十分力を発揮できなかったから	2名	3名
ボランティアに参加する地域住民が少なかったから	1名	1名
活動費の使い勝手がよくなかったから	1名	

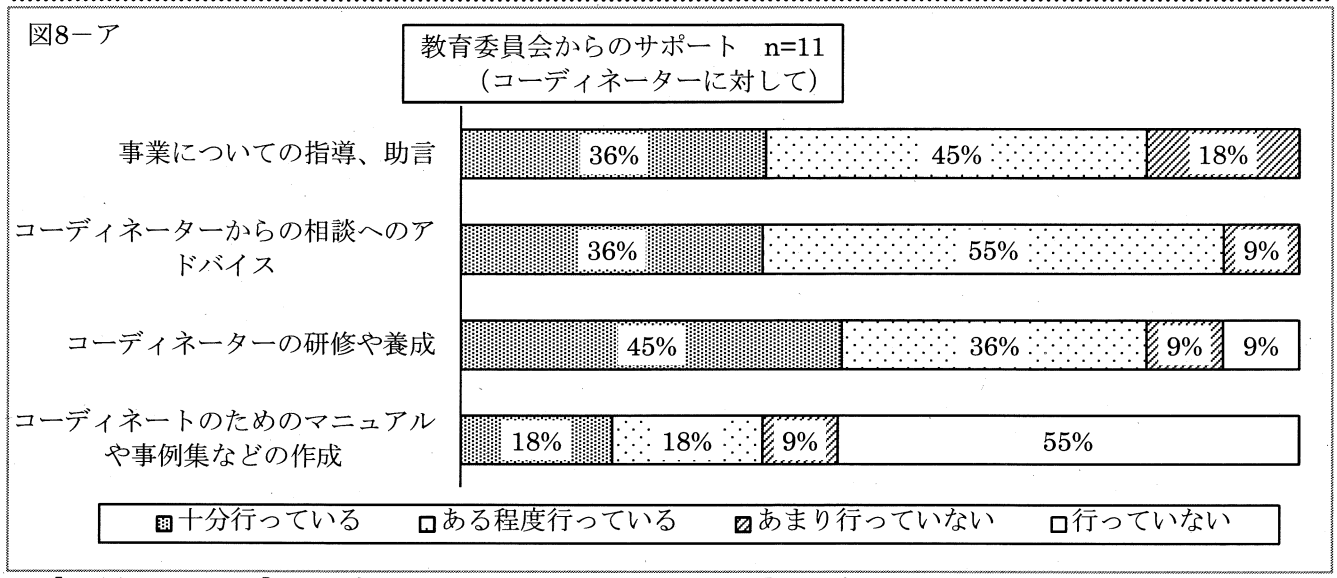
事業がうまくいかなかった理由として「コーディネーターが十分に力を発揮できなかったから」を学校、地域コーディネーター合わせて５名が選んでいる。「教職員の理解が得られなかったから」「ボランティアに参加する地域住民が少なかったから」についても複数の回答があった。

(8) 教育委員会からのサポート

ア 地域コーディネーターへのサポート

地域コーディネーターへのサポートについておたずねします。 教委問2 (1)

図8－ア

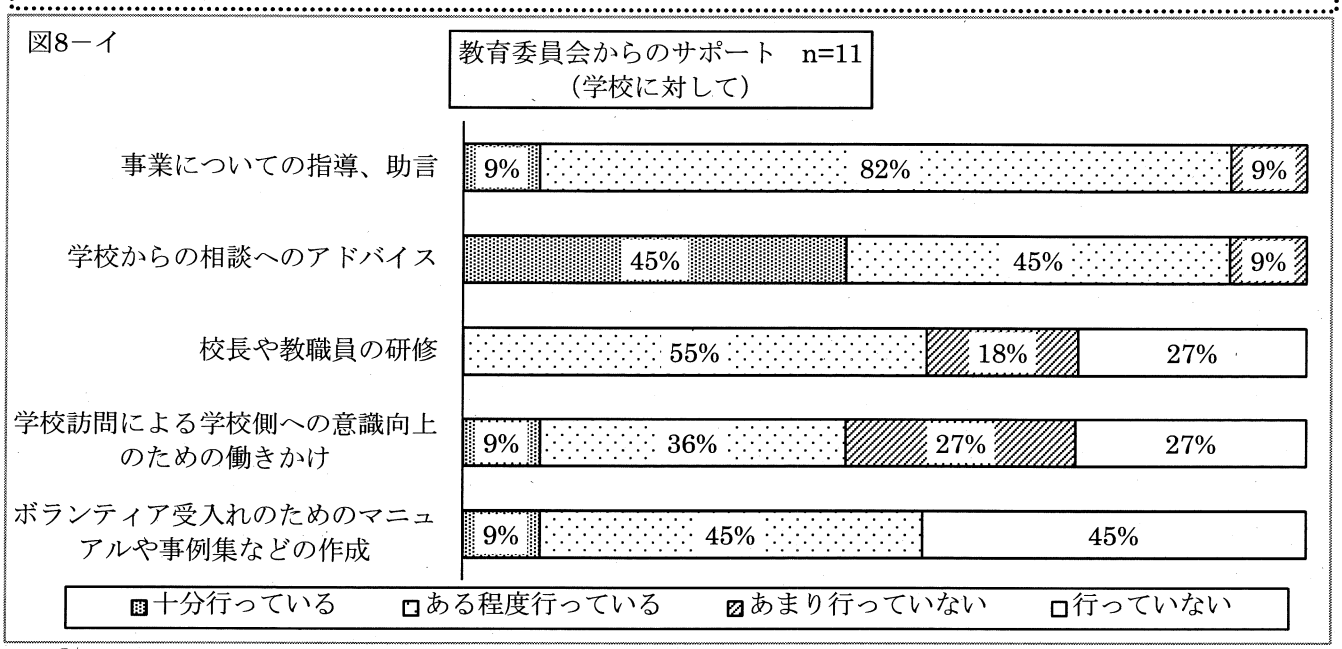


「十分行っている」「ある程度行っている」と回答した割合では、「コーディネーターからの相談へのアドバイス」が91%、「コーディネーターの研修や養成」「事業についての指導、助言」がいずれも81%である。特に「コーディネーターの研修や養成」については45%の教育委員会が「十分行っている」」と回答し、積極的にサポートしていたことが分かる。「コーディネートのためのマニュアルや事例集などの作成」については「十分行っている」「ある程度行っている」は36%であった。

イ 学校へのサポート

学校へのサポートについておたずねします。 教委問2 (2)

図8－イ



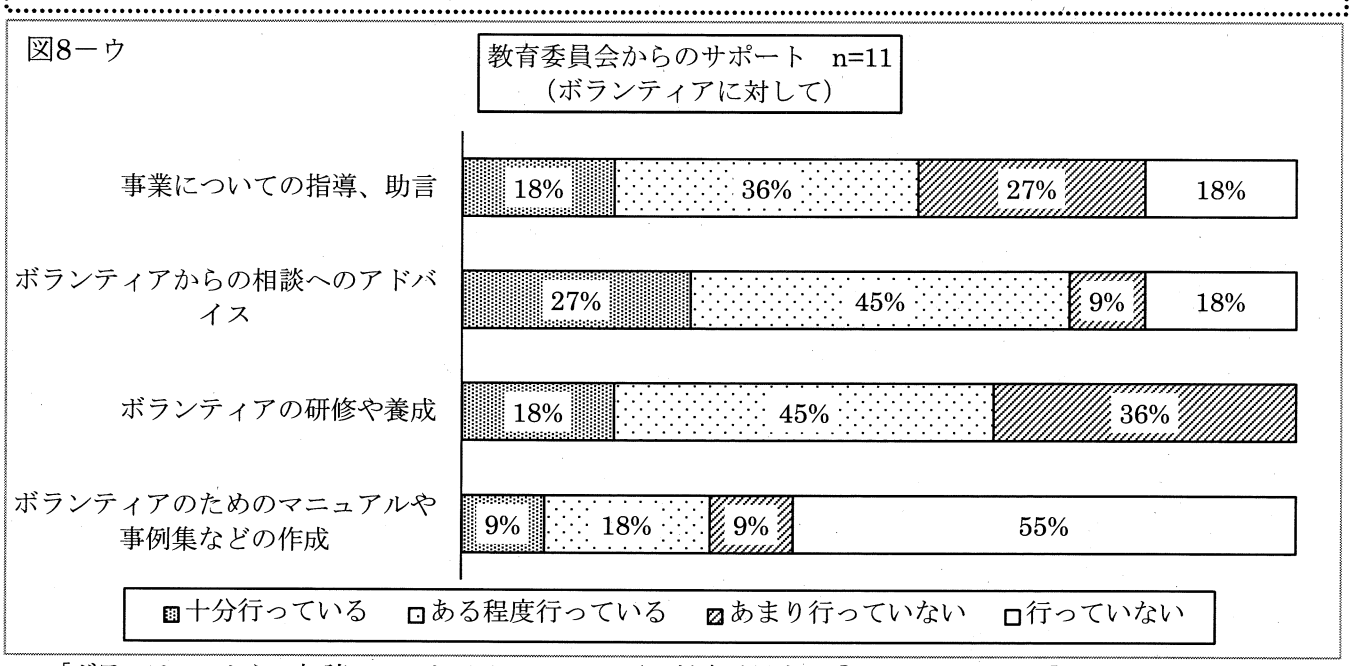
「十分行っている」の割合で見ると、「学校からの相談へのアドバイス」は45%であるが、「事業についての指導・助言」「学校訪問による学校側への意識向上のための働きかけ」「ボランティア受入れのためのマニュアルや事例集などの作成」については、9%（1市）だけであった。「校長や教職員の研修」については「十分行っている」と回答した教育委員会はなかった。

これらの様子から、教育委員会から学校へのサポートは、学校側からの問い合わせや相談に応じて行ったり、学校側の負担に配慮したりするサポートが中心であった様子がうかがえる。

ウ　ボランティアへのサポート

ボランティアへのサポートについておたずねします。　教委問２（3）

図8－ウ

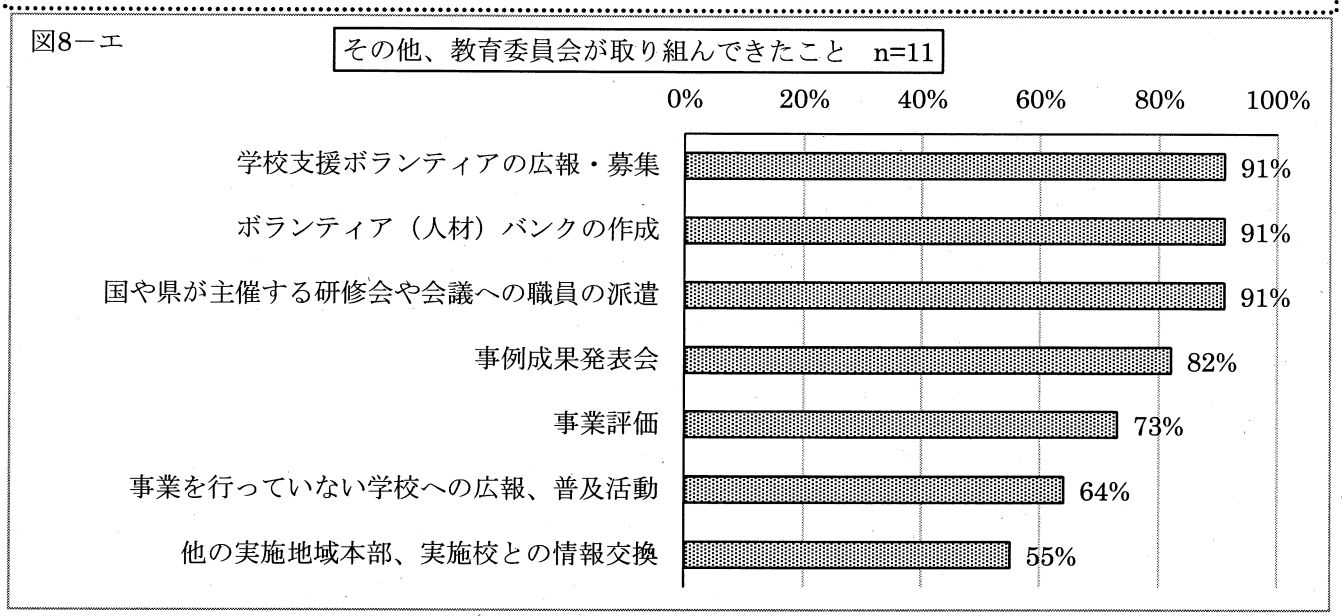


「ボランティアからの相談へのアドバイス」は、72%の教育委員会が「十分行っている」「ある程度行っている」と回答している。「ボランティアの研修や養成」については、63%の教育委員会が「十分行っている」「ある程度行っている」と回答している。一方、「ボランティアのためのマニュアルや事例集などの作成」については、「十分行っている」「ある程度行っている」を合わせて、27%にとどまっている。

エ　その他のサポート

その他、貴教育委員会が取り組んできたことは何ですか。（あてはまるものすべて）　教委問２（4）

図8－エ

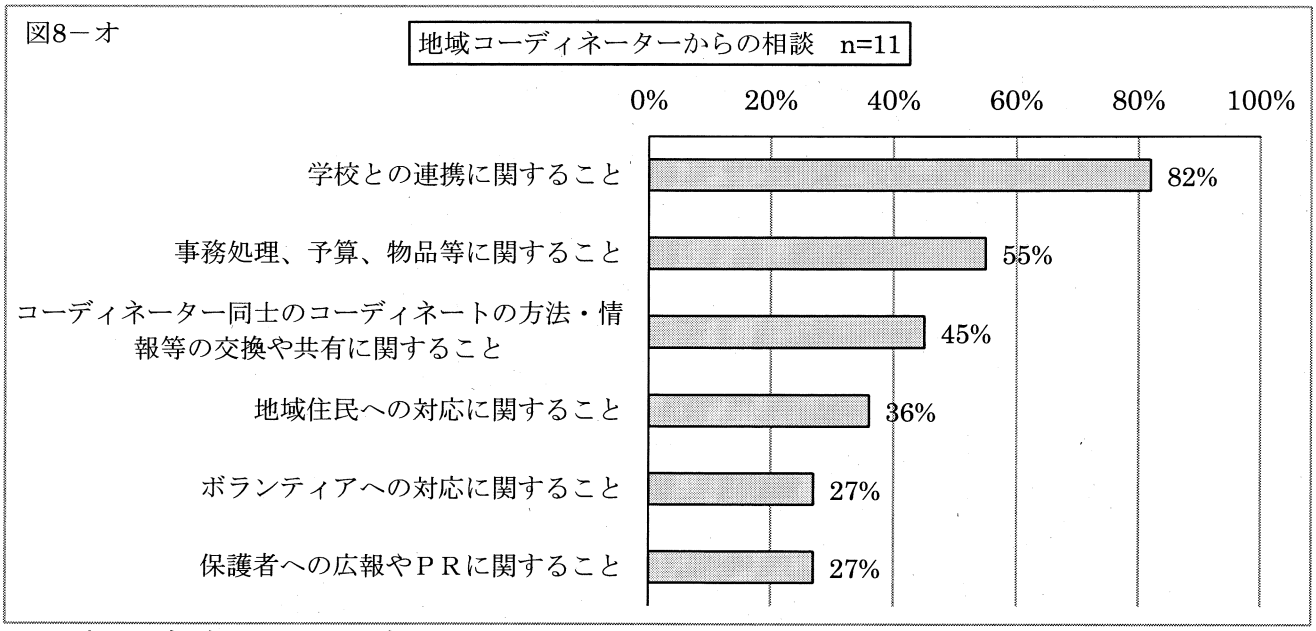


「学校支援ボランティアの広報・募集」「ボランティア（人材）バンクの作成」「国や県が主催する研修会や会議への職員の派遣」については 91%と、高い割合で取り組まれている。「事例成果発表会」82%、「事業評価」73%と続いている。教育委員会は、ボランティアの募集・人材バンク作成や先進事例の紹介等により、側面から実際の活動を支援していた姿がうかがえる。

オ　地域コーディネーターからの相談内容

地域コーディネーターからは主にどのような相談がありましたか。(3つまで)　教委問2 (5)

図8－オ

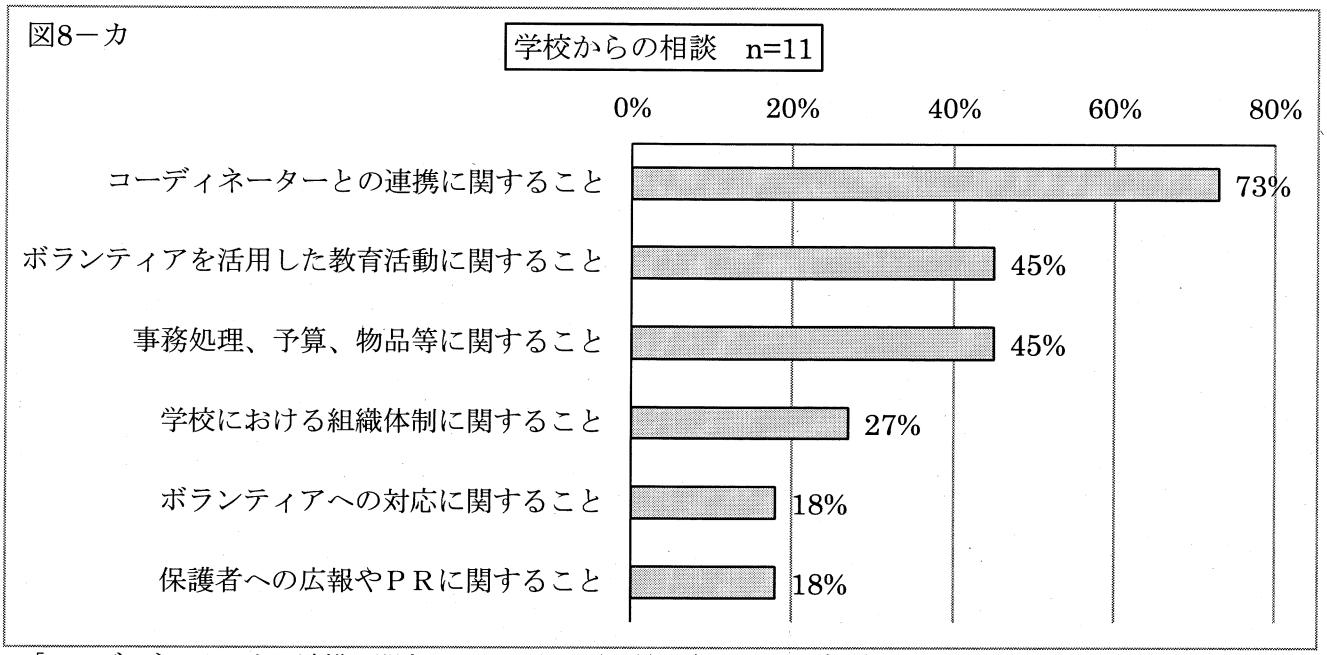


地域コーディネーターから教育委員会に寄せられた相談内容である。「学校との連携に関すること」が82%と最も多い。この事業によって配置されることとなった地域コーディネーターにとって、学校（教職員）との連携に戸惑いや課題があった様子がうかがえる。同時に、教育委員会担当者は地域コーディネーターのよき相談相手として活動を支えていたことが想像できる。

カ　学校からの相談内容

学校からは主にどのような相談がありましたか。(3つまで)　教委問2 (6)

図8－カ



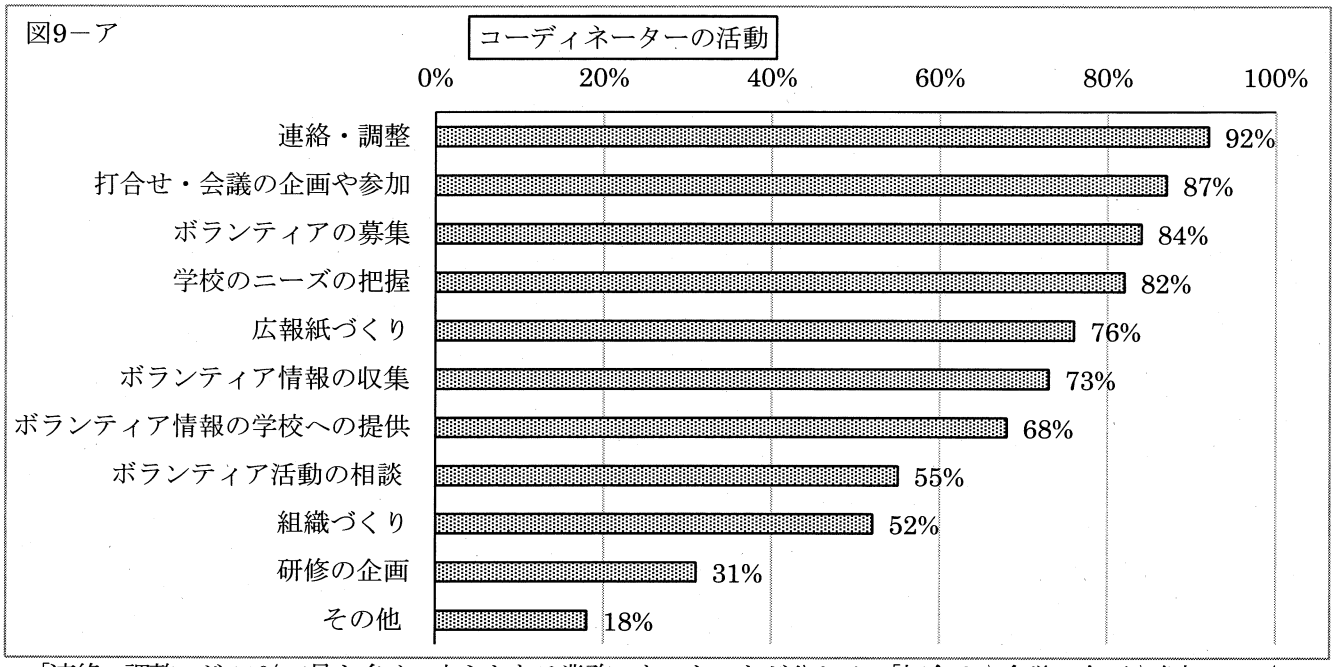
「コーディネーターとの連携に関すること」が73%と最も多い。コーディネーターが学校との連携に戸惑いを感じていたことと同様に、学校も地域コーディネーターとの連携に戸惑いや課題があったことが分かる。「ボランティアを活用した教育活動に関すること」「事務処理、予算、物品等に関すること」が45%と続く。

(9)　コーディネーターの業務

ア　具体的な活動

具体的にどのような活動をしましたか。（あてはまるものすべて）　コーディネーター問１（11）

図9－ア



「連絡・調整」が92%で最も多く、中心となる業務であったことが分かる。「打合せや会議の企画や参加」87%、「ボランティアの募集」84%、「学校のニーズ把握」82%と続く。

「広報紙作り」「ボランティアの募集」等、ボランティアとしての協力を積極的に働きかけたり、「学校のニーズの把握」「ボランティア情報の収集」「ボランティア情報の学校への提供」等、学校がボランティアによる活動を取り入れやすくなるよう努めたりと、事業の直接の推進役として活躍していた様子がうかがえる。

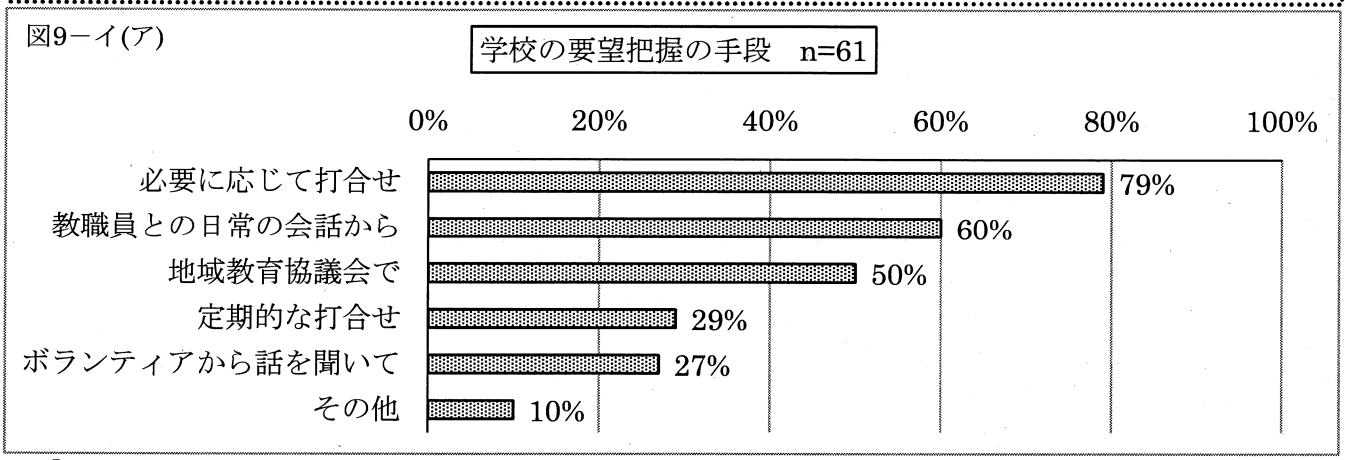
その他・・・講座の講師。地域イベント参加。

イ　コーディネーターが要望を把握した手段

(ア)　学校の要望

学校の要望はどのように把握しましたか。（あてはまるものすべて）　コーディネーター問２（1）

図9－イ(ア)



「必要に応じての打合せ」からが79%で最も多く。次いで「教職員との日常の会話から」が60%となっている。多忙な学校の中で、地域コーディネーターが教員とコミュニケーションを図ってよい人間関係作りに努め、効果的に時間を見つけて学校側の要望を把握していた様子がうかがえる。

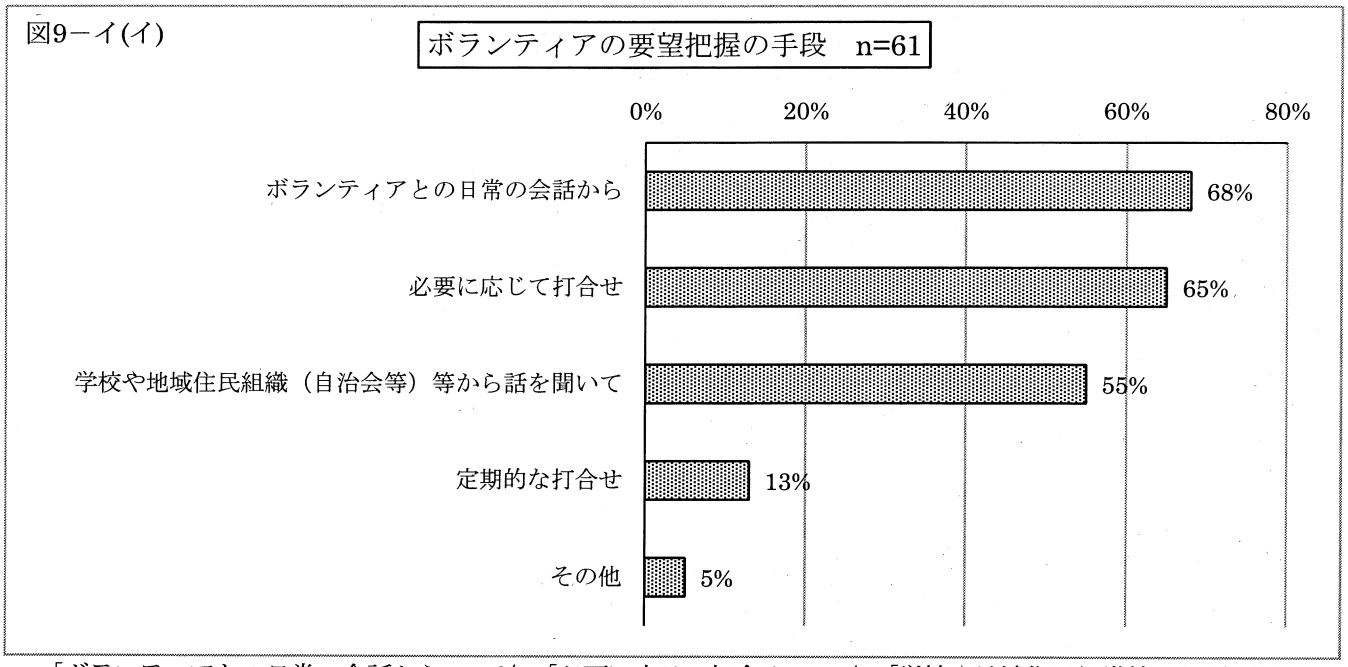
また、地域教育協議会で要望を把握したが50%と比較的高い割合を示していることから、協議会が情報交換の場としても機能していたことが分かる。

その他・・・コーディネーターから提案して許可を得た。アンケートを採った。現職教育で話し合った。

(イ) ボランティアの要望

ボランティアの要望はどのように把握しましたか。(あてはまるものすべて)　　コーディネーター問２ (2)

図9－イ(イ)



「ボランティアとの日常の会話から」68%、「必要に応じて打合せ」65%、「学校や地域住民組織等から話を聞いて」55%と続く。地域コーディネーターがボランティアと積極的に交流しながら要望の把握に努めていたことが分かる。

その他・・・ボランティア活動に立ち会って。地域協議会で。ボランティアとの交流会で。

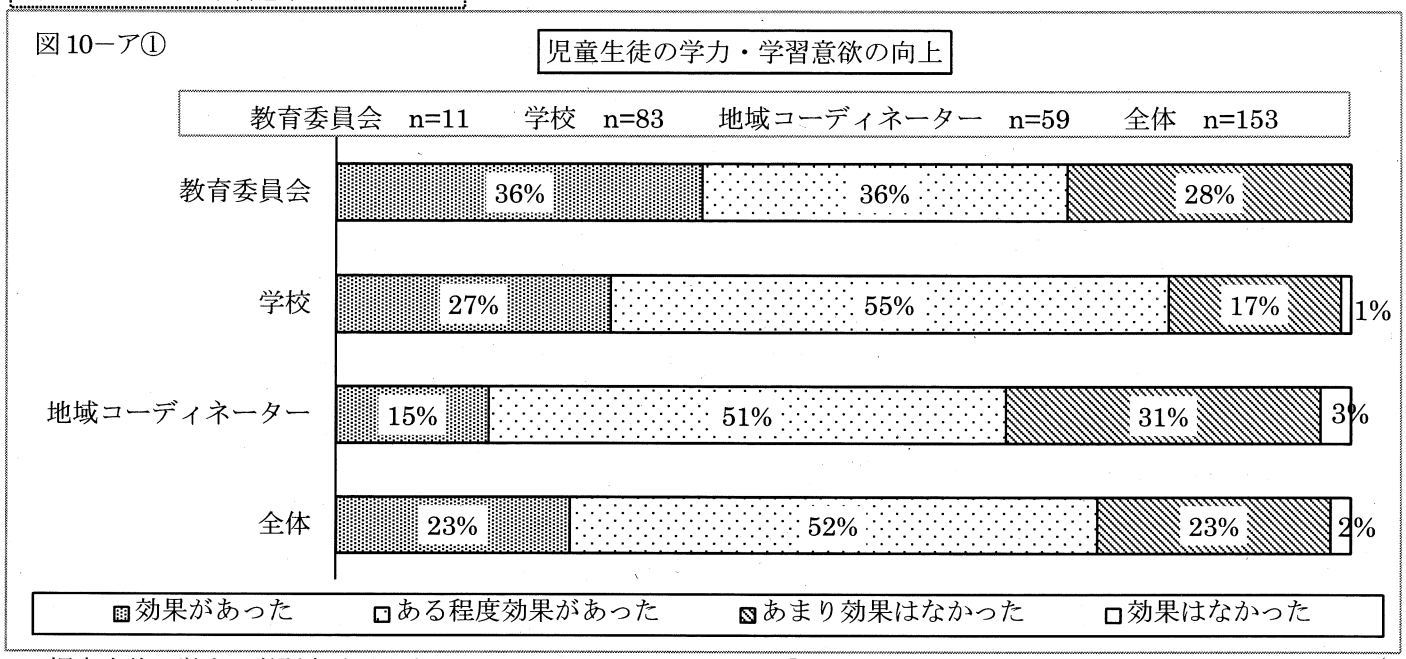
(10)　事業の効果

活動の効果について、ア　効果があった　イ　ある程度効果があった　ウ　あまり効果はなかった　エ　効果はなかったのいずれかでお答えください。　教委問１（6）学校問２（1）コーディネーター問１(10)

ア【児童生徒】　教育委員会、学校、地域コーディネーターからの回答

①児童の学力や学習意欲が向上した

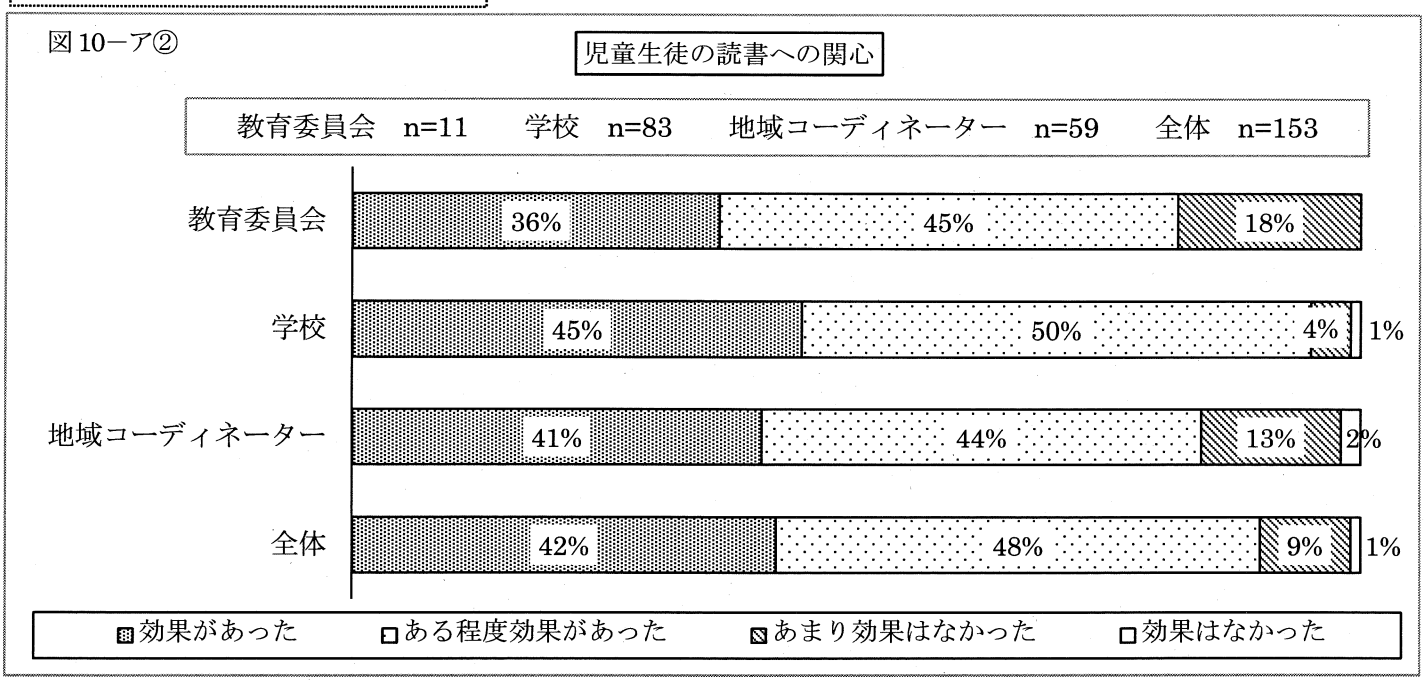
図 10－ア①



児童生徒の学力・学習意欲が向上したかについての項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」を選んだ割合を合わせると、教育委員会では 72%、学校 82%、地域コーディネーター66%、全体が 75%である。この項目を事業目的として第１に選んだ「学校」が最も高い割合で効果を認めている。

②児童生徒の読書への関心が高まった

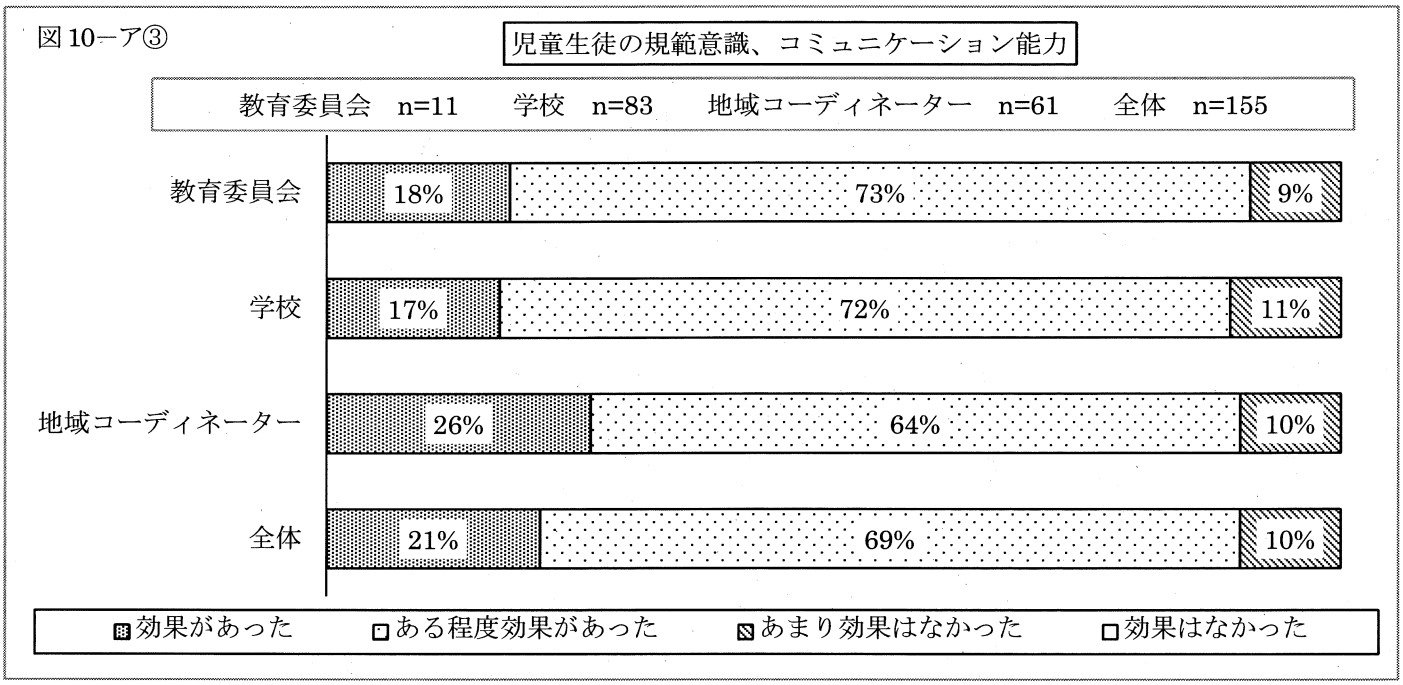
図 10－ア②



児童生徒の読書への関心が高まったかについての項目である。「効果があった」を選んだ割合は、教育委員会 36%、学校 45%、地域コーディネーター41%、全体 42%である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」を選んだ割合を合わせると、教育委員会 82%、学校 95%、地域コーディネーター85%、全体が 90%である。

③児童生徒の規範意識、コミュニケーション能力が向上した（あいさつなど）

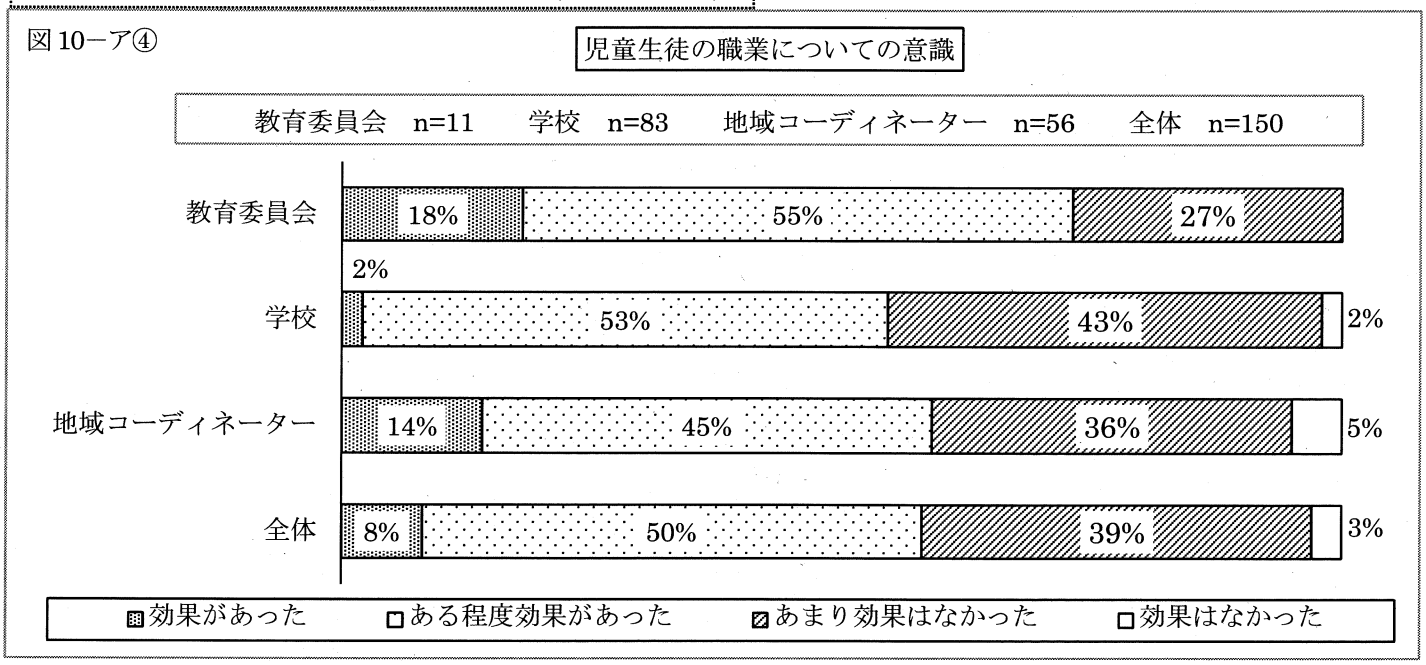
図10－ア③



あいさつ等、児童生徒の規範意識、コミュニケーションの能力が向上したかについての項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」を選んだ割合を合わせると、教育委員会 91%、学校 89%、地域コーディネーター90%、全体が 90%と、いずれもほぼ 90%が効果を認めている。

④児童生徒の職業についての意識が向上した（あいさつなど）

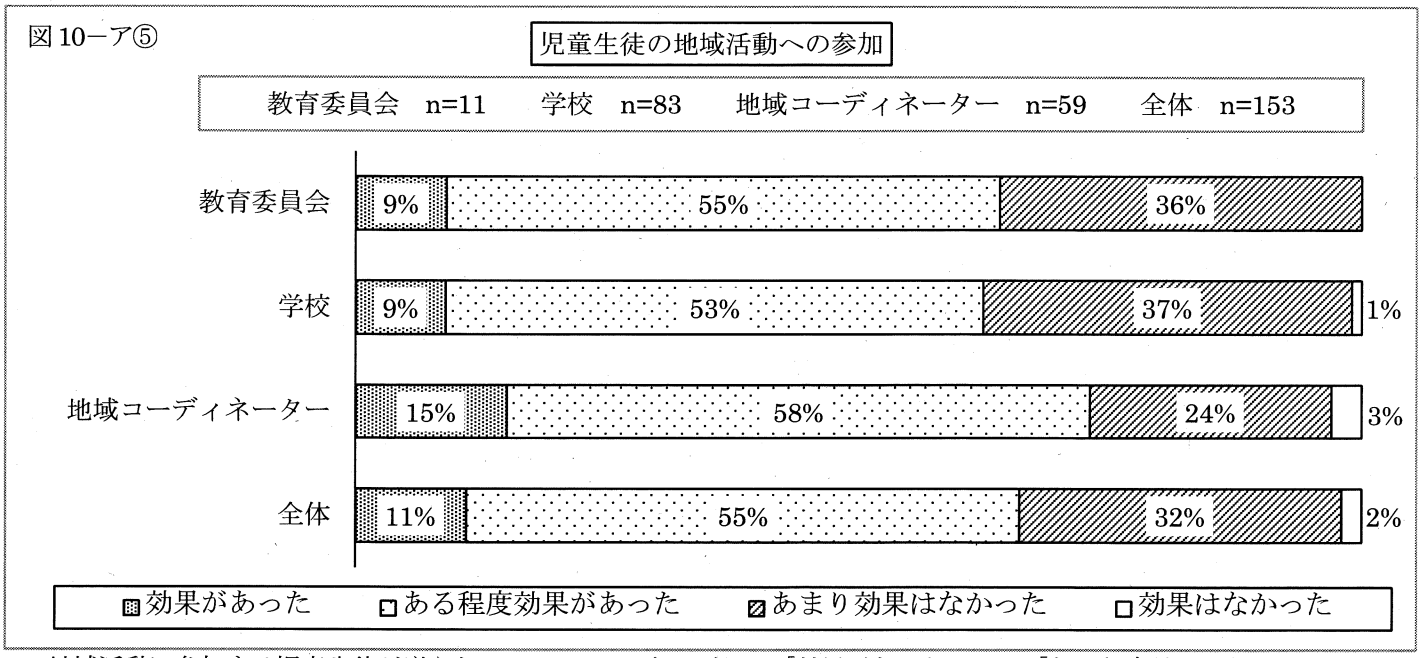
図10－ア④



子どもたちが地域住民とのかかわりをとおして、「人の役に立つことをしたい」等、職業についての意識が向上したかということについての項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」を選んだ割合を合わせると、教育委員会 73%、学校 55%、地域コーディネーター59%、全体が 58%であった。

⑤地域活動に参加する児童生徒が増えた

図10－ア⑤

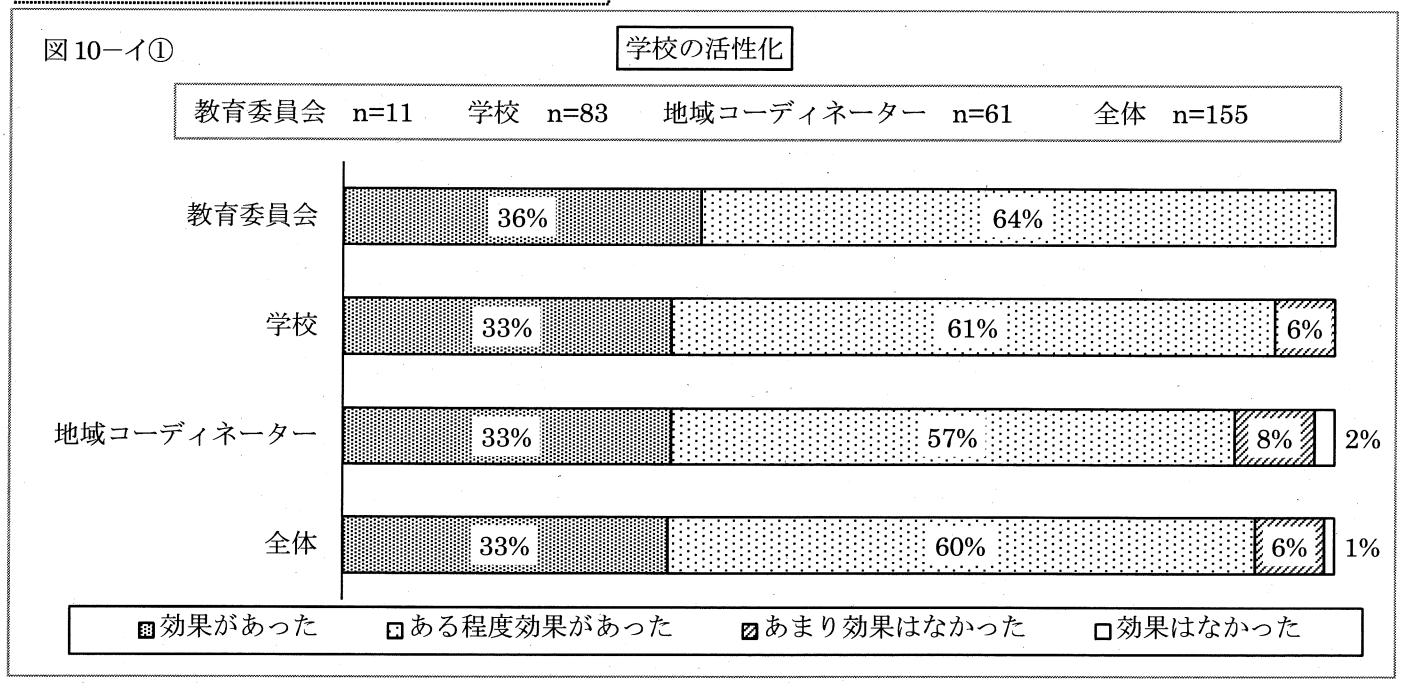


地域活動に参加する児童生徒が増えたかについての項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」の割合を合わせると、教育委員会64%、学校62%、地域コーディネーター73%、全体が66%であった。

イ【学校・教職員】 教育委員会、学校、地域コーディネーターからの回答

①ボランティアが入ることで学校が活性化した

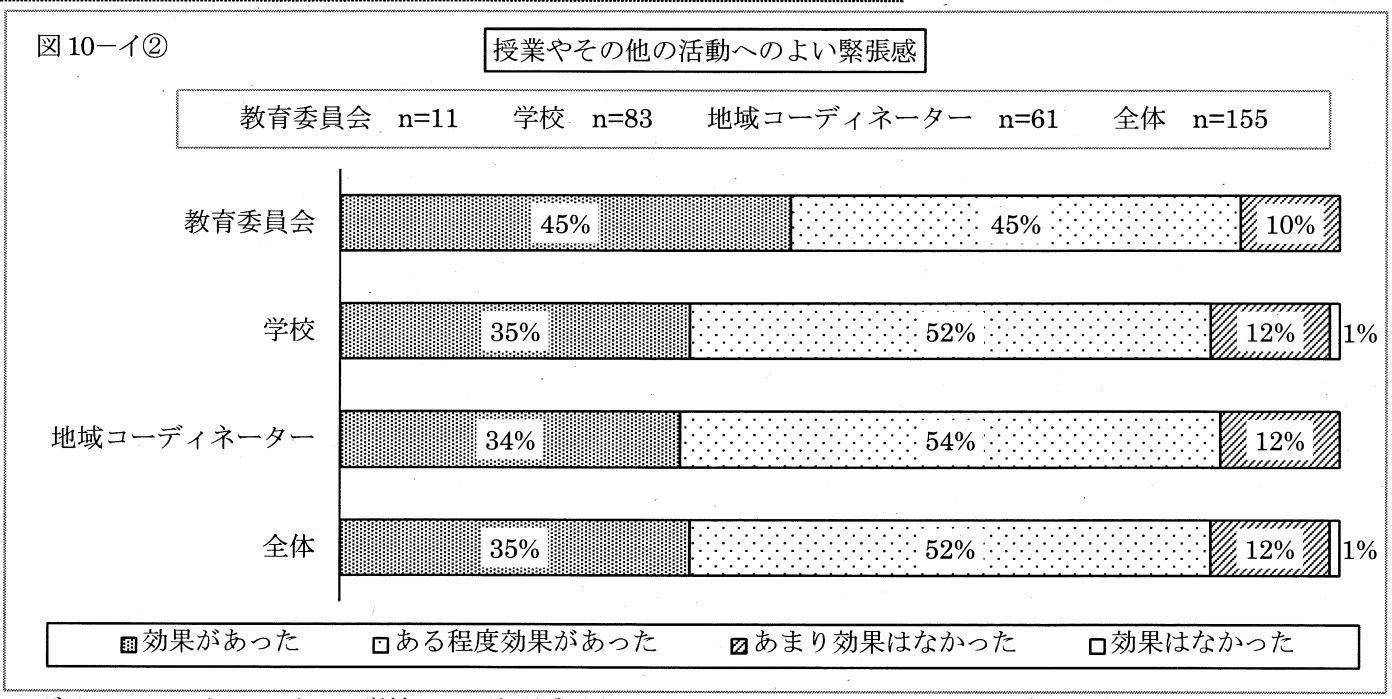
図10－イ①



ボランティアが入ることで学校が活性化したかについての項目である。教育委員会は100%、学校は94%、地域コーディネーターは90%、全体は93%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

②ボランティアが入ることで授業やその他の活動に、よい緊張感が生まれた

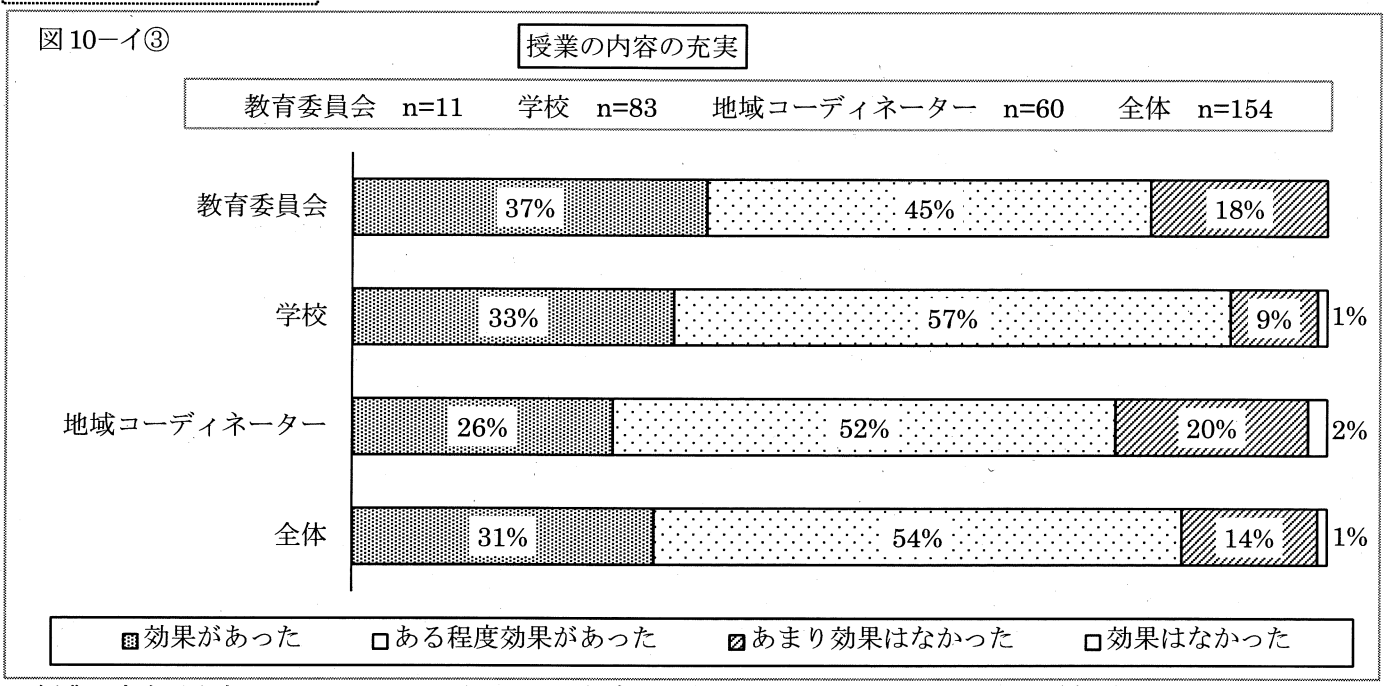
図10ーイ②



ボランティアが入ることで、学校によい緊張感が生まれたかについての項目である。教育委員会は90%、学校は87%、地域コーディネーターは88%、全体では87%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

③授業の内容が充実した

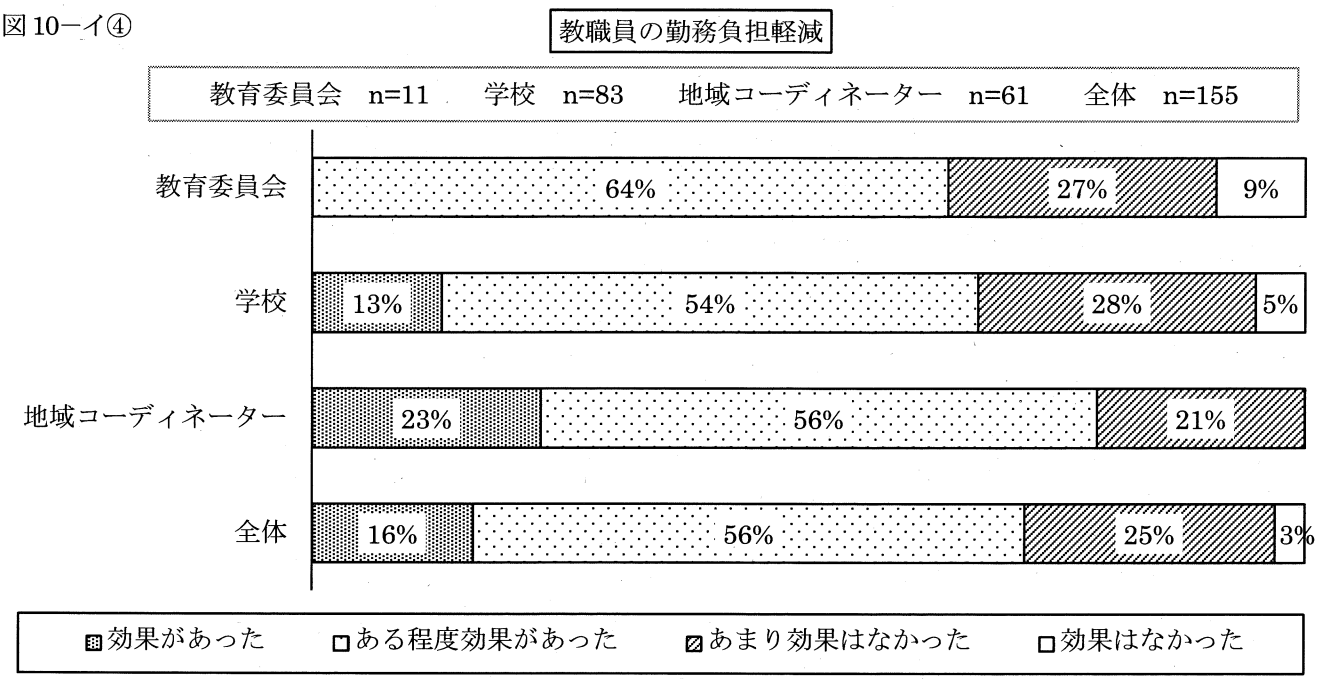
図10ーイ③



授業の内容が充実したかについての項目である。教育委員会は82%、学校は90%、地域コーディネーターは78%、全体では85%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

④教職員の負担が軽減された

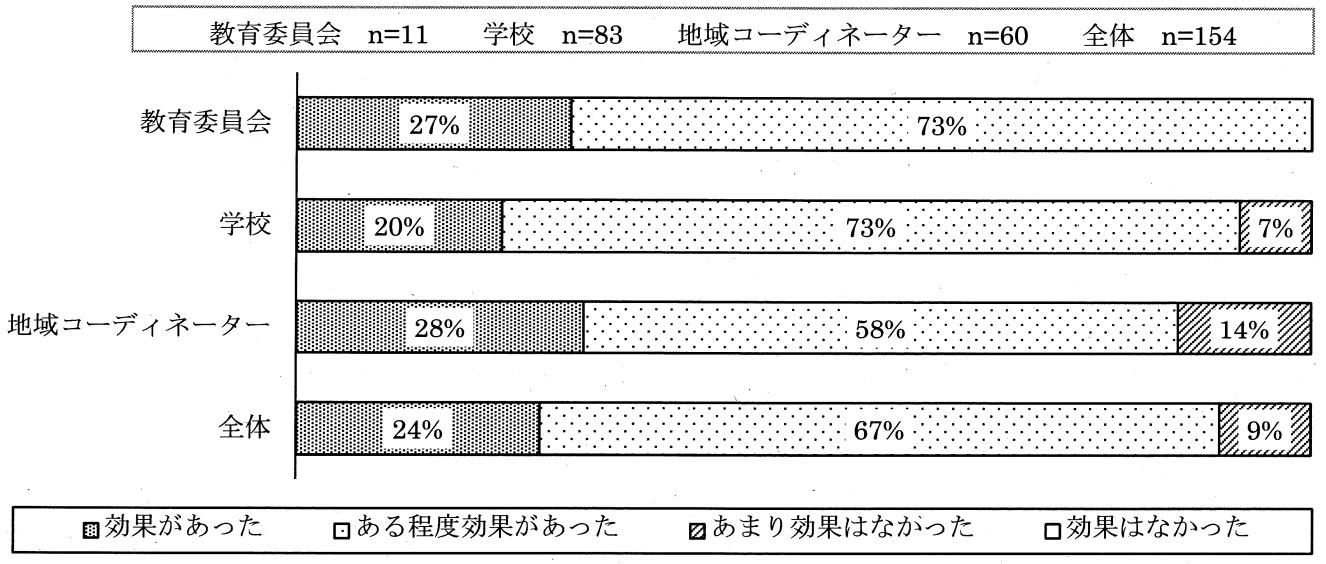
図10－イ④



教職員の勤務負担が軽減されたかについての項目である。教育委員会は「ある程度効果があった」と回答した割合64%であり、「効果があった」と回答した担当者はいなかった。学校は67%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。この項目を事業目的として2番目に挙げていた地域コーディネーターは79%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答していた。全体では72%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答していた。

⑤教職員の地域への理解が深まった

図10－イ⑤

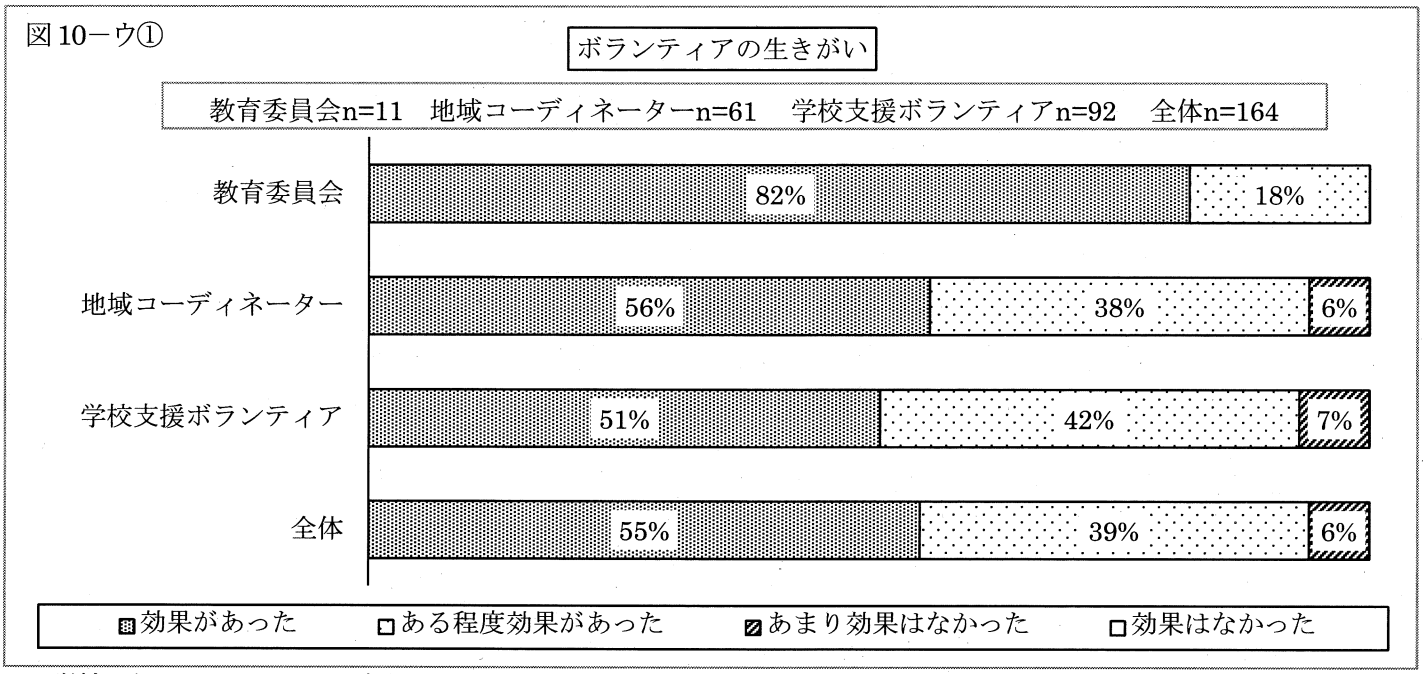


教職員の地域への理解が深まったかについての項目である。教育委員会はすべての担当者が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。同様に学校は93%、地域コーディネーターは86%、全体では91%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

ウ　【住民・ボランティア】教育委員会、地域コーディネーター、学校支援ボランティアからの回答

①学校に行って子どもとふれ合うことにより、生きがいができた

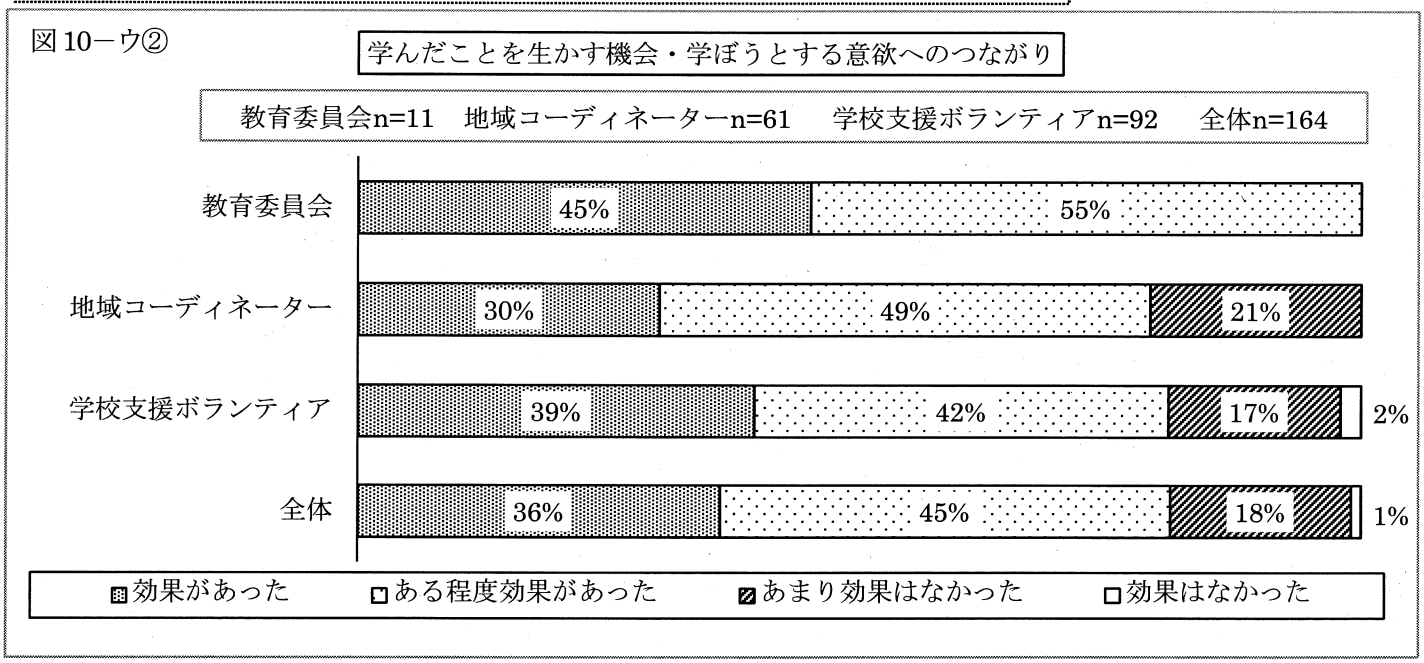
図10－ウ①



学校に行って子どもとふれ合うことにより、生きがいができたかについての項目である。教育委員会が事業目的として選んだ割合として 2 番目に高かった項目である。回答した教育委員会のすべての担当者が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。地域コーディネーターの 94%、学校支援ボランティアの 93%、全体では 94%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

②特技や講座などで学んだことを生かす機会となり、さらに学ぼうとする意欲が高まった

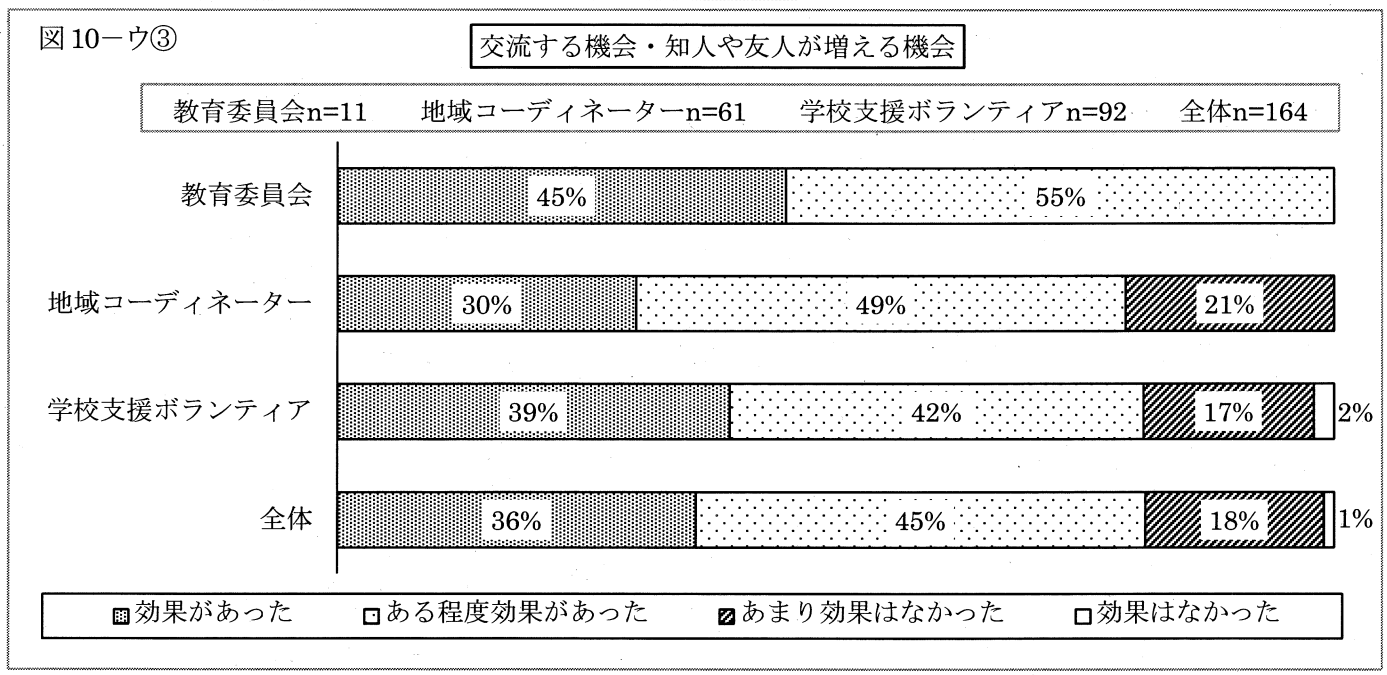
図10－ウ②



特技や講座などで学んだことを生かす機会となったり、学ぼうとする意欲が高まったりしたかについての項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」を合わせた割合は、教育委員会は 100%、地域コーディネーターは 79%、学校支援ボランティアは 81%、全体では 81%である。

③いろいろな人たちと交流する機会が増えて、知人や友人が増えた

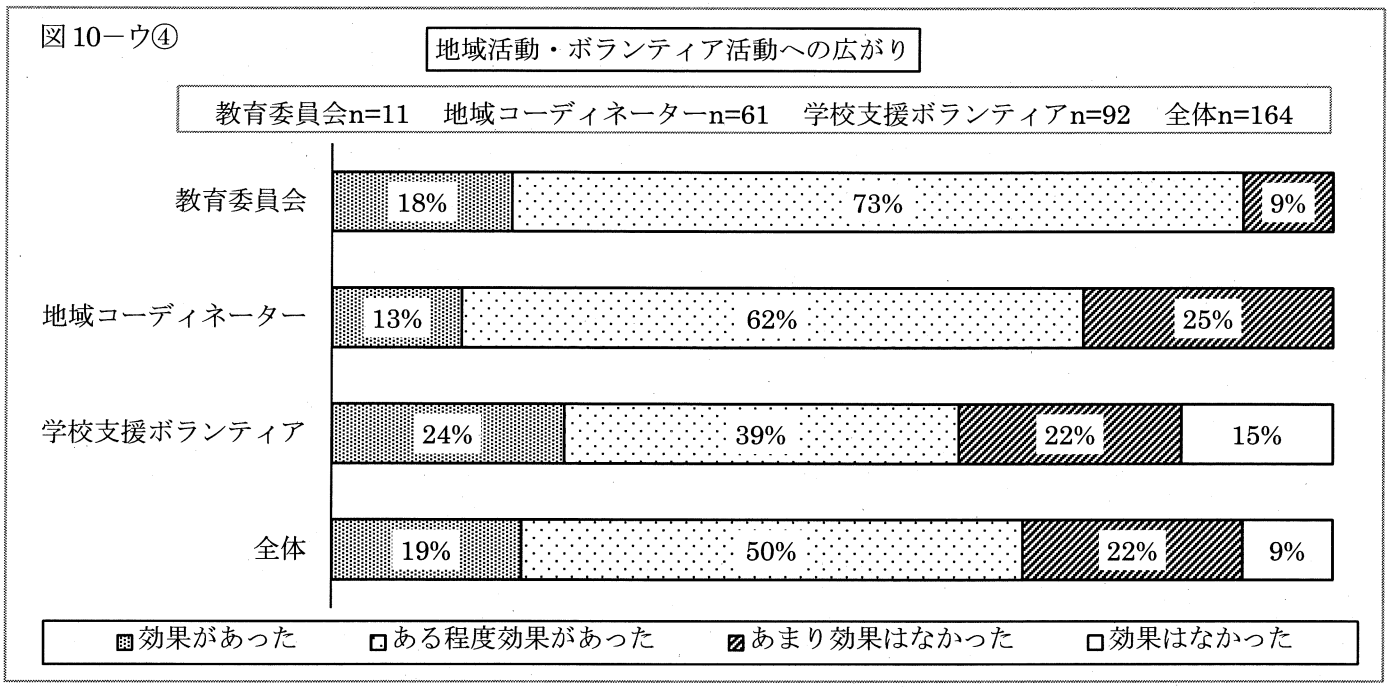
図10－ウ③



いろいろな人たちと交流する機会が増えて、知人や友人が増えたかという項目である。「効果があった」又は「ある程度効果があった」の割合を合わせると、教育委員会は100%、地域コーディネーターは79%、学校支援ボランティアは81%、全体では81%であった。

④学校や他でも地域活動・ボランティア活動に取り組むようになった

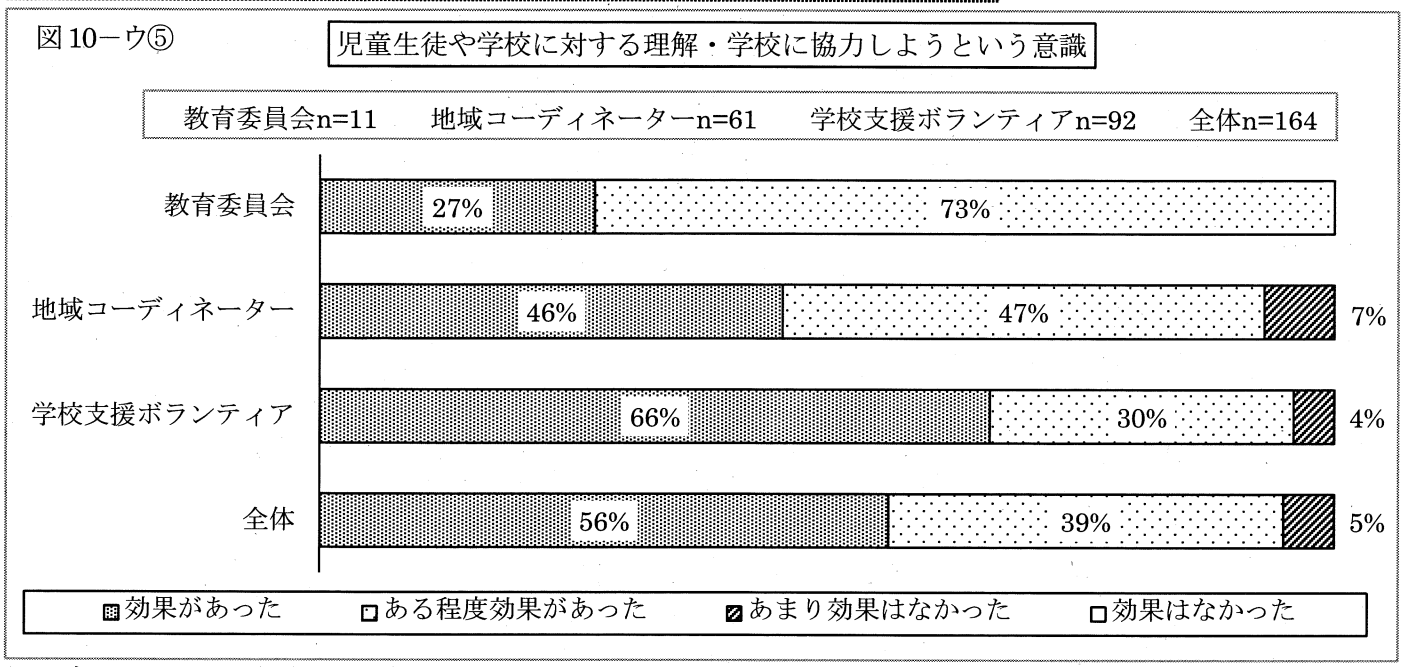
図10－ウ④



学校以外でも地域活動・ボランティア活動に取り組むようになったかについての項目である。教育委員会は91%、地域コーディネーターは75%、学校支援ボランティアは63%、全体では69%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。しかし、「効果はなかった」又は「あまり効果はなかった」と回答した学校支援ボランティアも37%に上った。

⑤児童生徒や学校に対する理解が深まり、学校に協力しようという意識が高まった

図10－ウ⑤

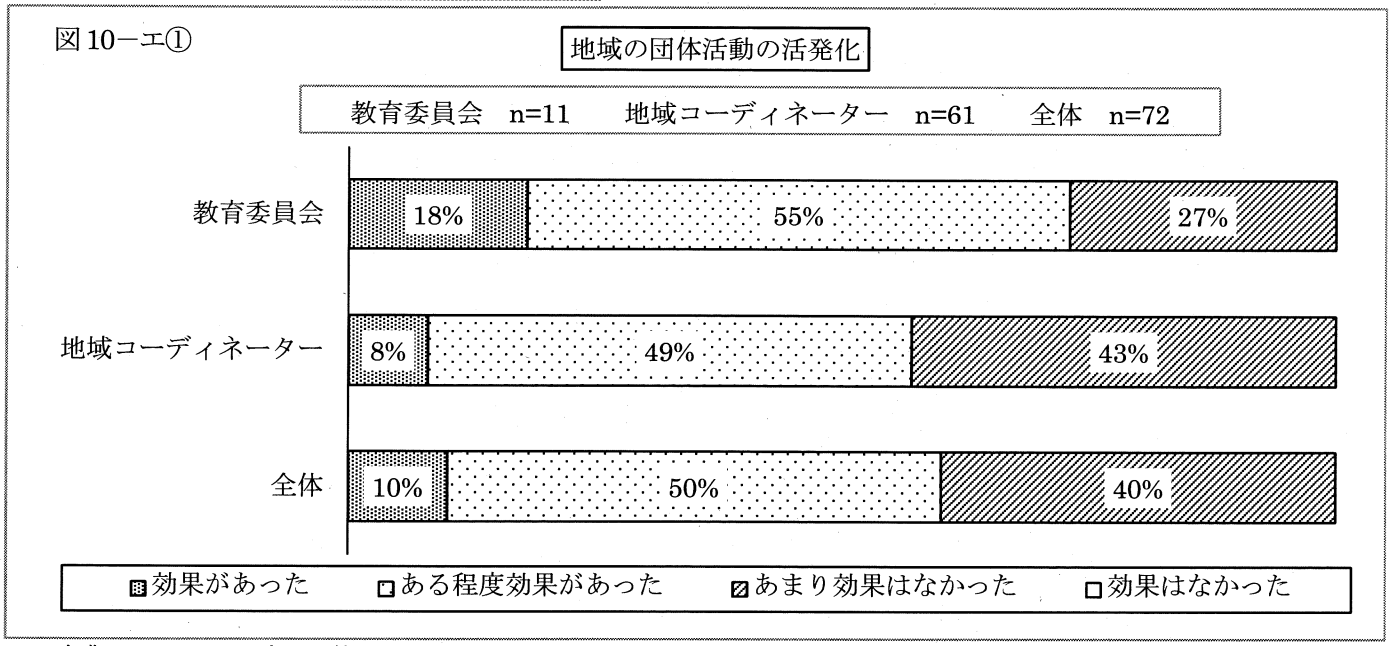


ボランティアが、児童生徒や学校に対する理解が深まり、学校に協力しようという意識が高まったかという項目である。教育委員会は100%、地域コーディネーターは93%、学校支援ボランティアは96%、全体では95%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

エ 【地域社会(地域住民)】教育委員会、地域コーディネーターからの回答

①地域にある団体どうしの活動が活発になった

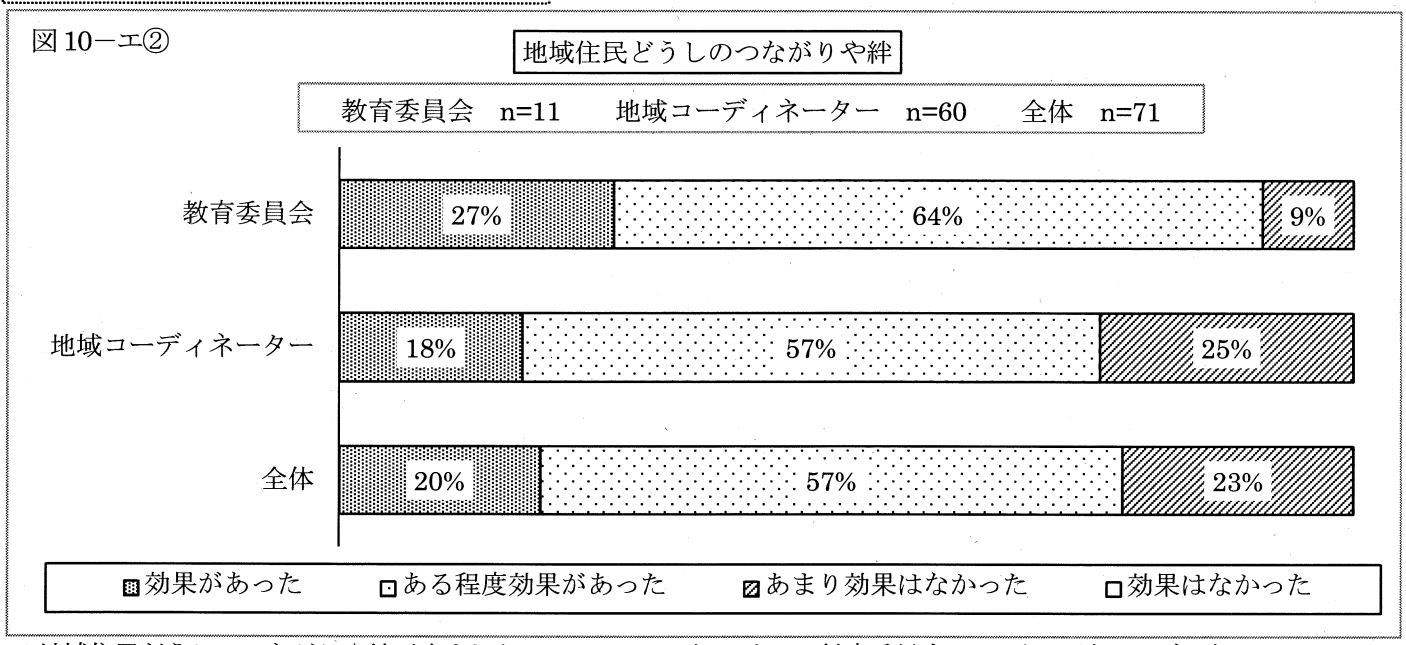
図10－エ①



事業によって、地域の団体活動が活発になったかについての項目である。教育委員会は73%、地域コーディネーターは57%、全体では60%が、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

②地域住民どうしのつながりや絆が生まれた

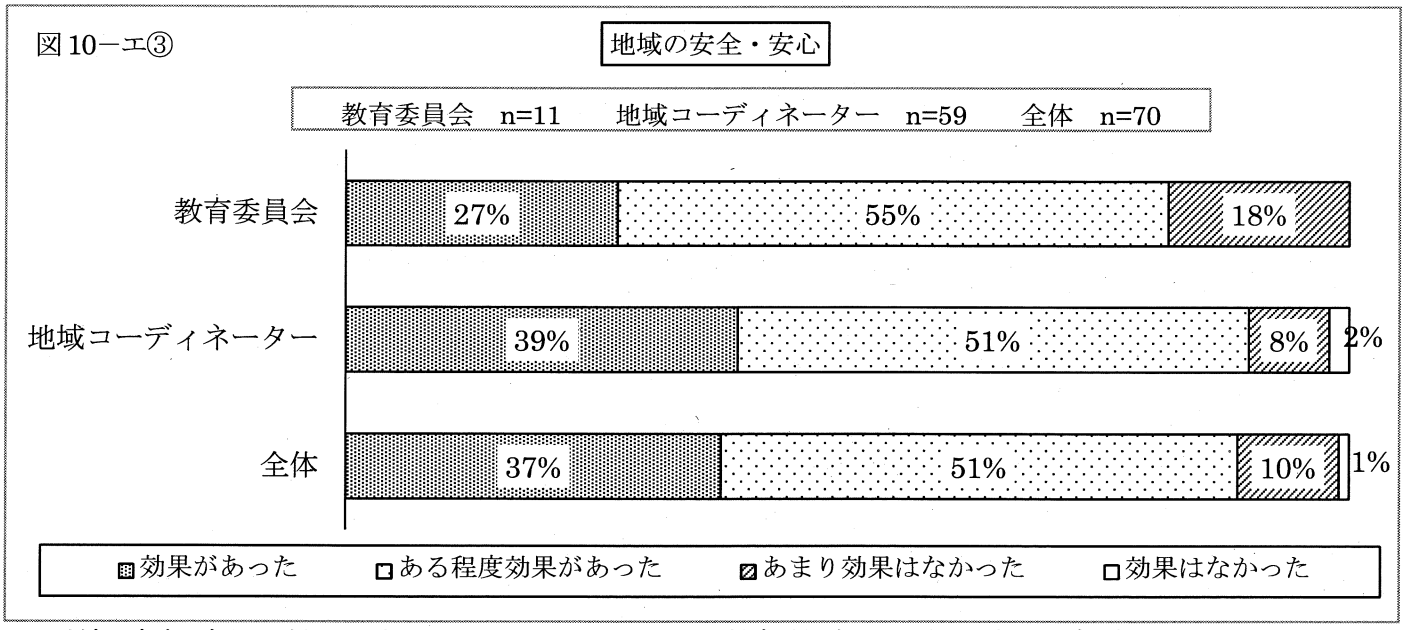
図10－エ②



地域住民どうしのつながりや絆が生まれたかについての項目である。教育委員会は91%、地域コーディネーターは75%、全体では77%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

③地域の安全・安心が確保されるようになった

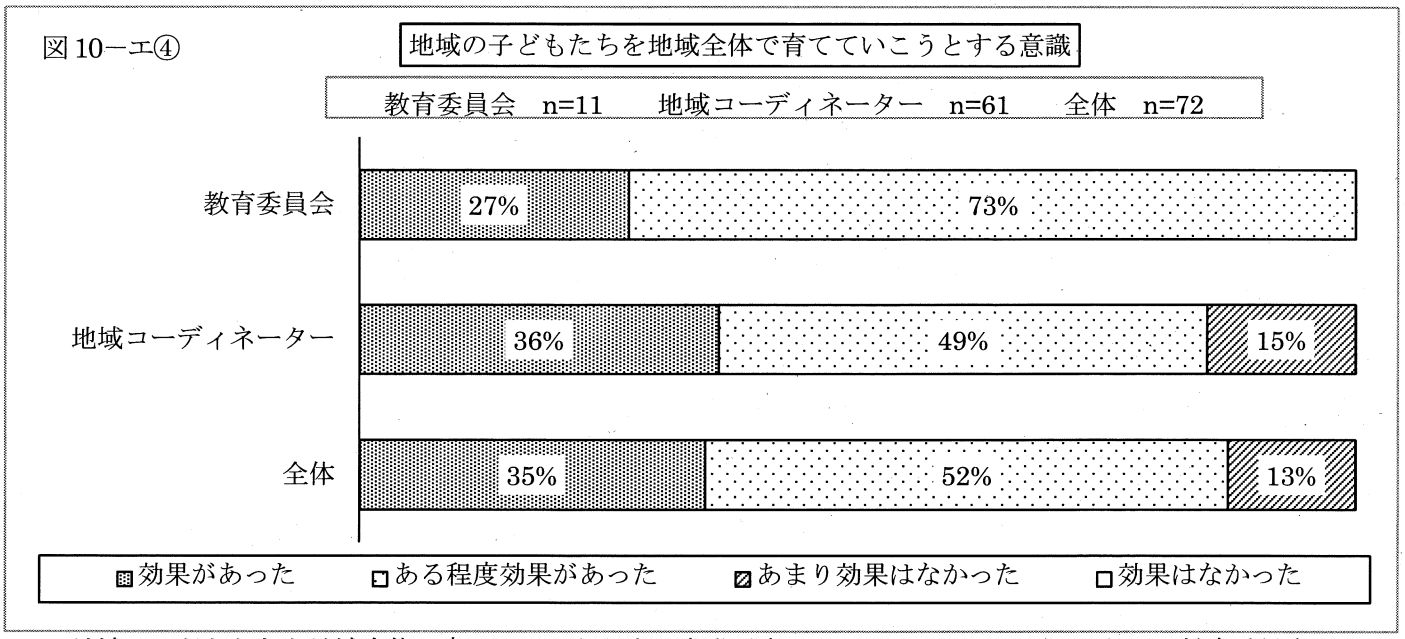
図10－エ③



地域の安全・安心の確保につながったかという項目である。教育委員会は82%、地域コーディネーターは90%、全体では89パーセントが「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

④地域の子どもたちを地域全体で育てていこうとする意識が広がった（教育力が高まった）

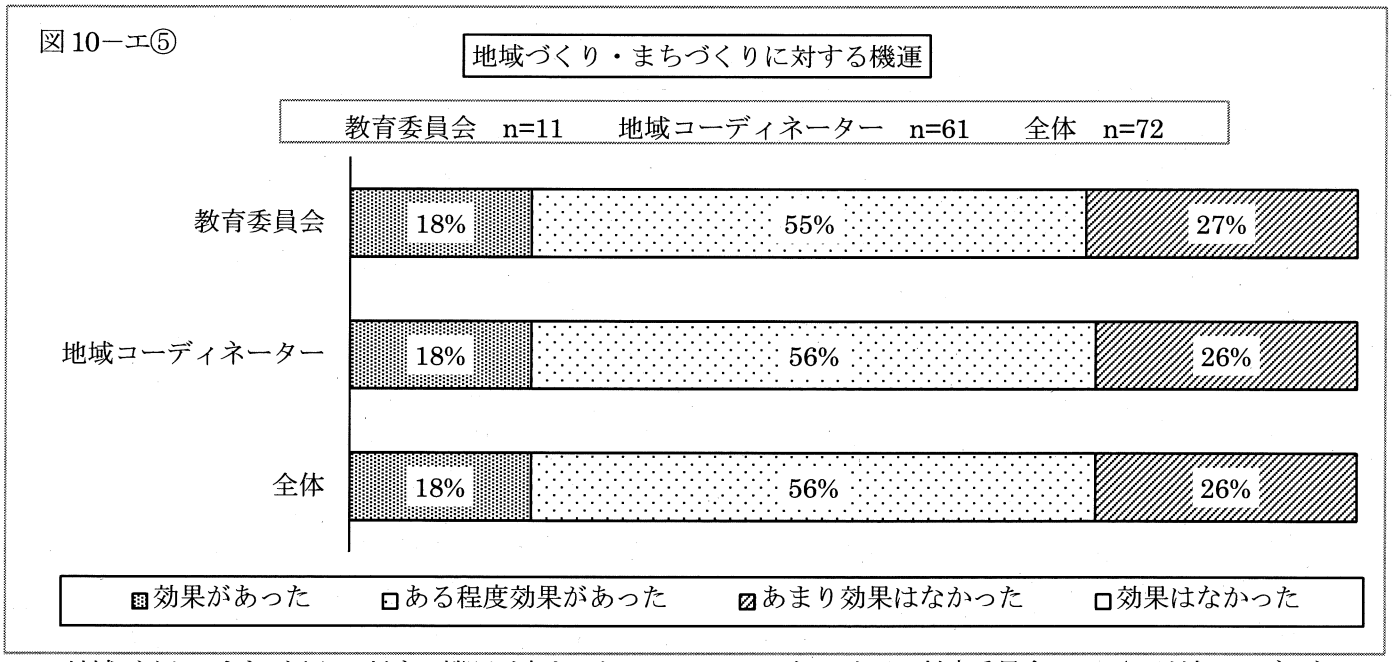
図10－エ④



地域の子どもたちを地域全体で育てていこうとする意識が高まったかについての項目である。教育委員会は100%、地域コーディネーターは85%、全体では87%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

⑤地域づくり・まちづくりに対する機運が高まった

図10－エ⑤

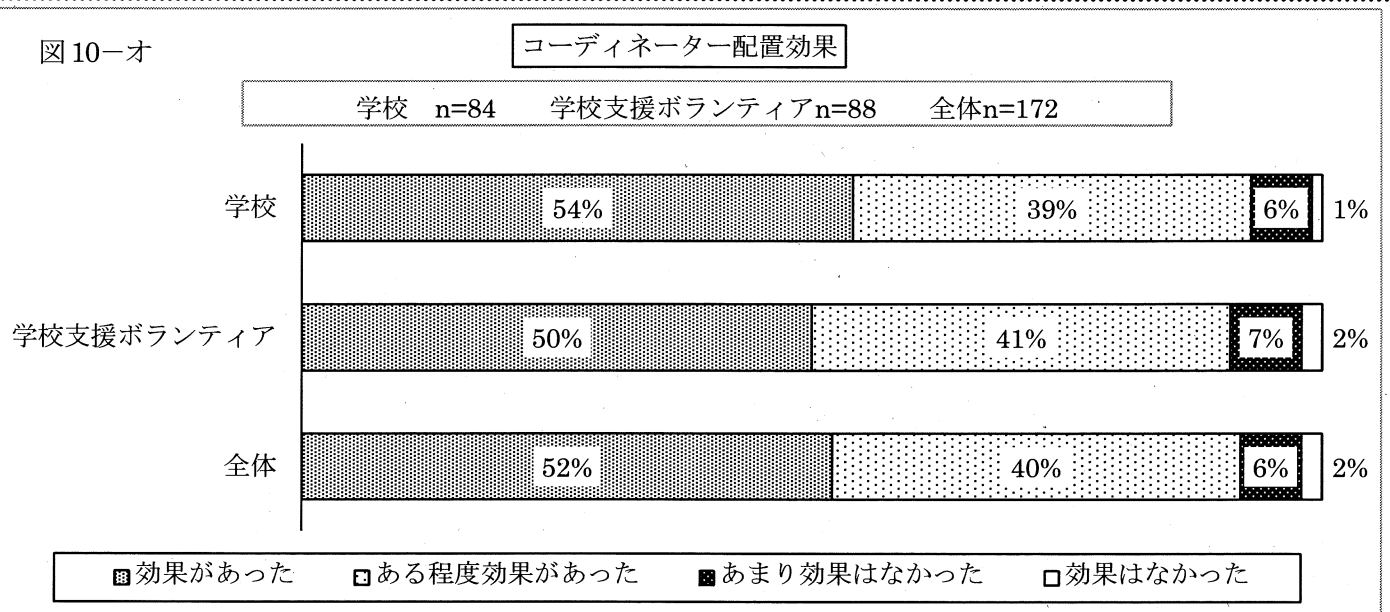


地域づくり・まちづくりに対する機運が高まったかについての項目である。教育委員会は73%、地域コーディネーターは74%、全体では74%が「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

オ　コーディネーター配置効果

地域コーディネーターを配置した効果はみられましたか。　　学校　問2（2）ボランティア　問2（6）

図10－オ



学校は93%、学校支援ボランティアは91%、全体では92%が、コーディネーターを配置した効果について、「効果があった」又は「ある程度効果があった」と回答している。

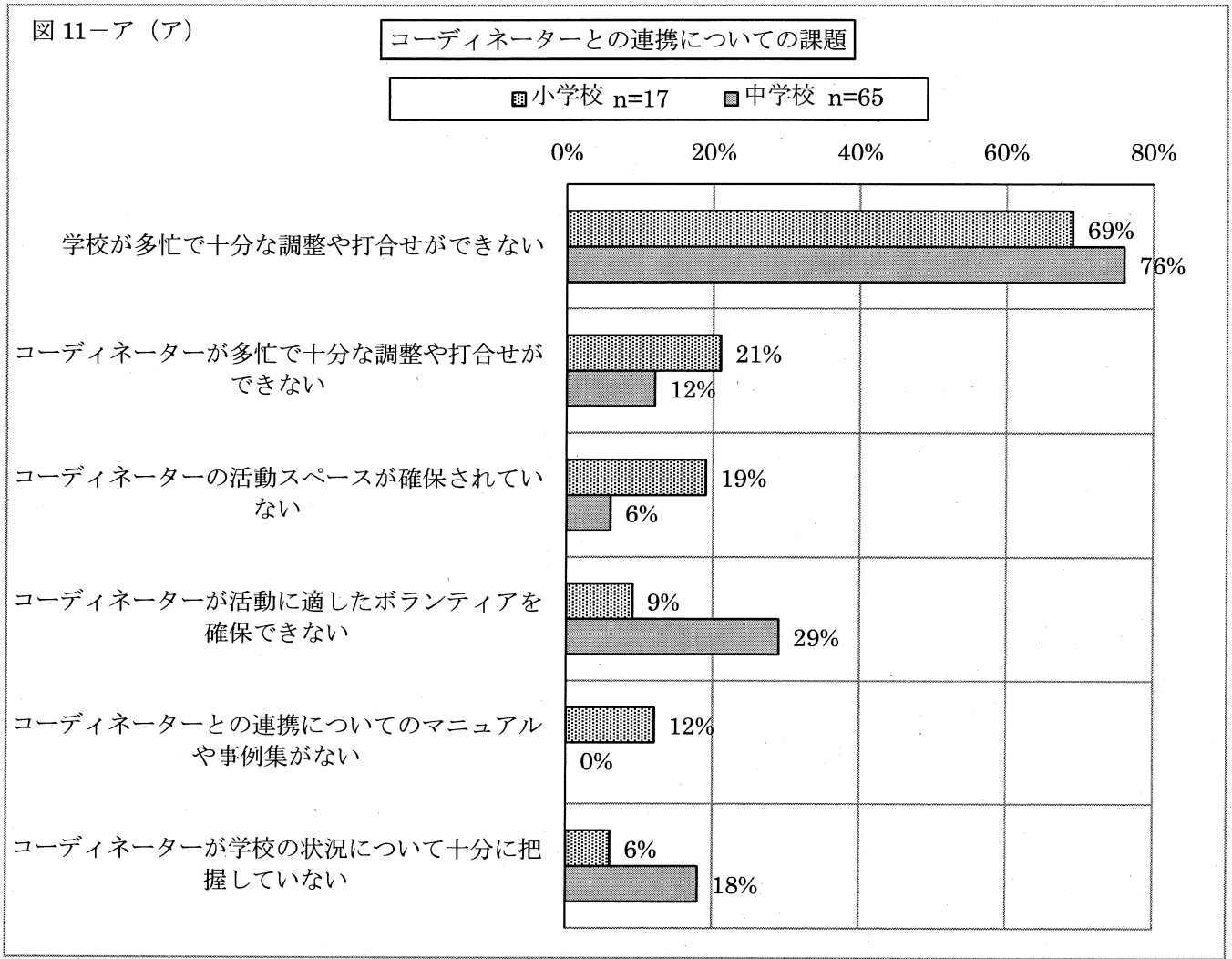
(11)　課題

ア　学校からの課題

(ア)　コーディネーターとの連携について

地域コーディネーターとの連携についての課題は何ですか。(主なもの 3 つまで)　　学校問 2 (3)

図 11－ア（ア）



小学校・中学校ともに、「学校が多忙で十分な調整や打合せができない」と回答した担当者が圧倒的に多く、学校の忙しい現状が浮かび上がっている。

中学校では「コーディネーターが活動に適したボランティアを確保できない」が 29%で小学校と比較して高い割合となっている。

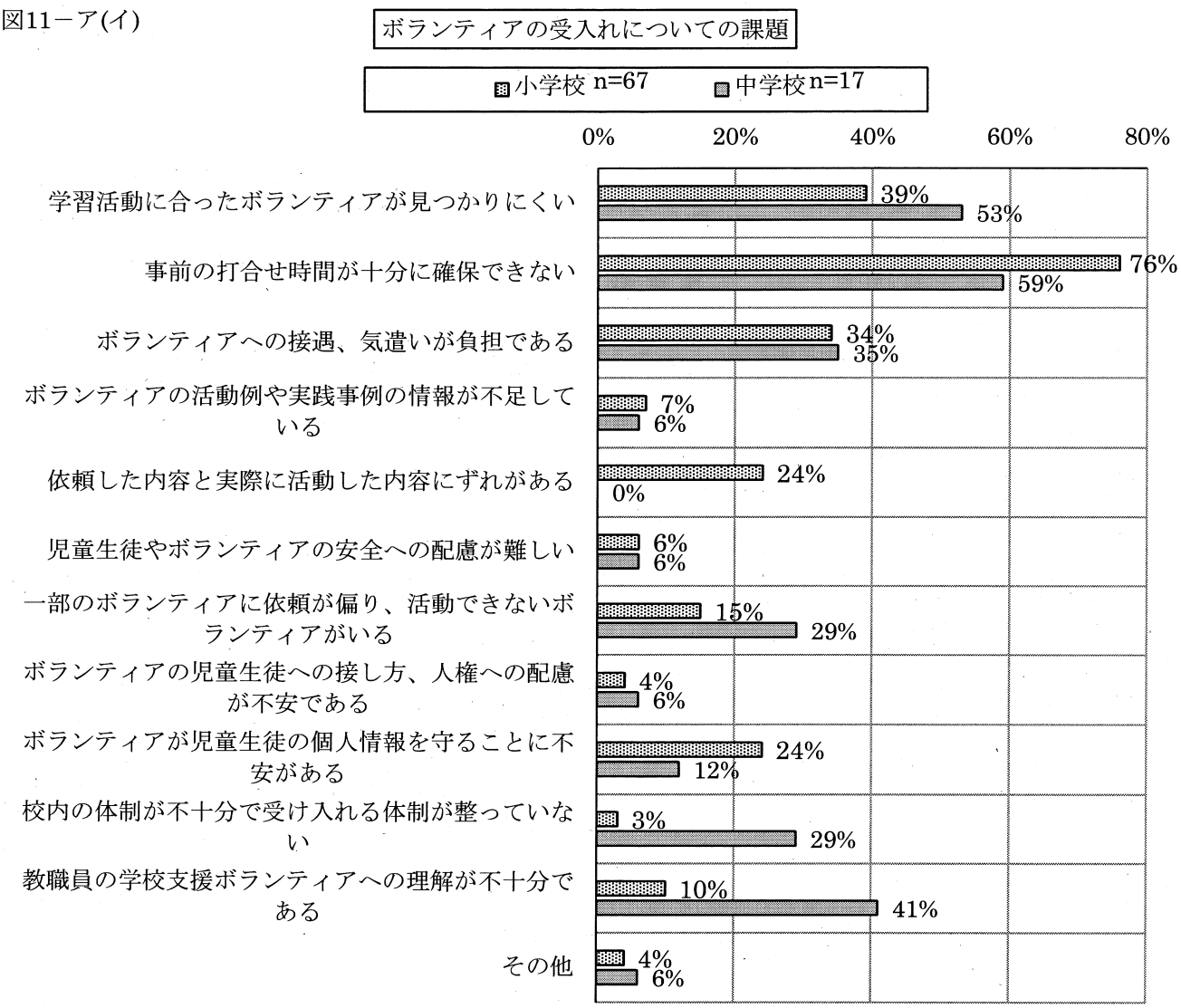
コーディネーター連携課題についての自由記述より

- 現在のコーディネーターが辞めた場合の次の候補者の選出について。
- コーディネーターを引き受けてくれる方がいない。
- 昨年までは、コーディネーターの謝金が出ていたので定期的に来校していたが、今年度は謝金が出なくなったので、コーディネーターの活動の補償が無くなり連絡打合せが円滑にできなくなった。
- コーディネーターの継承者が見つかりにくい。
- コーディネーターの確保（現在の協力者及び後継者）

(イ)　ボランティアの受入れについて

ボランティアの受入れについての課題は何ですか。(主なもの５つまで)　問 2(4)

図11－ア(イ)



小学校・中学校ともに「事前の打合せ時間が十分に確保できない」という回答が最も多く、次に「学習活動に合ったボランティアが見つかりにくい」の割合が高かった。

中学校では「教職員の学校支援ボランティアへの理解が不十分である」、「校内の体制が不十分で受け入れる体制が整っていない」が、小学校と比較して高い割合である。

また、「ボランティアへの接遇、気遣いが負担である」は、小学校 34%、中学校 35%と比較的高い割合となっており、学校がボランティアの受入れに負担を感じている様子もうかがえる。

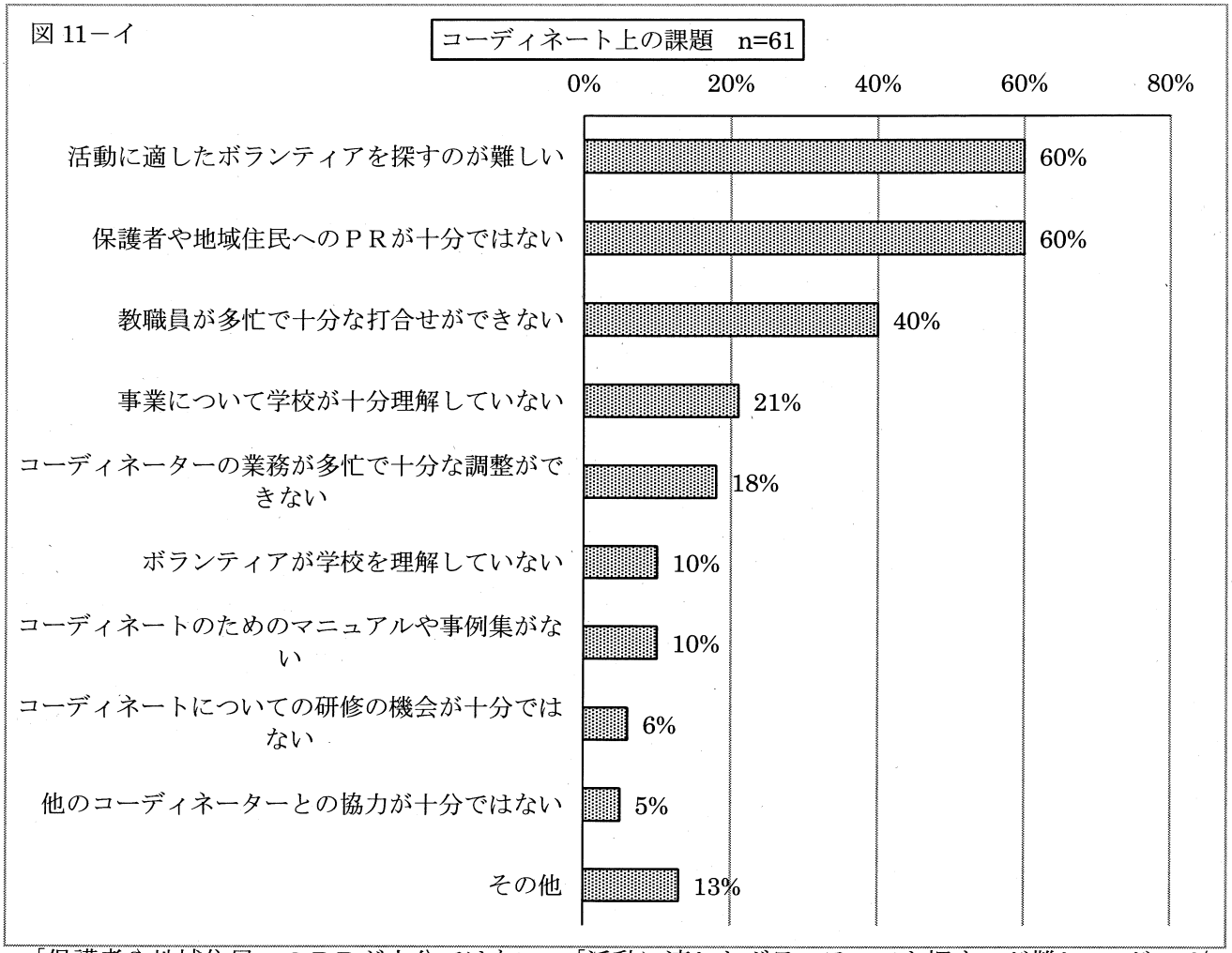
ボランティア受入れについての自由記述より

- ボランティア受入れまでのフローチャートがない。新規にボランティアを受け入れるために、チャートを作る必要がある。
- ボランティア登録はしてくれるが、実際にお願いする場合の日程調整が難しい。
- ボランティアとして登録してもらったが活躍できなかった方がいた。
- ボランティアとの連絡に時間がかかる。
- 定期的に来てくださるボランティアは受入れしやすいが、授業との絡みがあるものは教職員との打合せ日時調整、場所の確保など、学校行事もたくさん入っているため、かなり苦慮しながら入れている。

イ　コーディネート上の課題

コーディネート上の課題は何ですか。（主なもの３つ）　　コーディネーター問２(3)

図 11－イ



「保護者や地域住民へのＰＲが十分ではない」、「活動に適したボランティアを探すのが難しい」が 60%と高い割合になっていることから、ボランティアを確保することがコーディネート上の大きな課題であることが分かる。「教職員が多忙で十分な打合せができない」は 40%で、3 番目に高い割合であった。

その他　コーディネート上の課題についての自由記述より

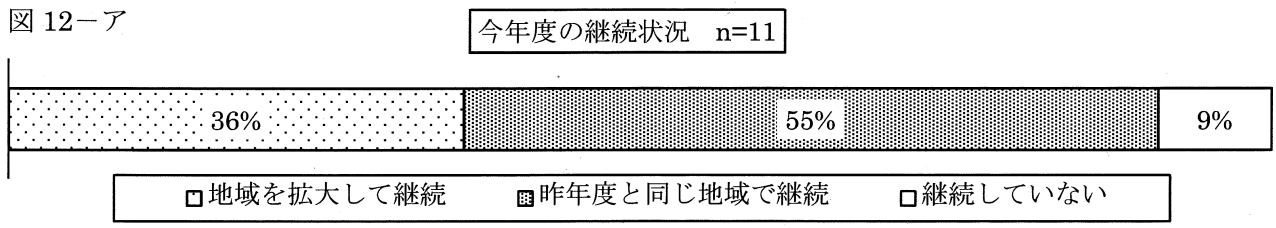
- 依頼者とボランティアさんの間が快適にスムーズに活動を行うにはどう動けばよいか。
- 保護者の求めているボランティア活動と学校の求めるボランティア活動の内容がよくわからない。
- 学校づくり地域協議会役員の確保と継続性の維持。昨年来の予算の減額によりコーディネターに対する謝金がなくなった。ボランティアベースと理解はしても、実務の多さに、ボランティアといいきれないものを感じる。
- コーディネーターが各地域とのコミュニケーションを大切にして活動すること。
- 他地域との情報交換の場が少ない

(12)　今後の推進

ア 事業の継続状況

今年度の取組についておたずねします。（どれか１つ）　教委問１（7）

図 12－ア



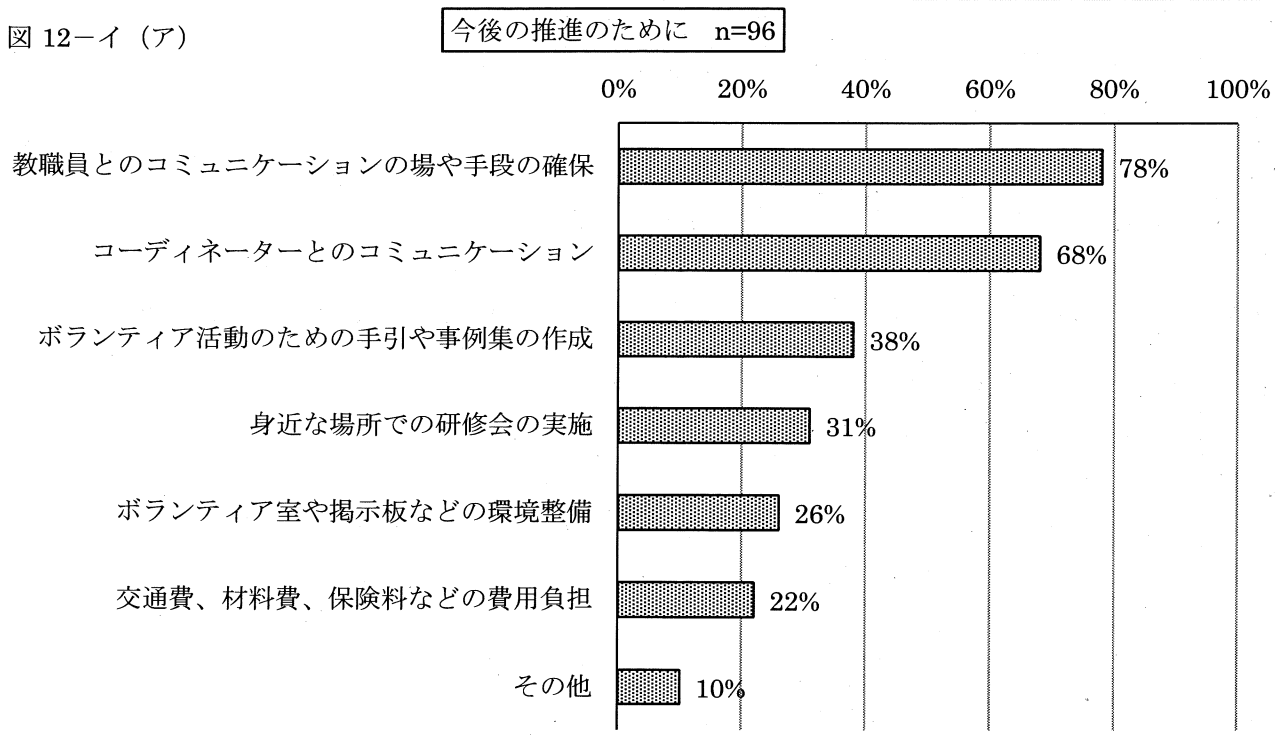
今年度継続しているのは、回答のあったうち91%（10市町）である。うち地域を拡大して継続しているのは36%（4市町）、昨年度と同じ地域で継続しているのは55%（6市町）である。

イ　今後の推進のために

(ア)　学校支援ボランティアから

学校支援ボランティア活動をさらに推進するために大切と思うことは何ですか。（主なもの３つ）　ボランティア問３（1）

図 12－イ（ア）



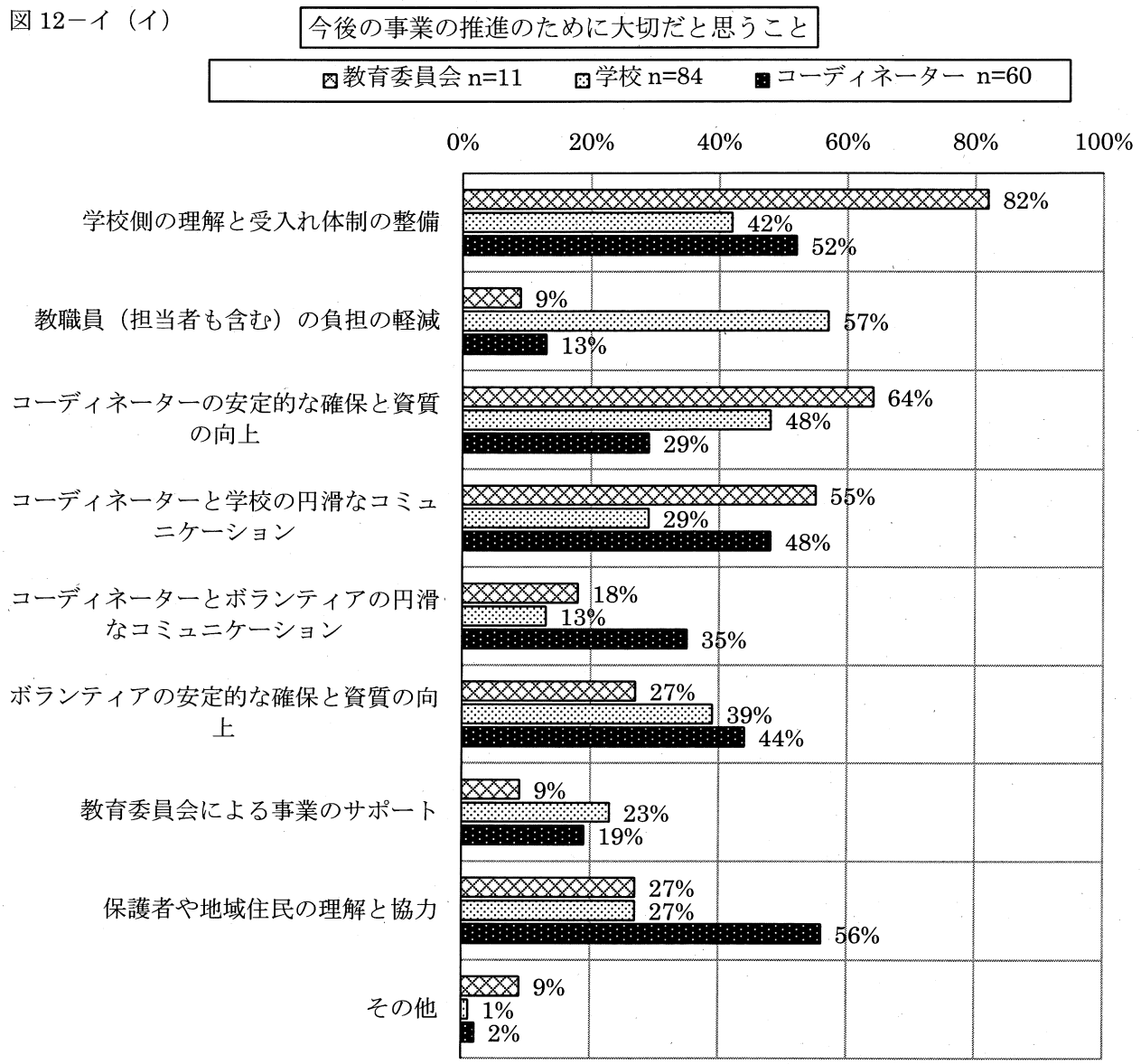
回答した学校支援ボランティアは「教職員とのコミュニケーションの場や手段の確保」が78%で割合が最も高かった。次に「コーディネーターとのコミュニケーション」が68%であった。教職員やコーディネーターとのコミュニケーション不足を感じている様子が分かる。同時に、コミュニケーションを図ることによって、活動がさらに充実していくと考えていることがうかがえる。

その他・・・活動のきっかけづくり。保護者間・ボランティア間のコミュニケーション。活動のPR。
ボランティアニーズの提示。情報発信。学んでいく努力。

(イ) 教育委員会、学校、コーディネーターから

事業の推進のために大切だと思うことは何ですか。(主なもの３つ)
教委問３(1) 学校問３(1) コーディネーター問３(1)

図 12－イ（イ）



最も割合が高かった回答は、教育委員会は「学校側の理解と受入れ体制の整備」で 82%、学校は、「教職員の負担軽減」で 57%、地域コーディネーターは「保護者や地域住民の理解と協力」で 56%であった。

2 番目に高かったものは、教育委員会と学校が「コーディネーターの安定的な確保と資質の向上」で、それぞれ 64%と 48%であった。地域コーディネーターは「学校側の理解と受入れ体制の整備」で 52%であった。

3 番目に高かったものは、教育委員会と地域コーディネーターが「コーディネーターと学校の円滑なコミュニケーション」で、それぞれ 55%と 48%であった。学校は「学校側の理解と受入れ体制の整備」で 42%であった。

【事業推進についての自由記述から】
（教育委員会）
・教員に対して、学校支援ボランティア活動には、地域コーディネーターが必要かつ重要であるということを理解してもらう研修をすることが大切であると思う。
・学校教育担当の研修（教員）の定着化、学校・教職員の理解の度合いにより、事業の成否が大きく左右される傾向があるので、教職員向けの普及・啓発も併せて実施したい。

（学校）
・学校支援地域本部事業の担当は社会教育主事有資格者の方が適切なのか。
・学校に協力できるボランティアが年々減少している。少数のボランティアの方が、いくつもの活動をしている。
・予算がしっかり付き、外部人材を依頼するシステムができれば、どの学校でも活動が充実すると思われる。学校だけでなくコーディネーターの協力も欠くことのできないものであるので、特にコーディネーターの人選には時間をかけた方がよいと思う。
・この事業の推進にあたり地域コーディネーターの専任が非常に大事であると感じた。
・地区全体としてボランティアの発掘。
・ボランティアの相互利用。
・コーディネーターの研修等もありコーディネーターが交替してもこの事業に対する理解、役割に対する理解ができたようである。
・コーディネーターが自主的に活動し、学校支援を進められるようになるまで、学校の事業担当者の負担が大きい。
・コーディネーターを介するより、担任が直接交渉したり内容を話し合ったりした方が、負担が軽くなることが多い。安定的な（コーディネーターの）確保ができれば大変効果的である。
・本校には、地域コーディネーターが４名おり、月１回のコーディネーター会議を実施しているため、情報交換やボランティアの依頼なども比較的スムーズにできている。また、ボランティアルームを確保していただいているので、ボランティアの方々が活動後に情報交換やふりかえりができる。また、コーディネーター会議での提案が「アート展」（登録ボランティアによる展覧会）として実現している。
・合併以前のＯ町ではかなり進んだ取組をしているが、他の旧市町ではこれからなので、Ｏ町以外から異動してきた職員がボランティアとの活動に少々戸惑いを感じている。
・実践事例の情報が欲しい。
・コーディネーターに適した方がいてくださることが大切で、そのための謝金が出せる予算の維持。

（地域コーディネーター）
・この事業は地域の学校としての意識づけをさせてくれたとても良い事業だったと思う。必要な時に必要なだけ活用していくシンプルな形で残せたら良いと考えている。
・地域の方たちにボランティアをしていただける案内を出し、少しでも多くの方に協力していただきたい。
・県の研修のポイントをもう少し細かいところに向けて欲しい。（チラシ作成のポイント・読み聞かせをどう導入したか、どう展開したかetc.）
・学校側は三役（校長・副校長・教務主任）の理解はあるが、教職員の理解には人によって温度差がある（全くコーディネーターのことがわかっていない方もいるように思う。）ので、そのあたりの周知をお願いしたいと思う。
・予算面での行政のバックアップ、行政主導の県全域の連絡協議会（コーディネーター会議）の創設
・共通意識を持つ上でも、研修等で意見交換することは大切。講演や事例紹介も良いが、フリートーキングの時間は倍以上欲しい。
・ボランティアの確保とコーディネーターの確保が難しい。学校は理解があり、とても良い環境である。
・この事業を推進するには何といっても校長が理解をしないと不可能で、ただでさえ「敷居の高い中学校！」を打破しなければ先へ進むのは難しいと痛感している。
・学校支援地域本部事業は地域と学校をつなぐ大きな役割をしている。今後も活動が続くといいと思う。
・職員の中にはボランティアを嫌う方がいて困る。ボランティアの意味を伝えて欲しいと思う。
・水泳の指導、ミシンの指導など、毎年継続の依頼が来ている。事業の成果であろう。
・学校と地域との意識のズレを上手く調整していくのがコーディネーターであり、先生の負担の軽減のため、地域がモンスターにならないため、ぜひ、このコーディネーター事業を続けていけるよう支援していただきたい。

2　聞き取り調査

(1)　地域コーディネーターへの聞き取り

ア　コーディネーターの経歴、活動目的　①

県	地区	経　歴　等	その他経歴等についてのコメント	活　動　目　的
栃木１	日光市	自治会長 消防団長	学校に顔を出す機会が多かった。	・学校の要望に合致したボランティアを見い出し、活動を展開することによって、学校・ボランティアの双方が満足を感じられるようなマッチングを行うことを目的としてコーディネーターの仕事に当たってきた。学校支援ボランティアの活動をとおして、さまざまな世代の交流を図っていければと考えている。
栃木２	佐野市	ＰＴＡ副会長		・学校のためになるのならと当初は考えた。研修を通し自分の中に芽生えた「地域の中の一人」という感覚を少しずつでも広げていきたいと思うようになった。学校と地域、家庭と地域…どれも人といかにつながりを持てるかということに気付いた。
栃木３	宇都宮市	ＰＴＡ活動		・学校支援の一環。児童のため、教員のため、地域住民の生涯学習への一助となること。
栃木４	塩谷町	学校支援ボランティア		・学校とのつながりを強くし、学校の現状を把握し、学校の考え方を理解したい。そして、学校を通して子どもたちの気持ちをもっと理解していきたい。地域と学校の絆を強くしたいと考えた。
栃木５	さくら市 （複数）	元ＰＴＡ役員　　元教員 家庭教育支援団体所属		・地域の人と子どもたちがふれ合うこと、地域のつながりづくりのお手伝いをすることができたらと思って活動している。
栃木６	宇都宮市	小中学校でＰＴＡ会長 学校支援ボランティア		・学校に入ってみて分かるのは、教師が仕事に追われていること。中には雑用などはボランティアにできることもあると感じている。それによって、少しでも教師の負担が減り、子どもに向かう時間ができればと思って活動している。
青森１	八戸市	ＰＴＡ副会長 学校支援ボランティア	地元出身ではない方が、なじもうと努力するのでかえって良いのでは。	・たった一つのボランティアでも得ることの多さや周りの人に与える影響（善し悪しがあっても）などを感じ、今より次はより良い形にしていきたいという思いで活動している。
青森２	青森市	読み聞かせボランティア	現役の保護者よりも、ＯＢ等の方が直接の関わりが薄い分、思い切った活動ができる。	・事業をより多くの人々の理解してもらい、ボランティア活動が円滑に展開されていくことを目的として活動してきた。学校の教員と保護者・地域の方々とを繋げて調整を図り、学校側の要望、

ア　コーディネーターの経歴・活動目的　②

県	地区	経　歴　等	その他経歴等についてのコメント	活　動　目　的
				ボランティアの思いを受け止めて伝えていき、そしてこのような活動の積み重ねが、みんなで子どもたちを育てていこうという地域づくりに結びついていくことを願っている。
青森３	八戸市	ＰＴＡ事務		・学校・保護者・地域・ボランティア、その間をまさにコーディネートする仕事に、難しさはあるものの充実感を感じるようになった。謝金が減額されても、自分の仕事が学校のために役立っているんだという気持ちで活動している。そして、子どもたちが「ふるさと」を意識できるようにしたいと考えている。
青森４	八戸市	児童館勤務 民生児童委員 主任児童委員		・最初は単純に、学校・教員の負担を軽減し、子ども達と地域の方を繋ぐことと思っていたが、教員や子どもたち、地域の方がお互いに刺激し合い、顔が知れて言葉を交わすことによって、それぞれが元気になり、地域の中で学校が中心となって出来ることの多さに気付いた。そこで、今まであまり学校や子どもたちに関わることのなかった地域の方を、１人でも多く学校に来ていただくことによって、開かれた学校づくりをしていくことを目指した。
青森５	青森市	小学校ＰＴＡ会長 中学校ＰＴＡ副会長		・今の子どもたちが育つ環境は、核家族や仕事をもつ親が半数以上をしめ、世代の違いや考え方の違いなどによって相互のコミュニケーションが減り、子ども同士でも話しかけても相手に断られることを不安に思って会話ができないなどの問題がある。また、保護者、地域の様々な団体などの『個』はあっても、それをつなぐ『線』の部分は弱く、大きな力を発揮できない現状がある。これらの環境を、少しでも改善するお手伝いができればと思っている。
新潟１	新潟市	ミニバスケットボール部 保護者会副会長	月１回は学校に顔を出していた。	・地域で子どもたちを育てることができるようにすること。関わった子どもたちが将来大人になったときに、地域に帰ってきて、自分たちがしてもらったときのようなサポートができるようになっていてほしいということ。

イ　学校との関わり

(ア)　苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント　①

県	地区	学校・教員との関わりで苦労した点	学校・教員との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市		・ボランティア用の部屋がないため、教職員とコーディネーターとの打合せは職員室で行われる。かえってそのことが、教員とコーディネーターをすぐに顔見知りにさせ、教員とコーディネーターの関係をより近いものにしている可能性があると捉えている。
栃木2	佐野市	△すべての教職員に、事業を理解してもらうことに苦労した。	・用事をつくっては学校に通っていた。 ・入学式や運動会、文化祭、卒業式にコーディネーターを呼んでくださって「三毫唐沢ＳＳＣ○○さん」と紹介していただけるので宣伝になると思い、積極的に参加している。 ・異動により新しい校長になり、とにかく校長とのよい関係づくりに努めた。 ・教員とボランティアの関係づくりのために、教員が得意なことで講座を作ってもらった。
栃木3	宇都宮市	△一般の教員の皆様にはなかなか理解されなかった。学校側もコーディネーターとボランティアの区別がつかなく、コーディーネーターに何をやってもらうのか分からなくて戸惑っていた。（ひな人形飾りを依頼されたこともある。）教員の側にすると、今まで自分たちでしてきたことをわざわざコーディネーターを通さなくてはならないので、打合せが必要→時間がない→面倒、ということであった。	・当初から、校長の強力なサポートがあったが、教務主任を窓口に、コーディネートの体制を整備していった。 ・事業開始時にどんなボランティアを取り入れた活動ができるか教員にアンケートを取って考えてもらった。 ・ボランティアティーチャー連絡会を作り、教員とボランティアの顔合わせをしてもらった。 ・入れるクラスと入れないクラスあるなど、子どもに不利益が出ることがないよう配慮した。 ・教員にはあくまでもボランティアであると伝え、過剰な気遣いや期待、不安を持たせない配慮をした。
栃木4	塩谷町	△こちらから積極的に動かないと要請が出てこなかったこと。説明会も形だけで終わっていた。	・とにかく足を運んだ。私は、教務の先生（３校とも）にはたらきかけをした。 ・先生方の会議の中で教育長から言っていただいたこともあった。様々な形での広報を続けることが大切と思った。
栃木5	さくら市（複数）	△職員室は入りにくい雰囲気があった。学校に行っても担当と校長以外はほとんど話すことがなかった。他の教員は、自分たちには関わりがないという感じであった。	・現職教育でコーディネーターと教員の顔合わせの機会を作ってもらった。 ・夏休み等、時間のあるときにコーディネーターの趣味であるものづくりを教員に声をかけて一緒に行った。 ・定期的にコーディネーター連絡会を開き、学校の担当である社会教育主事有資格教員も交え、情報交換や今後の活動等について話し合い、交流する機会がある。
栃木6	宇都宮市	△中学校は教師の専門性が高く、授業に入るには厳しさがある。 △小学校よりも中学校は先生方が忙しい感じである。打合せの時間、コミュニケーションを図る時間が取れない。	・思い切って家庭科の先生にミシンボランティアを一度やってみないかという提案をしたところ、１度活動することができた。 ・中学校の場合、ボランティアが学校に入るだけでなく、中学生を地域の活動に参加させ、地域で子どもたちを育むというコーディネートも行った。
青森1	八戸市	△活動が停滞気味だった	・学校が本当にボランティアを必要としているのか、先生方の気持ちを確認するために学校支援ボランティアについてのアンケート調査を行った。その結果、先生方には本当に必要とされているということが分かり、コーディネーター活動を続ける意欲になっている。 ・ボランティアを活動に取り入れるために、何といっても「百聞は一見にしかず」であり、実際にボランティアに活動していただくことが、教員に理解してもらう一番の方法である。

(ア)　苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント　②

県	地区	学校・教員との関わりで苦労した点	学校・教員との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森2	青森市	△中学校では、担当課が出向いて説明をしても、校長先生自身が事業にマイナスのイメージを持っていて、実際に活動が進まない状況であった。	・小学校の図書ボランティアの活動でブックコートフィルムをかけた本を中学校にお持ちして、校長先生に「例えばこのような活動も可能です。」と話したところ、「ぜひ中学校でも。」と気持ちが動き、すぐに図書担当教諭を紹介してくれた。具体的な説明が大切であると実感した。 ・学校の流れを把握して、教員がゆっくり話せる時間を見つけて相談することが大切であり、重要なことは口頭ではなく必ずペーパーでも渡した方がミスも回避できて良い。 ・教員に活用して良かったと思ってもらえるよう、ボランティアからの意見・感想等は必ず学校側にフィードバックして、ボランティアの方々は学校に来ることを楽しみにしているという気持ちをコンスタントに伝えている。
青森3	八戸市	△学習支援を教員の方から依頼されることがなかった。 △担当教員が変わるたびに最初から時間をかけて説得しなくてはならない。 △【国語科書写のケース】教員に働きかけてなんとか実施（4年目）できているが、教員の希望する時間数が多く（各クラス3時間ずつ）、ボランティアの人数がなかなか集まらなかった。 △ボランティアを入れるクラスと入れられないクラスの調整が難しかった。 △教員の希望に100%答えられないこともある。	・コーディネーターから教員に働きかけた。 ・【調理実習のケース】初年度は、絶対いやと拒否された。理由は「調理実習の時は声を枯らして怒鳴っているので、そんな姿はボランティアには見せられない」というもの。 ・異動があっても、この活動にはボランティアが入るという流れ（前提）を作ってしまい、毎年活動が継続できるようにするのも方法である。 ・教職員との人間関係を築いていくことを工夫。1年目から3年目までは週2回の勤務だったので、お昼に職員室で給食を一緒に食べるようにしたり、昼休み時間や放課後など職員室での雑談の場に加わるなどして教職員との人間関係作りに努めた。 ・教員の名前を覚えるだけでも大変だが、こちらの名前を覚えて貰うことを重視し、廊下での挨拶（満面の笑顔付き）や声かけ（お天気のことや、服装を誉めるなどなんでも）に努めている。
青森4	青森市	△最初は現場の先生方に事業の内容を分かっていただくのに、とても時間がかかった。 △内容を分かっていただいても依頼は少なく、先生方も本当に頼んでいいのかどうか、また、地域の方が学校や授業に入るのに少なからず、抵抗があったように感じた。	・まずは、ボランティアを入れていただいた先生から口コミで、他の学年や次年度の先生に伝えていただくことをお願いした。 ・先生方がコーディネーターに気軽に声をかけていただけるよう、長休み時間や放課後に出来るだけコミュニケーションが取れるようにした。 ・忙しい学校にボランティアが入るためにコーディネーターがパイプ役になって調整し、時には苦情等もあるがそれを受け止めるクッション役も果たしている。
青森5	青森市		・学校に行った時は必ず校長、教頭に顔を見せ、ボランティア活動の様子や情報を提供し、何もない時でも学校の様子など会話をするように心がけている。 ・先生に廊下であった時は必ず声掛けをして本事業をアピールするようにしている。 ・忙しい先生方との連絡に『依頼書』と『ボランティア決定書』を目立つようにピンク(地域本部カラー)の紙を使用している。
新潟1	新潟市		・教員向けの通信を発行し、自分の悩みを打ち明けたり、ボランティアのお知らせをしたりしてきた。

(イ)　学校の変容、課題　①

県	地区	学校・教員の変容・効果	学校・教員との関わりでの課題・その他
栃木1	日光市	○以前から教員との関係は良好であったが、事業開始以後、さらに教員方からのあいさつが増えたように感じている。	・教職員は、学校支援ボランティアに対する理解もあり、協力的であると感じている。また、そうした雰囲気ができあがっているため、他校より新たに着任した教員もコーディネーターが職員室に顔を出したりボランティアが授業等に関わったりすることへの抵抗感は少ないようである。 ・学校側の窓口である教頭も、引継ぎが上手くいっており、人事異動があってもスムーズに連携が行われている。
栃木2	佐野市	○校長室便り等に掲載される回数が増えたし、いろいろな教員が気持ちよく挨拶してくれるようになった。（あたりまえと思わず感謝） ○最初、ボランティアに依頼することに躊躇していた教員が遠慮なく依頼できるようになって、その結果、教員が別のものに時間がかけられるようになり、図書館の環境整備を進めることができた。	・学力格差が見られるが、学校へどうアプローチしたらよいか今後の課題。
栃木3	宇都宮市	○現在は、コーディネート体制がシステム化されていて、学校側では教務主任が窓口となり、校長や副校長をはじめ職員も理解がある。 ○職員は、突然のキャンセルでもコーディネーターに言えば大丈夫と思う位になった。 ○ボランティアを入れた活動が定着している。教員がコーディネーターを信頼してくれるようになった。	・校長の強力なサポートが支えとなっている。
栃木4	塩谷町	○学校では「学校は地域の中の一部である」という考えが出てきている。 ○子どもからは「またお願いします」「後輩のためにまた来てください」という声が聞かれるようになった。	
栃木5	さくら市（複数）	○教員との距離が一層近くなった。	
栃木6	宇都宮市	○ボランティアが入った活動を喜んでくれてはいる。 ○中学生も地域活動に参加。	・学校を変容させるのは厳しい。 ・教師の理解次第で活動が活性化するかどうかは決まる。またせっかく軌道に乗ってきても異動によって、また振り出しに戻ってしまう。（わずかな期間で副校長が３人変わった） ・年度当初にボランティア要請カードを出して必要なボランティアを記入してもらえるようにしたが、なかなか理解されず回収されない。
青森1	八戸市	○職員会議で教務主任がボランティアからの声などを職員に伝えてくれるようになった。 ○ボランティアの有用性を再確認でき、教員も積極的にボランティアを活用しようという意識が出てきた。	・今までとても恵まれていたと実感している。それまで校長・教頭とのコミュニケーションが良く取れていたので、困ったり悩んだりしても一緒に解決してきた。しかし、正直、昨年からは全くコミュニケーションは取れず、こちらから働き掛けても、興味が無ければだめなんだと痛感している。今年度は教頭も代わり、ますます苦労しているのが現実。今は教務主任が相談に乗ってくれるので何とか活動している状況である。事業として展開していくならばもっと管理職への講習や周知徹底が必要なのではないかと思う。
青森2	青森市	○校長先生はじめ教員自身もボランティアの方々が来ることを楽しみにしていて、玄関でも挨拶だけではなく様々な会話があり、学校全体が風通しよく明るくなっていると思われる。	

(イ) 学校の変容、課題 ②

県	地区	学校・教員の変容・効果	学校・教員との関わりでの課題・その他
青森3	八戸市	○4年目にもなると、学校に保護者や地域住民がボランティアとして入ってくる状況があたりまえになってきた。それによって、教職員の姿勢にも変化がでてきた。 ○2年目になんとか実施できた際「各調理台に一人ずつのボランティアがついてくれたおかげで、時間的にも自分の精神的にも余裕をもって授業ができた。余裕のおかげで、生徒を別な角度から見ることができたのが収穫。来年も是非。」と喜ばれた。 ○校長も積極的に事業を推進しており、地域の人が学校に入るだけでなく、学校からも積極的に地域に子どもたちを出して活動するように働きかけており、授業（生活）の時間に地域に出向いての清掃活動や生徒会の奉仕活動を積極的に計画するようになり、地域との交流が盛んになった。 ○かつて東北一荒れた学校とまで言われたことがあったが、事業が始まって大人が学校に入るようになり、特に落ち着いた様子である。ボランティアが入ることが、非行の抑止力になっている。	・生徒達も、自分たちの学校生活のために親だけでなく地域ボランティアの協力が大きいと感謝している。また地域をふるさととして意識するようになった。 ・校長は過去に同校に勤務経験あり。PTA役員として活動していたコーディネーターとは以前から面識があり、強い信頼関係がある。 ・40数名の職員のうち毎年10名前後が転出転入する状況。 ・書道ボランティアの場合、専門的なものなので気軽には引き受けて貰えない。
青森4	青森市	○事業を通して、確実に地域との距離感が縮まったと感じる。 ○学校というより先生方の表情がとても明るくなったような気がする。 ○学校は地域にお世話になっている。地域のために学校にできることは協力するという意識が育っている。（八戸小唄80周年記念流し踊りへの協力等）	
青森5	青森市	○1回でもボランティアに活動してもらった先生は、違う事業や翌年に繋げてくれている。 ○先生方がボランティアの活動を理解し、活動していただこうと考えてくれている。	
新潟1	新潟市	○通信を出さなくとも、直接依頼してくれるようになった。 ○教員とコーディネーターの信頼関係ができた。 ○成果は何と言っても子どもの落ち着きにつながっている。	・校長の事業推進への意欲が高い。

ウ　ボランティアとの関わり

(ア)　苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント　①

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市	△書写の指導に関しては、自分の持つ人脈の中にそうした技能を持つ人がいなかったため、ボランティアを見つけるのに手間取った。	・他の２人のコーディネーターから情報の提供を受けて対応することができた。 ・ボランティアの能力や性格などを把握し、ボランティアに入る学年まで考慮して人選を行っている。 ・ボランティアの職業や自由になる時間などにも配慮し、無理をせずに活動を続けられる人だけに声をかけるようにしている。 ・ボランティアの中からコーディネーターを新たにお願いし、その人脈によりボランティアを見つけるようにした。 ・ボランティアに関する情報の交換・共有を行う上で、他の２校のコーディネーターとの月に１回の情報交換会は非常に有用であると感じている。
栃木2	佐野市	△ボランティアとしてどうかなと思う（ルールを無視して活動してしまう）人が参加してきたことがあり、希望してきた時の対応に苦労した。	・とにかく話を聞いた。否定しなかったのがよかった。 ・学校での活動が合わないのなら、もっと大きい受け皿である市のボランティアはどうかと勧めた。 ・ボランティアの参加回数が少ない人にも、気持ちよく参加していただけるようメールをまめに送り、感謝の気持ちや次回の誘いを伝えている。特に交流会の前にはこまめに誘って、つながりが絶えないようにしている。 ・ボランティアが活動以外にも楽しめる時間を作りたいと思い、講座を開講することにした。また、講座を開講することで新しい可能性をつくっていける場にしたいと考えている。校長を講師に、校長の専門である歴史講座を作ってもらった。 ・一生懸命やってくれるボランティアには応えようという姿勢で対応している。 ・活動数が増えた減ったで一喜一憂するのではなく、ボランティアが定着するようにということを重視した。繰り返し、継続して活動できるようにしてきた。
栃木3	宇都宮市	△自薦のボランティアの中には、ボランティアとしてふさわしくない方もいることがある。	・ボランティアの申し出を断るのではなく、その方にふさわしい仕事があるときにお願いできるよう、ボランティア登録を勧めている。 ・ボランティアが子どもの支援に入る前に、（年配の方には想像もできないような）子どもたちの現状について十分に説明するようにしている。（スティックのりしか使えない子、片面だけ真っ黒焦げにする餅焼き、手を振って歩こうというと、羽ばたきしてしまう子etc ） ・活動の前には、留意事項（守秘義務、宗教に関することは×）をきちんと伝えるようにしている。 ・とにかく、ボランティアだということを念頭において、緊張して学校の門をくぐる方々に、授業にでていただくので、依頼するときはきちんと何度も連絡を取り納得してから入っていただいている。 ・ボランティアとのお茶飲み話で出る話は重要な情報源である。その方の特技や適性を引き出すことができる。また、そのボランティアの方から紹介された方にボランティアになっていただくと上手くいくことが多い。 ・コーディネーターはアンテナを高く張って、つなぐことに徹するようにした。 ・最終的な依頼は副校長からしてもらい、学校から依頼されているという気持ちをもって活動できるよう配慮した。 ・学校に対してのクレーマーだけは出さないよう気をつけている。何か行き違いがあったときはコーディネーターが間に入ってクッションになるよう、お礼とお詫びはすみやかにを心がけている。

(ア)　苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント　③

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木4	塩谷町	△１４０人のボランティアの中で、要請のない方々をどう生かしていくか。 △「読み聞かせ」の依頼がありボランティアの方々に行っていただいたが、国語の授業のようなことを展開してしまい、先生方が顔を見合わせてしまったという事があった。後から分かったことであり、信用している方々であったが、送り出す前にきちんと確認しておけばよかったと反省した。学校はすごく気を遣ってくれていたんだと痛感した。	・それからは、事前にボランティアとの情報交換をきちんと行い、活動内容を把握してもらうよう心がけた。
栃木5	さくら市	△声をかけても、丸付けボランティアなどは先生がやる仕事だと、断られてしまうことがあった。ボランティアによって意識に温度差がある。（何でも協力してやろうという方ばかりではない） △ボランティアリストがあり、できるだけたくさんの方に活動してほしいと思ってはいるが、依頼を受けた以上は自分が知っていて、信頼のおける人にお願いすることになってしまう。人材の活用が難しい。	・（元教員の立場を生かしながら）学校（教員）とのパイプになれるように努めた。例えば、グループごとにボランティアが入るときには、ボランティアによっては立ち位置が分からないこともあるので、ボランティアをさりげなくグループに割り振るなど上手く配置するようにした。 ・教員の声を休み時間にボランティアに直接聞かせるようにした。 ・市教委担当とよく連絡を取り合っている。ボランティアが見つからないとき等は大変頼りになる。 ・依頼を受けた以上は、よく分かっている人、しっかりした人に活動していただきたいということを意識している。 ・コーディネーターは黒子に徹すること。自分が主役になるのではない。せっかくのボランティアの活動を邪魔することがないように活動してきた。
栃木6	宇都宮市	△ボランティア活動を活性化すること。1回きりでなく、活動を続けてほしいが難しかった。	・市教委主催の研修で情報交換を行うことにより、他地区のコーディネーターとのネットワークができたので、そのネットワークが大変役だった。このネットワークではコーディネーターが作った広報紙を交換して参考にし合ったり、テレビカバーづくりなどのボランティアによる活動の情報交換を行ったりして、活動を広げるのに大変役立った。 ・スムーズなコーディネート（地域の情報を拾えるようにする）のために、小学校区それぞれの地元からコーディネーターを配置するようにした。 ・活動後、ボランティアをボランティア室で待っていて、お茶を出しながら次の活動についての話をするようにした。（次につながるように）
青森1	八戸市		・初めは自分もボランティアとして一緒に参加していたが、仕事の関係で（小学校職員になってから）参加出来なくなり、今はコーディネーターに徹している。（あれもこれもと無理しないことも大切） ・ボランティアの方々との関わりは、一緒にボランティアに参加出来なくても会った時には必ず声を掛け、何気ない会話の中からボランティアの気持ちをくみ取りたいと思っている。 ・ボランティア通信を作成している。ボランティアして下さった方を保護者に紹介したり、小さくてもやりがいを見つけられたら…と思っている。 ・教員にもボランティアに声をかけてもらえるよう勧めている。 ・「こちらも助けて貰って有難いけれど、ボランティアを依頼するという事は実はそれも『ボランティア』なんだよね。」という話があった。ボランティアに来て頂いて申しわけないと思っていても、実は声がかかるのをとても心待ちにしているのだということを実感している。だからといって、好きで来ているんだからという考えになってはいけない。学校とボランティアの関係をしっかり作っていくことがコーディネーターの務めである。

(ア)　苦労した点、効果を上げる工夫・ポイント　②

県	地区	ボランティアとの関わりで苦労した点	ボランティアとの関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森2	青森市	△自分の力を発揮したい、子どもたちのために頑張りたい、という気持ちが強すぎて、目的からずれていくボランティアがいる。	・事前の打ち合わせでその学習の目的を確認して、また終了後もふりかえりの時間（お茶を出して）を持ち、次回の活動に繋げていくことを欠かさないようにしている。 ・活動の感想だけではなく、学校に対する思い、要望など、ボランティアからの発信があったときには、しっかり丁寧に受け止めて、学校側に伝えていく。 ・子どもたちや先生方の感想等は、ボランティアの方々には必ず伝えるようにしている。感謝の言葉は、ボランティアのエネルギーになる。 ・図書ボランティアに対しては、途中でお茶を差し入れして顔出しをしている。
青森3	八戸市		・「ありがとうございます」という感謝の言葉がボランティアに対するすべて。 ・お茶やお菓子付きの雑談（慰労会 or 反省会）は欠かせない。
青森4	八戸市	△事業のはじめの頃は、登録してくださる方・先生方の要望に沿う時間帯に活動していただける方が少なく、要望に沿えないことも多くあった。	・守秘義務ややりすぎのない様、直接言いにくい事はボランティアの部屋に掲示して共有した。 ・ボランティア終了後、ティータイムなどを設けて、ボランティアどうしのコミュケーションをはかった。
青森5	青森市	△ＰＴＡ活動とボランティア活動の住み分けで、ＰＴＡ執行部の理解がなかなか得られなかった。	・何度も説明をするなどの努力を重ねた。 ・来校時は玄関まで出迎え、活動後は雑談しながら感想を聞き、次回の活動がやりやすいよう改善するよう心がけた。 ・お礼の言葉は忘れないようにしている。 ・活動（雪の中での登下校見守り等）へのお礼を込めて、学校で給食を食べてもらいながらの交流会を設けた。
新潟1	新潟市	△当初、自尊心が強いボランティアがいて、先生方への応対が横柄だったり、他のボランティアとぶつかってしまったりしたことがあった。「～してやっている」という感覚であった。 △ボランティアが組織化し、活動が活発になってきたが、自分の気持ちを子どもや先生に押しつけるような傾向もある。	・とにかく説明した。自分は子どもたちのためになればいい、先生のためになればいいという気持ちでコーディネーターをやっていること、縁の下の力持ちというポジションでいてほしいということを話した。一対一でなく、何人かで話し合う機会も作って、周りの人の話も聞く機会を作った。 ・どんな活動でも受け入れるのではなく、線を引くべきところは引いて、学校が迷惑だと思うことはやめてもらう。ときにはそういうボランティアには手を引いてもらうこともある。 ・ボランティアの話や言い分も聞いて、認めて、合わないからといって辞めてもらうということはしなかった。

(イ) ボランティアの変容、課題 ①

県	地区	ボランティアの変容・効果	ボランティアとの関わりでの課題、その他
栃木1	日光市	○子どもたちと活動することに喜び・楽しみ・生きがいを感じるようになり、当初よりもやる気がアップしている。	・現在でもボランティアとの間には良好な関係が築かれているが、さらによりよい関係づくりを進めるためにボランティア交流会を行いたいと考えている。しかし、これは企画段階で、現在のところ、まだ実現していない。 ・ボランティアは非常に協力的で依頼を断られたケースはほとんど無い。また、事後のクレーム等やボランティアをやめるケースも現在までのところない。
栃木2	佐野市	○初めは遠慮がちだった方も、積極的に責任感をもって参加してくれるようになった。 ○子どもと関わることで、自分の学び直しになると感じている方、改めて本に向き合う時間が持ててうれしいという方、普段は関わることのない子どもたちと楽しい時間を過ごせて、また次回も参加したいと言う方など、楽しみ、喜び、生きがいを感じている。 ○クレーマーから支援者になったケースもあった。	
栃木3	宇都宮市		・優秀なボランティアが紹介してくれるボランティアは優秀である。 ・学校はクレームが出ると活動しなくなる傾向がある。
栃木4	塩谷町	○ボランティアの方（４０～８０代）は、皆さん自主的に活動されてきている。 ○講座等に参加し、自己研鑽をするボランティアも出てきた。	
栃木5	さくら市	○一度活動したボランティアが継続して活動してくれるようになった。 ○活動したボランティアが仲間に「楽しかったよ」などと声をかけて、ボランティアが増えた。 ○城下町の伝統である寒竹囲いを環境ボランティアが作ってくれている。地元の観光ボランティアも巻き込み、広がりを見せている。 ○ボランティアが活動をとおして学校が忙しいということに気づき、学校を支援しようという意識が生まれてきた。 ○読み聞かせボランティアどうしが、月１回スキルアップと図書の選定も兼ねて自主講座を立ち上げた。	
栃木6	宇都宮市	○活動をしているうちにボランティアが声を掛け合ってボランティアが増えている。	・活動がなかなか活性化せず、次の活動につなげることができなかった。
青森1	八戸市	○参加して下さった方々からは、参加して良かった、子どもの様子が見られて良かったとの声が多数聞こえている。一度、参加してくれた方はほとんど次も参加して下さるので感謝している。 ○保護者以外の地域のお年寄りが誰かに頼りにされるという事をとても楽しみにしているということが分かった。地域の方が学校にくるということは、学校によっては負担なのかもしれないが。	・昨年までは教頭がこまめに声をかけてくれたり挨拶を徹底してくれていたが、今年度は全くなく、今後の保護者の反応に不安を覚えているが、参加して下さった方々からは、参加して良かった、子どもの様子が見れて良かったとの声が多数聞こえている。
青森2	青森市	○最初は控え目であったボランティアが、人（教員、他のボランティア、子どもたち）と積極的に会話するようになり、活動を楽しみ、自主性を感じるようになった。	
青森3	八戸市	○最初はおそるおそる来てくれた（特に中学校は敷居が高いらしい）ボランティアも、子どもたちと直接かかわる活動ではとても楽しそうである。	
青森4	八戸市	○ボランティアも最初は構えていらっしゃることが多かったが、最近では自然に楽しんで来てくださっている。 ○学校に来るのが楽しいとおっしゃってくださる。	

県	地区	ボランティアの変容・効果	ボランティアとの関わりでの課題、その他
青森５	青森市	○保護者のボランティアはＰＴＡでは味わえない喜びを感じている。 ○学校の様子がボランティアになって分かることが多く、学校のよき理解者となっている。 ○活動が生活の張り合いになっている。 ○ＰＴＡ執行部も理解してくれるようになった。	
新潟１	新潟市	○活動をとおして、ボランティアの性格が穏やかに丸くなっていくのが感じられた。 ○「先生方って大変だな」という声が聞かれるようになり、学校への理解が深まってきた。	

エ　地域社会との関わり

(ア)　苦労したこと、効果を上げるポイント　①

県	地区	地域社会・地域住民との関わりで苦労したこと	地域社会・地域住民との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
栃木1	日光市	△現役の保護者世代は、日々の仕事が忙しく、なかなか学校の行事等に関わることが難しい上、学校支援ボランティアをはじめ、学校でどのようなことが行われているかについて把握することが困難である。	・学校だよりに学校支援ボランティアの記事を掲載してもらうようにした。 ・学校からの依頼があると、適任と思われる人のところにどんどん出かけ、ボランティア勧誘の声かけを行っている。 ・地域に出かけた際には、積極的に地域の方に事業の周知を行っている。 ・さらなる活動の拡大・継続のために、ボランティアの中から、新たに2名にコーディネーターをお願いした。 ・学校だよりに学校支援ボランティアの記事を掲載してもらうようにした。
栃木2	佐野市		・連携に関しては一歩引いてしまっている団体もあるが、積極的につながりを持つように努めている。 ・なるべく地域の行事に参加するよう心掛けるようになった。 ・足繁く公民館に通い、いろいろな団体と知り合うようになった。 ・５月総会時に教育委員会担当者と公民館に出かけた。館長から団体に声をかけてもらい、写真の展示にこぎつけた。 ・公民館で打合せ（勉強会）を行うことで、利用黒板に記載された団体名に関心を持ってくれる人が現れた。（広報や公民館とのつなぎのためにもたまには、公民館を使うことも効果的である。） ・コミュニティカレンダーを作成・配布し、学校の行事等を住民にも知らせるようにした。
栃木3	宇都宮市		・回覧で地域に事業の周知を図っている。
栃木4	塩谷町	△全戸にボランティア募集のチラシを配布したが効果が薄かった。	・もとからボランティアをしていた人（キーパーソンになる人）に声をかけて集めた。 ・老人会、自治会等に呼びかけて、事業の周知と協力をお願いした。 ・公民館にコーディネータの居場所があることも効果的（人が集まる）。 ・公民館を会場としたボランティアとの交流会を作った。
栃木5	さくら市		・地域住民への働きかけは、コーディネーターからは特に行っていない。市教委がその役割を担っている。 ・地域の人はプリントを配っただけでは動かない。直接声をかけることがきっかけになる。 ・校長が活動内容を広報に載せてくれている。
栃木6	宇都宮市	△自治会長さんたちは、学校に何かをしたいという気持ちをもっているが、情報がないので活動できない。 △回覧板を活用して情報提供したり、チラシをまいたりしているが効果は不十分。（しかし、）見るのは3割くらい。関心を持つ人はもっと少ないと思う。	・情報の共有のためにコミュニティカレンダーを作って、（予算があったときは全戸）配布した。ただし回覧板で配ったが取らなかった家庭もあった。見づらいというクレームもあったが、それだけ行事があることを理解してもらうためには必要だと思っている。 ・自治会長とは仲良くしている。まちづくり協議会でもつながりがあるので。懇親会などにも出させていただいている。地域に親しい人がたくさんいた方がやりやすい。
青森1	八戸市	△出身が地元ではないこと、転勤族で地元に詳しくなかったなど地域での苦労はたくさんあった。	・当初、ＰＴＡ副会長をしていたので、地域の行事や会議などにも何気なく参加するのではなく、顔と名前を覚えるつもりで参加してきた。
青森2	青森市		

(ア) 苦労したこと、効果を上げるポイント ②

県	地区	地域社会・地域住民との関わりで苦労したこと	地域社会・地域住民との関わりで効果を上げる工夫・ポイント
青森3	八戸市		・地域の拠点である公民館との関係づくりを大切にしている。地域団体とは直接連絡することもあるが、公民館館長さんに間に入ってもらうことも多い。間に入ってもらう公民館との関係を保つようにしている（定期的に訪問。時には手土産を持参して）。地域住民の声も公民館を通して聞いている。 ・地域住民の声を地域密着型便り「ブルースカイ」にも載せている（具体的に感想が聞ける）。ちなみに掲載されている学校便り「一心」（校長が毎月発行）と地域密着型便り「ブルースカイ」（不定期発行　コーディネーターが編集長でボランティアが作成）は毎月１回町内会各班回覧用（地域への情報発信）としてコーディネーターが配布している。（班数６００部印刷 住民数約１万８千人 町内数３２） ・学校に町会長が集まる行事の際には、校長に事業についての話をしてもらうよう働きかけている。
青森4	八戸市	△学校同様に事業に内容を地域に皆さんに知っていただくことが難しかった。	・回覧や各種団体の集会に伺って説明を繰り返したり、地域の中でも皆さんが集まるところを聞いたり、見たりしたら、積極的に声をかけて常にコミュニケーションを取ることを心がけた。 ・団体の長の方には、出来るだけ事業の報告や学校のことを伝え、地域住民の皆さんには公民館まつりに活動報告を掲示したり、ＰＴＡの皆さんには広報誌にのせていただいたりして、事業の周知の努力をした。
青森5	青森市		・事業開始時、学区内町会長と地域団体に事業説明と協力依頼のため、本事業パンフレットや校長・ＰＴＡ会長・地区会長連名文書とボランティア募集チラシを持参し、12町会会議に出席した。同様に民生委員会にも出席し、説明を行った。 ・地域ボランティアが活動した様子を町会長に機会あるごとに話し、また地方広報紙に記事として掲載している。
新潟1	新潟市	△事業協力のはたらきかけで苦労した。	・どんどん地域にでかけて、町会長等との人間関係作りに努めた。ご主人が町会長ならば、まず奥さんと仲良くなるよう工夫した。 ・あえて深く考えず、飾らず、知らないことを勉強させてもらっているということを意識している。

(ア)　地域社会・地域住民の変容、課題　①

県	地区	地域社会・地域住民の変容・効果	地域社会・地域住民との関わりでの課題・その他
栃木1	日光市	○新しい2名のコーディネーターの人脈により、ボランティアはさらに増えつつあると感じている。コーディネーター着任からの3年あまりでボランティアが3割程度増加した。 ○事業の周知が拡大するとともに、地域住民の中にも今まで以上に学校のために役に立ちたいという意識が広がり、老人会から学校敷地内や周辺の除草を行いたいなどの申し出も見られるようになった。 ○学校だよりの記事を話題に、保護者世代と祖父母世代の交流が生まれてきている。	
栃木2	佐野市	○コミュニティカレンダーの配布により、事業に関心をもつ人が増えてきた。 ○声をかけ合う人々が広がった。今まで、話をしなかった年代の人とも声をかけ合うようになった。 ○苦手だった婦人会のおばさんも、ささいな会話でつながりができ、会を認知してもらえるようになった。	
栃木3	宇都宮市	○学校の保護者として活躍した人たちが、地域の世話役として活躍を続ける場となっている。８０歳を過ぎてもボランティアをしてくれる方々がいる。皆、依頼を受けることを楽しみにしている。	・学校区内の地域が、もともと地域で子どもたちを育もうとする意識が高く、活発に活動する地域団体がたくさんあり、その方々の協力なくしては学校経営は上手くいかないと校長も認める程の地域。学校支援はあたりまえの地域なので導入はスムーズだった。
栃木4	塩谷町	○学校に対しての気持ちがさらに強まり、事業に協力してくれた。 ○学校が地域の人の居場所にもなってきている。 ○震災時にお互いの安否等の声のかけ合いができた。（活動を一緒にやった仲間だからこそできた。）	
栃木5	さくら市	○広報等をとおして、地域の関心が高まっている。 ○地域の子どもが関わることで、地域の会話が増え、町が明るくなった感じがする。	
栃木6	宇都宮市	○地域の人との関わりが深くなり、地域の人が学校のために何かをしたいという意識の強さが感じられる。	
青森1	八戸市	○今現在はＰＴＡでなく地域住民になったが、地域の人・団体の方に、様々な場面で声をかけていただくようになり（おかげで休みなし…）、困った時には助けていただいているので助かっている。 ○ほとんどが転勤族という特殊な環境の子どもたちだが、地域の方々が故郷を作ってあげたいと言って下さり、とても感謝している。	
青森2	青森市	○地域のボランティア団体、まちづくり団体等が事業によって横のつながりを作ることができた。 ○地域で子どもの話題が増えてきた。 ○事業を理解してくれている人が自分の地域でＰＲをしてくれたり、人を紹介してくれることも増えてきた。 ○学校と地域との距離が縮まるとともに、学校に何か協力していきたいという地域住民の思いが感じられる。	

(イ)　地域社会・地域住民の変容・課題　②

県	地区	地域社会・地域住民の変容・効果	地域社会・地域住民との関わりでの課題・その他
青森3	八戸市	○地域の大人が学校に入ることにより、住民の学校への関心が高まり、地域に見守られた学校という感がある。○公民館が学校と地域の連携の役割を果たしている。生徒会活動から始まった「ハッピートライアングル活動」（ペットボトルのキャップを集めて車いすに替える活動）が公民館を収集の窓口にすることで、地域住民からも協力してもらえるようになった。	
青森4	八戸市	○地域協議会での話題が、学校のことだけでなく、地域のことについての話題が多くなった。 ○地域のお互いの顔が見えるようになった。 ○確実に学校に入っていただける住民の方が増え、通学路での見守りや、子どもたちに声をかけてくださる方が増えた。 ○震災時（津波）に中学校、小学校ともに避難所となった。そこで活躍したのはＰＴＡや学校支援ボランティアで活動してきた人だった。皆避難することで精一杯だったが、学校によく入っている住民・ボランティアは用具の場所や校内の様子が分かっているので、すぐに対応できたのである。いつものやりとりが役立った。 ○長年実現できなかった地区運動会と学校の運動会も共催が決まった。	
青森5	青森市	○子どもたちのために何かしたいと思っても、何もできない歯がゆさを感じていたたくさんの地域住民の方が、ボランティア活動をとおして、それを払拭し、満足感を得ることができた。	
新潟1	新潟市	○町会長たちが学校に対しても周囲の人たちにもやさしくなった。人が丸くなった。たくさん人と顔を合わせることが増えたことから。学校のことを気遣ってくれるようになった。（相手の都合も考えてくれるようになった。） ○地域活動が盛んになった。 ○学校を舞台に活動する人が増えた。 ○学校ではできないことを地域活動として反映している。	

オ　学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために　①

県	地区	学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために
栃木1	日光市	・何より、学校支援ボランティアの活動をとおして、さまざまな世代の交流を図ることが重要であると考えている。地域の中でさまざまな世代間の交流が生まれていることが、よりよい地域づくりにつながっていくと考えている。 ・学校支援ボランティアの活動推進に関しては、教職員の理解が特に重要であり、教員が地域の人々に遠慮せずに協力を依頼できるような、あるいは素直にボランティアの申し出を受け入れられるような体制づくりを管理職が進められるかどうかが重要なポイントであると考えている。
栃木2	佐野市	・人も交えて自分がまず地域に出ていかないとつながりは持てない。小さなつながりからしか大きなつながりは生まれないので、一期一会を大切にする。また、自分と同じ考えの人ばかりが正しいわけではないと肝に銘じること。 ・声をかけ合う人々が広がった。今まで、話をしなかった年代の人とも声をかけ合うようになったのは地域づくりの第一歩だと思う。 ・自分自身コーディネーターをやるようになって、初めて地域を意識するようになった。隣の町内の人、知らない団体を知るようになった。まずは地域を知ることが地域づくりにつながるのでは。 ・地道にこつこつと続けていくこと。学校を中心に人が集まる空間作りを意識していく。 ・しっかり関心を持つ人が増えること。コーディネーターを誰かに譲ることも。誰かに譲る事で別の層に広がっていく。人が変わらないと活性化していかない。違う色が入らないと広がっていかないということもある。
栃木3	宇都宮市	・コーディネーターは、生活にゆとりのある方（時間的にも金銭的にも）がなっている。またそうでなければできない。学校支援地域本部事業の趣旨には賛同するし、必要性を認識しているが、長続きさせるためにはコーディネーターの善意に期待するだけでは駄目で、それなりの金銭的措置も考慮する必要はある。 ・開かれた学校づくりが大切である。開かれた学校とは、守秘義務を徹底し、その上で子どもたちのためになるという方向性をしっかりもち、地域を信頼することだと思っている。せっかく始まって定着した、コーディネーターとの信頼関係を上手に活かしてほしい。コーディネーターもやりがいを感じているし、地区の方々も依頼を心待ちにしており、たいへん協力的である。
栃木4	塩谷町	・顔を合わせたら声を掛け合い、きっかけをつくり地域のコミュニティづくりに貢献する。 ・個人で何かできることはないか考えてみる。地域の方々は，自分の力が役に立っていると思うと前向きになる。そのことが地域づくりにつながる。 ・経験豊富な方や専門的な方など多くの人たちがいるが、まず声をかけ地域のイベント等にどんどん参加・協力していただくこと。 ・ボランティアの中から、地域コーディネーターとなる人が出てくれるといいと思う。そういう人を育てたい。
栃木5	さくら市	・大変な事業であるが、これを続けていくことがよりよい地域づくりにつながると思う。１人ではとてもできないので、多くの人が関われるようにしていく。コーディネーターを増やすことも活性化につながっていくと思う。
栃木6	宇都宮市	・学校を中心にというやり方だと、かえって地域の人は入りにくいところもある。地域にまちづくりのための組織ができるとよい。例えば、防犯というと子どものためだけでなく、振り込め詐欺に代表されるように高齢者が関わるところもある。その対応には、まちづくりに向けた「防犯部会」あるとよい。同様に学校については、「学校を支援する部会」を作った方が、学校と地域がつながった地域づくりにはよいのではないか。 ・とにかく開かれた学校をつくっていくこと。そのためには学校の理解が大切である。管理職向けの研修を行ったり、社会教育主事有資格者など中心になる教員が校内で活動しやすいように配慮することが必要である。

オ　学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために　②

県	地区	学校支援ボランティアによる活動をよりよい地域づくりに役立てるために
青森1	八戸市	・やはり学校の意識。いくら地域住民が学校に何かしてあげたい、役に立ちたいと思っていても、学校側が受け入れる気持ちがなければ無理だと思う。管理職は大変だと思うが、地域の方との付き合いが面倒、教員は自分でも出来る、そう思っているうちは地域全体が良いバランスにならないと思う。そういう意識を変えて、ボランティアを受け入れる体制づくりしていただきたい。 ・今までお茶を飲みながら良く顔を出していた方も今年度はほとんど来なくなり、近辺のお年寄りの方々も隣の小学校にボランティアで参加していると聞き（同じ学校区なのでまだ良いが）、残念である。やはり、子育てを終わった世代の方々は何かで学校に恩返しをしたいと思っているんだなと実感している。子育て真っ只中の保護者より、経験豊富で時間がある方々が地域には沢山いる。地域の方々に見守られて育った子供がいつか大人になり、自分もそういう人間に育っていくのではないかと思う。
青森2	青森市	・どのような活動をしているのか、地域に見えるようにすることが大切である。三内地区は町会組織がしっかりしているので、町会長が活動を把握して地域に発信できる流れをつくり、また「活動してみたい！」と思っている方々の情報をこちら側も察知できるようにする。併せて、既存の団体との情報交換も大切にして、協力体制が組めるようにしておく。この事業をより多くの人々に理解してもらい、学校支援ボランティアの輪が広がっていくことは、地域においても子どもへの関心が高まったり、世代間の交流、近隣の町会との交流が盛んになっていく。結果、それは元気なまちをつくっていくことに結びつく。
青森3	八戸市	・学校に地域ボランティアが入って活動するだけでなく、子どもたちもどんどん地域で活動し、相互交流することにより、地域も変わっていくと思う。
青森4	八戸市	・この事業で地域のお互いの顔が見えるようになった。これからは若い人も動かして行かなくてはならないことに気がつき始めている。課題は、やはりもっとボランティアを増やすことである。しかしながら、無理に増やすのではなく、1年に1人でも2人でもいいと思っている。
青森5	青森市	・昨今若い世代の方々は、自分の家庭生活にしか目を向けない傾向があり、同じ町会に住んでいる人も知らないし、関心がない人が多いと感じている。しかし、ボランティア活動をとおして年代や経験など違う地域や保護者の方が「これからの社会を担う子どもの健やかな成長のため」という同じ目的のために活動し、交流する機会があり、その機会が増えていくことで地域へ目が向けられ、意識が高まっていくことで、地域の輪が広がり、結びつきが強まり、その結果、地域の発展につながっていくと思う。
新潟1	新潟市	・コーディネーターは代わって（代替わり）いかなくてはならないと思っていたが、今は続けていきたい。仲の良いコーディネーターどうし、みんなで楽しくやっていければ良いと思っている。学校のコーディネータールームが、PTA室、コミュニティ協議会の事務所も兼ねており、いろいろな人が出入りしており、人の交流の場になっている。人と人との交流があって、お互いが尊重し合えるようになる。

(2)　県外教育委員会への聞き取り調査

ア　青森県教育委員会
　　学校と地域を結ぶコーディネーターの養成による学校支援活動の充実

1　事業の実施状況

青森県教育委員会（以下県教委）では、平成 19 年度に県単独事業として「地域による学校支援の基盤強化事業」を立ち上げ、学校と学校支援ボランティアの協働による教育活動の取組の定着に努めてきた。平成 20 年度からは、これを「学校支援地域本部事業（以下事業）」と合わせて実施し、「地域ぐるみで子どもを育む活動」のさらなる強化を図ってきた。

青森県における学校支援地域本部の設置状況は以下のとおりである。

平成 20 年度　18 市町村 36 地域本部 69 校（小学校 51 校　中学校 18 校）
平成 21 年度　22 市町村 48 地域本部 97 校（小学校 68 校　中学校 29 校）
平成 22 年度　21 市町村 44 地域本部 97 校（小学校 69 校　中学校 28 校）

2　研修会の充実

県教委では、事業実施以前から学校支援ボランティア活動の活性化のためにコーディネーターを配置することを重視し、コーディネーター養成に力を入れてきた。(平成 17～18 年度「学校と地域を結ぶコーディネーター養成セミナー」、平成 19 年度「地域コーディネーター養成講座」等)

平成 20 年度からは「学校支援コーディネーター養成講座」、「学校支援ボランティア研修交流会」等の研修会を実施して、学校と地域の連携の必要性、意識啓発、取組の効果等の周知・広報を図り、コーディネーターの養成・資質の向上をはじめとする学校支援体制の整備に努めてきた。養成講座、研修交流会はいずれも県内 6 地区（教育事務所単位）ごとに実施された。地区ごとに実施することにより、受講者の参加負担が軽減され、多くの受講者の参加が促された。また、養成講座では各地区とも同じプログラムで実施し、地区による研修内容に差が生じないように配慮するとともに、県全域での活動の推進と活性化を図った。研修内容としては、県教委担当から活動方針、大学教授等による講義・演習、活動中の県内学校支援コーディネーターによる事例発表等を取り入れた。

これらの充実した研修会により、優れたコーディネーターの養成と資質の向上と関係者同士のネットワークづくりが図られ、県内各地における特色ある学校支援活動につながった。

3　事業の成果

青森県では学校支援ボランティア活動を、4 分野（①学習アシスタント　②ゲストティーチャー　③環境サポーター　④施設メンテナー）に分類し、取組状況を調査（平成 22 年度実施「学校と地域との連携に関するアンケート」）したところ、各校において年々複数分野の取組を行う学校が増えているという結果が出ている。このことは、事業によって多様な学校支援活動が推進され、学校支援ボランティア活動が着実に浸透していることを意味するものである。

また、事業を実施してきた学校・コーディネーター・市町村教育委員会を対象に行った「平成 22 年度　学校支援地域本部事業の事業評価に関する調査」では、事業の実施効果について、学校 95%、コーディネーター 88%、市町村教育委員会 100%が事業によって「成果を得られた」と回答している。さらに、コーディネーターを配置した効果について、学校 96%、市町村教育委員会 100%が「効果があった」と回答している。事業の要としての学校支援コーディネーターの活躍が確認された。これは、言い換えれば県教委が推進してきたコーディネーターの養成が、事業の大きな成果をもたらしたということができる。

【参考資料】

学校支援コーディネーター養成講座

開催期日・会場・講師	申込先
西北地区　平成２２年　８月　４日（水）～　５日（木） 会場：五所川原地域職業訓練センター 講師：弘前大学生涯学習教育研究センター　講師　深作拓郎	西北教育事務所
東青地区　平成２２年　８月２３日（月）～２４日（火） 会場：青森県総合社会教育センター 講師：青森中央学院大学経営法学部　教授　高橋　興	東青教育事務所
上北地区　平成２２年　８月３０日（月）～３１日（火） 会場：七戸中央公民館 講師：　日本大学文理学部教育学科　　教授　佐藤晴雄	上北教育事務所
中南地区　平成２２年　９月　８日（水）～　９日（木） 会場：青森県武道館 講師：　日本大学文理学部教育学科　　教授　佐藤晴雄	中南教育事務所
三八地区　平成２２年１０月２６日（火）～２７日（水） 会場：八戸市福祉公民館 講師：宇都宮大学生涯学習教育研究センター　教授　廣瀬隆人	三八教育事務所
下北地区　平成２２年１０月２８日（木）～２９日（金） 会場：むつ来さまい館 講師：宇都宮大学生涯学習教育研究センター　教授　廣瀬隆人	下北教育事務所

日　　程

【１日目】

研　修　日　程　・　内　容	方　法	講　　師
【10:00～10:30】　受　　付		
【10:30～10:40】　開 講 式		
【10:40～12:00】 「学校支援ボランティアコーディネートの実際」 ～課題の解決方法と成果～	講義・演習	〔西北・三八〕出崎真里（青森市） 〔東青・上北〕小松和恵（八戸市） 〔中南・下北〕淡路典子（八戸市） ※オブザーバー 上記４に書かれている講師
【13:00～15:30】 「学校支援ボランティア活動の 効果的な運営方法と今後の方向性」 ～コーディネーターの必要性～	講義	上記４に書かれている講師 〔西北〕　深作拓郎 〔東青〕　高橋　興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人

【２日目】

研　修　日　程　・　内　容	方　法	講　　師
【10:00～10:30】　受　　付		
【10:30～12:00】 「学校支援ボランティア活動の ニーズを掘り起こす」 ～学校現場で求められるボランティア活動～	講義・演習	各教育事務所社会教育担当者 上記４に書かれている講師 〔西北〕　深作拓郎 〔東青〕　高橋　興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人
【13:00～15:15】 「学校と地域の協働による教育活動の今後 」	講義・演習	上記４に書かれている講師 〔西北〕　深作拓郎 〔東青〕　高橋　興 〔上北・中南〕佐藤晴雄 〔三八・下北〕廣瀬隆人
【15:15～15:30】　研修のまとめ・アンケート記入・閉講式		

「平成 22 年度学校支援コーディネーター養成講座実施要項」より抜粋

イ　和歌山県教育委員会

子どもも大人も共に育ち、育て合う『きのくに共育コミュニティ』の形成

1　事業の実施状況

平成 20 年度に学校と地域の具体的な連携強化を図る目的で教育委員会内に組織横断型の共育コミュニティ推進室が組織される。時同じくして「学校支援地域本部事業」が開始されることとなり、それを活用しながら、平成 20 年度より、中学校区等を一つのまとまりとして、学校・家庭・地域が力を結集し、子どもたちを豊かに育み、人と人とのつながりを再構築することをめざした「地域共育コミュニティ」づくりを全県的に進めている。

和歌山県における地域共育コミュニティ本部の設置状況は以下のとおりである。

平成 20 年度　18 市町 20 本部（委託事業）
平成 21 年度　22 市町 24 本部（委託事業）
平成 22 年度　22 市町 24 本部（委託事業）

2　県の主な取組

きのくに共育コミュニティの全県的な展開として、参考資料のとおり「地域共育コミュニティ本部の拡充・支援」はもとより、「広報・啓発活動」「人材育成・活用」「市民性教育推進」等、広域的な連携による取組を実施している。

平成 20 年度には和歌山大学と市町村教育委員会の協力を得て、地域の教育力の必要性を啓発する「共育フォーラム」を全市町村（30 市町村）で開催した。このフォーラムでは地域の様々な立場の方から多くの意見が出され、子どもを中心とした、人と人とのつながりをつくる絶好の機会を得て取組をスタートした。

人材育成の面からは、従前より県単独事業として実施してきたコーディネーター等養成講座をはじめ、ボランティア活動地方別講座やコーディネーター等スキルアップ講座等の研修を実施している。

また、平成 21 年度には学校側の理解の必要性という課題を受け、教員対象の「学校と地域の連携を考える共育フォーラム」を県内 5 地域で実施し、平成 21 年度から 22 年度の 2 か年で約 400 名の参加を集めている。さらに、平成 22 年度からは県内全ての学校の地域連携担当教員等を対象に「共育コミュニティ研修講座」を年 3 回開催し、教員の理解促進と更なる取組の推進を図っている。

3　地域共育コミュニティの取組事例〈海南市・巽地域共育コミュニティ本部〉

巽地区では約 10 年前から自治会を中心に 60 名余りのメンバーで遊歩道や公園の清掃や管理、公園の花植えなどを行ってきた。このような活動をきっかけとして、地域住民と子どもたちとのふれあいが始まり、平成 12 年に巽区長会が学校をはじめ地域で活動する団体に呼びかけ「各種団体連絡協議会」が開催された。これを機に互いの活動に協力し合い、連携を図りながら子どもの育ちを支える活動を行うことを目的とした、「たつみの町づくり協議会」が立ち上がり、現在の巽地域共育コミュニティを進める基盤となっている。

主な取組としては、登下校の見守り活動である「子どもサポーター活動」、土曜日の居場所づくりとして「地域ふれあい行事」(15 回活動)、老人会が主体で中学生も参加する「学校内の花壇整備」、エプロンづくり、調理実習、稲刈り、木工授業等の「学校支援活動」であり、区長が地域共育コーディネーターとしての役割を果たしている。

4　事業の成果

地域共育コーディネーターに対する調査(H22)によると、学校支援活動を通じての学校や地域の変化については、「学校外でも子どもたちにあいさつをするようになった」「子どもや学校に対する意識や関心が高まった」「地域の中に知人や友人がふえた」など、学校や地域とのつながりについては概ね肯定的な評価を示しており、学校支援活動をとおした地域理解はかなり深まったことを示す結果を得ている。

巽地区の活動者からの聞き取りでも「子どもたちのため、いつも試行錯誤している」「子どもたちとの距離が近くなり、子どもたちに対する気持ちが変わってきた」「やってきたことが無駄ではなかった」など、活動者自身の学びをとおした生きがいと、人と人がつながる地域づくりの絶好の機会となったことがうかがえる。

また、「共育コミュニティの取組は地域に必要か」という質問に対し、「必要」という回答は 75.7%であった。必要な理由として、「子どもや学校に対する地域住民の意識が高まる」「地域ぐるみで子どもを育てるため」などの回答があり、学校支援活動が地域の活性化につながるという高い意識があることがうかがえる。

このように、和歌山県においては、「共育コミュニティ推進室」が中心となり、組織横断的に取組を推進していることが大きな特徴であり、「きのくに共育コミュニティ」の形成を進めることで、学校と地域の連携強化を図り、地域の教育力を高め、子どもたちの育ちと学びを支える学校づくり・地域づくりを推進している。

【参考資料】

きのくに共育コミュニティの全県展開

共育コミュニティ推進室

国事業：学校支援地域本部事業（委託分）活用 → 国事業：学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業（補

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度～
広報・啓発活動	・和歌山大学・市町村教育委員会の協力を得て、全市 ・リーフレット及びボランティアガイドブックの作成、配布	・学校教員向けガイドブックを作成、県内全教員に配付 ・コーディネーターの手引き作成、配付	・啓発用ポスター、リーフレットの作成、配布 ・HPの充実	・県内の全小・中学校区での「共育ミニ集会」の開催 ・学習支援プログラム集の作成（県内全小・中に配付） ・きのくに共育実践交流会の開催（県内1カ所） ＜地域共育ｺﾐｭﾆﾃｨ本部・放課後子どもプラン、家庭教育支援活動関係者を対象＞	
	・実践事例集の作成				
	・テレビ・ラジオ番組の作成、放映（HPで公開、DVD等を県内全学校に配付）				
	・きのくに共育実践交流会の開催（県内1カ所）				
人材育成・活用			・学校教員向け「共育コミュニティ研修講座」の開催（年3回）		
		・学校教員向けフォーラムの実施（県内5カ所）		・共育ｺﾐｭﾆﾃｨｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ等研修会の開催（県内1カ所）	
	・共育コミュニティ本部員向け「地域力アップ研修」の開催（県内2カ所） （H23は県公民館連絡協議会と共催）			・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動地方別講座（県内3カ所）（～H24） （県社会福祉協議会と共催）	
	＜県単独事業＞ ・地域と学校を結ぶコーディネーター等養成講座（H19～		・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ養成地方別講座（県内3ヵ所） ・ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰｽｷﾙｱｯﾌﾟ講座（県内1カ所2回）		
地域共育コミュニティ本部の拡充・支援	・県内18市町20地域共育コミュニティ本部設置 ・学校支援事業数（のべ）3,320件 ・参加人数（のべ）	・県内22市町24地域共育コミュニティ本部設置 ・学校支援事業数（のべ）4,406件 ・参加人数（のべ）	・県内22市町24地域共育コミュニティ本部設置 ・学校支援事業数（のべ）5,216件 ・参加人数（のべ）	・地域共育コミュニティ形成促進事業（学校支援地域本部・家庭教育支援） ※県内16市町 （和歌山市は中核市のため市独自で実施）	
市民性教育推進	市民性を育てる教育の趣旨徹底（市町村指導主事会、校長会、教頭会、学校訪問）（連絡会議の実施）	市民性を育てる教育ランドマーク事業により、小中学校の取組とその成果を普及	市民性を育てる教育ランドマーク事業により、高等学校及び特別支援学校の取組とその成果を普及		

→ ・地域の活力・学校の活力が高まる「教育風土」の醸成
・学校・家庭・地域の連携による子どもの豊かな育ちと学びを支える体制の構築

ウ　奈良県教育委員会
学校・地域連携事業　～地域拠点から子どもたちの体力・規範意識向上を～

1　事業の実施状況

奈良県教育委員会（以下県教委）では、従来から各地域や組織による地域ぐるみで子どもたちをサポートする体制づくりを推進してきた。平成20年度から新たに「学校支援地域本部事業（以下本事業）」を導入したことにより、多くの小・中学校に学校支援地域本部が設立され、平成22年度には39市町村中30市町村68地域本部で、学校をサポートする取組が進められた。現在は、平成19年度から実施している「奈良県地域教育力再生事業（放課後子ども教室）」と本事業を統合し、新事業「奈良県学校・地域連携事業」として奈良県の教育課題に直結した取組を実施している。新事業は、平成23年度においては30市町村中25市町村127校での実施に至っている。

2　事業の実際（方向性）

（1）平成20年度からの本事業の取組

奈良県学校支援地域本部事業運営協議会を設置して、本事業についての協議、検討、事業評価をおこなうとともに、県内市町村への広報及び指導助言、事業成果の普及等に取り組んだ。平成20年9月以来、9回会議を開催して、討議を進めてきた。

（2）平成23年度からの新たな取組「奈良県学校・地域連携事業」について

①事業の目的

・学校・家庭・地域が連携して、地域ぐるみで子どもたちの育ちを支える仕組みを構築する目的で始める。

②事業の背景

・学校における教育課題の多様化や地域の教育力の低下、全国学力・学習状況調査から見えた子どもたちの教育課題に対応する必要があった。

③事業の特徴

・学校や地域のニーズを的確に受け止めるために事業コンセプトの組み直しを実施（25市町村での実施）し、「放課後の学習支援等」「規範意識・社会性の向上」「体力・運動能力の向上」「地域との連携」の4つのメニュー化を図った。特に事業実施校においては「放課後の学習支援等」は必須のメニューである。

・学校・地域支援バイザーの配置（平成23年度から）があげられる。人権・社会教育課に1名（元「学校支援本部事業」実施校の学校長）を配置して、事業実施にあたる市町村教育委員会や学校のサポートや県主催の研修等の企画立案に対するアドバイスを行うなどの業務にあたっている。

3　事業の成果

3年間、学校支援地域本部事業を実施し、学校支援ボランティア活動の取組状況調査（平成21年度6月実施）を行ったところ、次のように大きく4つの成果を得ることができた。1つ目は、地域の方々の学校運営への協力が進んだということ。2つ目は、安全安心な「まちづくり」が進んだということ。3つ目は、教師の子どもと向き合う時間が増えたということ。4つ目は、子どもたちの社会性、規範意識が向上したということである。また、各市町村学校支援地域本部あて、事業実施アンケート調査（平成22年度6月実施）を行ったところ「子どもたちの学力や規範意識、コミュニケーション能力の向上について効果は得られたか」との問いに、得られた・ある程度得られたかを合わせると全体の74%、「教員が授業や生徒指導などにより力を注ぐことについて効果が得られたか」については、全体の58%が得られた・ある程度得られたとの回答があった。学校と地域を結ぶ取組として定着してきたと言える。さらに、奈良県の教育課題が明らかになり、その教育課題解決のために新たな事業を展開するに至った。

【参考資料】

奈良県

学校・地域連携事業

～地域拠点から子どもたちの体力・規範意識向上を～

事例ファイル（自治体編）

奈良県

事業コンセプト

平成22年度まで実施してきた「学校支援地域本部事業」と「放課後子ども教室推進事業」は、ともに学校と地域を結ぶ取組として定着し一定の成果をあげてきました。

平成23年度には、これら二つの事業の成果を合わせ、さらに奈良県の教育課題解決に直結した取組を展開すべく、事業コンセプトを組み直し実施することになりました。現在25市町村で実施しています。

具体的には、「放課後の学習支援等」「規範意識・社会性の向上」「体力・運動能力の向上」「地域との連携」の4つをメニュー化し、各市町村で成果指標に盛りこみ目標設定をお願いしています。

財源は、文部科学省の「学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進事業」補助金を充て、県と市町村で1／3ずつを負担し、実施します。

放課後支援
～より多くの体験を子どもたちに～

子どもたちの放課後の居場所づくりは、地域の協力でその活動に広がりをみせています。宿題や自習補助等の学習支援をはじめ、様々な体験活動を取り入れ実施しています。教員志望の学生や退職教職員などの協力を得て、部活動の指導補助からボランティア活動まで幅広い体験活動が準備されています。（右上の放課後活動の例を参照）

能教室～地元の伝統芸能に触れる～

<放課後活動の例>

①学習支援
宿題片付け隊、自習補助、読書活動、読み聞かせ、各種講座（産業・歴史等）など

②クラブ指導とその他の体験活動
国際文化交流、地域の祭りへの参加、福祉施設訪問、防災体験学習、野外活動体験、環境保全活動、人権講座、職場体験活動、乳幼児とのふれあい体験、イモ掘り、フィールドワーク、健康安全教室、茶華道、合唱、太鼓、琴、空手、剣道、サッカーなど

③交流活動（小学校低学年向け）
紙飛行機、折り紙、グランドゴルフ、ドッジボール、シャボン玉、そうめん流し、なわとび、金魚すくい、おにごっこ、昔遊び（竹馬、胴馬、ゴム跳び）など

④ボランティア活動
ゴミ拾い、清掃活動、夏祭りボランティア、地域クリスマス会への参加、介護ボランティアなど

規範意識・社会性の向上
～地域全体で子どもを見守りはぐくみます～

異なる世代間の交流は、子どもたちに新たな気付きを生みます。また、地域の子どもは地域全体で見守りはぐくんでいこうという温かい雰囲気が各地で醸成されつつあることから、子どもたちの規範意識・社会性の向上にもつながると考えています。職業体験実習やゲストティーチャーによる授業なども準備しています。

美術の授業（木の話）～ゲストティーチャーに学ぶ～

体力・運動能力の向上
～もっと元気で健康な大和っ子に～

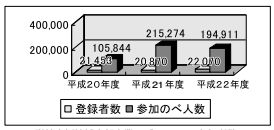
運動場芝生化推進事業や地域のスポーツクラブとの連携をすすめ、元気で健康な大和っ子を育てます。外遊びの奨励、運動時間の増加、イベント等の活動内容を充実させ、子どもたちの体力・運動能力向上や仲間づくりを推進します。

「運動場が芝生になったよ!」～運動場芝生化推進事業～

地域との連携
～もっと地元密着! 子どもたちの元気を地域に～

地域ボランティアの方々は学校での活動に積極的に参加してくださっていますが、今年度は、子どもたちが地域の行事などに積極的に参加するなど、地域との連携をより一層深める試みを計画しています。子どもたちの元気を地域に還元し、地域の活動を活性化する効果を期待しています。

梨園にて学習～地元で体験学習～

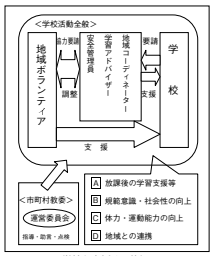


学校支援地域本部事業のボランティア参加者数

地域と学校が より緊密に連携するために

○地域ごとの課題解決のために事業が組み立てられてはじめて、本来の意味での地域の事業になります。そのためにも学校や地域のニーズを的確に受けとめていきたいと思っています。

○多くのボランティアが学校に集う現状（上グラフ参照）は事業の確かな成果です。この仕組みを、多くのつながりを生む基盤と考え、さらに新たな取組につなげたいと考えています。



学校を支援する仕組み

《お問い合わせ先》
奈良県教育委員会事務局 人権・社会教育課
〒630-8502　奈良県奈良市登大路町30
☎0742-22-1101（内5284）／
☎0742-27-9837（直通）

提　　言
～ 今 後 の 事 業 充 実 に 向 け て ～

学校関係者に対して

学校が困っていることをもっと助けてもらいましょう

○学校の要望をはっきりさせましょう
●学校の施設設備を地域に開放するだけでなく、学校運営・教育活動を開かれたものにする考え方が浸透してきています。教育活動をより充実させるには地域の協力が不可欠です。
●学校が地域に望むことを明確にし、共通理解を図り、その上で地域との緊密な連携を進めましょう。

○校外で学習活動を展開しましょう
●生活科、総合的な学習の時間等を活用し、職場体験活動をはじめ、子どもたちにはより豊かな体験活動を積んでほしいと願っています。
●地域の協力を得て、積極的に校外での体験活動を展開してほしいと思います。

○学校の仕事を手伝ってもらいましょう
●地域には様々な知識・技能をもった方々がおられます。地域の人材は学校教育を進める上で、重要な資源です。
●子どもたちに様々な体験を積ませることは大きな教育効果を生みます。体験活動を充実させるためにも、地域の方々との協働を図りましょう。

○学校の情報を発信しましょう
●地域の協力を得るには、教職員が胸襟を開いて深く交流し、積極的に情報発信する姿勢が大切です。
●学校が困っていることを地域の方々に知っていただくことも大切な情報発信です。情報の共有が連携の第一歩です。教職員が努力奮闘する姿を知っていただくことも必要ではないでしょうか。

地域コーディネーターの方々には学校の要望と地域ボランティアの協力をうまくつなぐ役割を果たしてもらっています。連絡調整のキーパーソンです。
様々なご苦労をおかけしていますが、この人と人との連携の輪が地域の活性化につながります。

地域の方々に対して

学校の活動や運営に参加しましょう

○学校が困っていることを助けましょう
●社会の変化にともなって、学校に対する要望が多様化し、家庭や社会で担うべき仕事が学校にまかされ教職員がますます忙しくなっています。
●地域の学校は「わたしたちの学校」という認識をもって、みんなで学校を助けにいきましょう。

○地域ぐるみで子どもを育てましょう
●子どもは地域の宝です。少子化の時代には、ますます大切に感じられます。
●地域ぐるみで子どもたちをはぐくむ活動に協力し、少しずつでも力を出し合っていただきたいと考えています。

○自分自身の学びを活かしましょう
●今までの知識や経験、学んでこられたことを社会に還元する機会ととらえ、その機会を積極的に活かしていただきたいと思います。
●子どもたちへの支援を通じたつながりが、地域の活性化の原動力となるものと期待しています。

○地域のつながりを深めましょう
● PTA やご近所の方々をはじめ、地域の「お父さんたち」にももっと協力していただきたいと思います。
●連携が新しい連携を生み、温かいまちづくりにつながります。地域全体を巻き込んで活動の幅を広げていっていただきたいと思います。

市町村教育委員会及び県教育委員会に対して（学校支援地域本部に対して）

「地域の子どもは地域で育てる！」という地域住民の熱い思いを受けとめて、新しい事業を推進してほしいですね。

学校の支援体制を一層充実させましょう

○学校・地域の声を受けとめましょう
●本事業は、文部科学省の委託事業としてスタートしましたが、本来は地域独自の事業として多様な取組を展開していってほしいと思っています。
●地域ごとの課題解決のために組み直されたとき、はじめて本来の地域主導の事業になります。学校や地域のニーズを的確に受けとめてほしいと思います。

○事業への理解を一層広めましょう
●多くのボランティアの方々が学校に集う現状は、この事業の確かな成果です。
●この仕組みを、多くのつながりを生む基盤と考え、さらに新たな取組につなげていただきたい。そのためにも行政の力を活かした広報・周知活動が大切になってきます。

○研修機会を提供しましょう
●この仕組みを機能させるには、学校関係者も地域の方々もそれぞれ研修の機会が必要です。
●各市町村教育委員会においては関係者が集い学ぶ機会を継続的に設け、県教育委員会は情報提供や研修プログラムの開発、ネットワークづくりへの支援をつづけていくべきであると考えます。

○持続可能な体制を整備しましょう
●地域の活性化につながるような、それぞれの地域にふさわしい組織・体制の構築が必要です。
●市町村におきましても、事業継続のために運営資金を確保し、予算措置をお願いします。地域住民の熱い思いを受けとめていただきたいと思っています。

奈良県学校支援地域本部事業運営協議会「学校支援地域本部事業のまとめと提言」より抜粋

エ　新潟市教育委員会
学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくり～「地域と学校パートナーシップ事業」をとおして

1　事業の経緯と目的

新潟市教育委員会では、平成18年3月に「新潟市教育ビジョン」を策定し、「学・社・民の融合」[注1]の考え方を根幹に据えた。そこで、平成19年度に「地域と学校ふれあい推進課」を新設し、「地域と学校パートナーシップ事業」を開始した。平成20年からは「学校支援地域本部事業」の委託・補助を受けての実施となった。

事業の目的は、学校に地域教育コーディネーター（以下「コーディネーター」）を配置することで、学校を核とした「社」「民」とのつながりをスムーズに行うことであり、以下の4点を大きな柱としている。

①学校と社会教育施設、地域活動を結ぶネットワークづくり

②学校の教育活動・課外活動における地域人材の参画と協働

③学校における学びの拠点づくり

④学校の教育を地域に発信

平成19年度に8校の実施でスタートしてから、平成22年度までに105校、平成23年4月1日現在では、小学校96校、中学校43校の合計139校での実施がなされている。また、市では平成26年度までに市内全171小中学校での実施を目指している。

注1）ここでの学・社・民とは「学：学校」「社：公民館や図書館などの社会教育施設やスポーツ施設」「民：地域住民・家庭・地域の諸団体や企業」を指す。

2　事業の特色

実施にあたり、市内全校で一斉に開始するのではなく、コーディネーターの配置、コーディネーター専用室の確保等「その学校の準備が整い次第実施する」という方針で進めており、各校の自主性を重んじることで、受動的ではなく、能動的な取組となるよう配慮している。

コーディネーターは市の非常勤職員として採用されており、週16時間の勤務を基本としている。このため、コーディネーターは市職員としての自覚のもと責任感を持って職務に励んでいる。また、実施各校にはコーディネーターの勤務場所となる専用室が設置されており、この場所が情報交換の場となり、同時に憩いの場ともなり、関係者間のコミュニケーションを図りやすくするために一役買っている。

さらに、学校側の理解を深めるために、10年目研修や管理職研修に事業の説明を位置付けるとともに、要請に応じて指導主事を派遣し、校内研修を開くなど、学校全体の理解のもと事業が実施されるよう努めている。また、「地域と学校パートナーシップ事業運営協議会」を設置し、コーディネーターや学校担当教職員など関係者向けにも各種研修[注2]等を実施している。

注2）研修例：新規実施校研修会　地域と学校パートナーシップ事業研修会　学・社・民の融合で元気アップ講座　等

3　事業の成果

平成22年度に105校を対象に実施した「地域と学校パートナーシップ事業アンケート調査」からは、以下のような成果が得られており、この事業の「学・社・民の融合」にもたらした効果の大きさをうかがうことができる。

○実施校の取組を通して、学校・保護者・地域住民・社会教育施設職員に、学・社・民の融合による教育のよさを示すことができ、児童生徒の指導のために協力して教育活動に取り組む姿が見られた。

○学校支援ボランティアが加わったことにより、学習活動が充実したり子どもの学習意欲が高まったりするとともに、子どもが認められる機会が増えた。

○コーディネーターを通して、地域や家庭・社会教育施設と積極的にかかわることのよさを、教職員が理解するようになってきた。その結果として、教職員の多忙感の軽減にもつながっている。

○地域教育コーディネーターだよりや学校だより、各区の区報を通して、各校におけるボランティア活動やコーディネーターの取組について地域住民への周知が図られ、地域住民の学校への理解が深まっている。

【参考資料】

子どもも大人も元気になる具体的な取組
学習活動への参画
① 専門的な知識や技能を生かした学習支援
・英語活動，国際理解教育支援・補助
・算数指導補助（ＴＴ）
・キャリア教育（職場体験，生き方講話）
・自分の職業や趣味を生かして
例：大学教授，アナウンサー，書家，俳句や短歌
・作物の栽培や収穫の指導（米・野菜づくり）
・本の読み聞かせ
・放課後や長期休業中の学習指導・補助
・クラブ・部活動での指導・協力（見守り）
② 自分の生活体験を生かした学習支援
・昔の遊び（コマまわし，あやとり，竹とんぼ，お手玉，けん玉）
・「戦争体験を語る」
・「道徳」の授業に参加し大人の立場で発言（例：いじめを考える）
・「家庭」（手縫い，ミシン縫い，調理実習）
・「保健」子育て中の母親が「命の大切さ」について語る
・地域資源を生かした体験活動（塩づくり，味噌づくり，鮭稚魚放流）
・地域の○○を語る（総合学習）
・進学のための面接指導
③ 人的な支援
・校外学習の引率補助
・通学時の学校安全見守り隊（セーフティスタッフ）
・図書ボランティア（本の修理，図書の整理・整頓）
・保護者懇談や PTA 総会等の子どもの見守り
・持久走記録会や交通安全教室，体力テストの見守り・補助作業
体験活動
・ミニ講座や文化祭での体験教室
例：生け花，茶道，囲碁，将棋，絵画，手話，絵手紙，紙漉，わら細工，太鼓・横笛
・地域の○○音頭や○○暮句の指導（運動会や祭りで地域住民とともに楽しむ）
・季節の食べ物づくり（笹団子，ちまき，ちらし寿司と巻き寿司）
・収穫した作物や校庭にある果樹，観賞が終わった植物の活用
例：米粉のクッキー・まんじゅう・うどん，干し柿・さわし柿，梅干・梅ジュース，ハーブティー・ハーブ石鹸・ハーブクッキー，胡蝶のリース
・鹿沼石鹸づくり
子どもの居場所づくり（ロングの休み時間，昼休み，放課後，休業日）
・ふれあいスクール
・ものづくり（手芸，クラフト，おり紙）やお話し相手（聞き手）
環境整備
・校舎内のクリーン作戦（母校をきれいに大作戦）
・中庭や花壇，通学路の整備
・学校の森やバラのアーチ，朝顔のトンネル
社会教育施設や地域団体とともに
・「お寺でごーん！」（地域のお寺での宿泊体験（座禅・護摩体験，学習，朝清掃，集団整校））
・サークル指導者やメンバーによる出前（紙芝居，○○コンサート，お茶会）
・専門委員会や部活動との連携
例：「食や栄養」について保健委員会と一緒に活動，吹奏楽部が○○施設で演奏
・大人とのコミュニケーションを図る授業（サークルとの交流活動）
・読み聞かせボランティアの育成（学校で練習，図書館職員が出前指導→自ら研修会へ）
「学びの拠点」としての役割
① 学校施設の活用
・学校支援本部における学習活動，交流活動
・コンピュータ室利用によるパソコン教室
・地域のサークル活動
・公民館活動を学校で
例：プレママ教室を小学校で（校長講話，授業見学・参加）
・子育てサークルの活動場所（子育て情報交換）
・幼・小連携，小中連携による料理教室（早寝・早起き・朝ごはん）
② 学校人材の活用
・○○先生のパソコン教室
・○○先生の実験教室
・○○先生のまゆ玉コサージュ教室
地域とともに
・ジュニアレスキュー（いざというときは，大人とともに）
・一人暮らしのお年寄り訪問
・地域を学ぼう（地域住民が先生方に教えます）
・地域の美化活動（○○川クリーン作戦，駅前広場でプランターに花植え）
・地域のお祭りで小中学生がボランティア
ざりがにを見つけるぞ
子育てサークルの母親にインタビュー
地域住民が「道徳」で発言
ヘルシーなおやつを作ろう
味噌づくりは任せて
どんぐりの森をつくろう
「お寺でごーん！」早寝・早起き・朝ごはん をみんなで実践
放課後の学習教室で宿題はバッチリ
おてて絵本（公民館とともに）
ジュニアレスキュー（いざというときは大人と一緒に）

事業の目指す姿
子どもが元気に！
夢や目標に向かいいきいきと学ぶ姿
学・社・民が融合し，心豊かな子どもを育むために，地域ぐるみの教育が行われる
学校が元気に！
① 地域の人材を生かした，多様な学習や活動
② 見守られ，認められる場が増え，安心感や所属感を味わい，自己有用感や規範意識，コミュニケーション能力等が向上
③ 学校運営に対する地域の学校理解の深まり，特色ある学校づくりの充実
地域が元気に！
① 学校が地域にとって，もっとも身近な「学びの拠点」に
② 地域の大人と子どもとの交流，ふれあいが盛んになり，地域が活性化
③ 学校施設の有効活用（子どもや地域住民への還元）
・趣味や特技を生かせる場
・自己実現・社会参加活動の場
社会教育施設（公民館，図書館）
学・社・民の融合をスムーズに進める核となる
「地域教育コーディネーター」が活躍中!!
学校を拠点とし，地域，社会教育施設と学校の協働によって次のような効果を期待しています
・子どもの多様な可能性を生かす場・認める場の拡大，充実
・子どもの活動や学習の質を高める機会の保障
・地域の大人が豊かに元気になる（自己実現，生涯学習実現の場）
学・社・民の融合
新潟市教育委員会
地域と学校ふれあい推進課
〒951-8550
新潟市中央区学校町通1番町602番地1
TEL 025-226-3277 FAX 025-230-0421
Email：fureai@city.niigata.lg.jp
URL：http://www.city.niigata.jp
学・社・民の融合による
人づくり，地域づくり，学校づくり
地域と学校パートナーシップ事業
"地域と学校パートナーシップ事業"では，
学校が今まで以上に地域に開かれ，地域と共に歩むことができるように，
「学・社・民の融合による教育」を進め，様々な活動に取り組んでいます。
事業の目指すもの
① 学校，社会教育施設，地域活動を結ぶネットワークづくり
② 学校の教育活動・課外活動における地域人材の参画と協働
③ 学校における学びの拠点づくり
④ 学校の教育を地域へ発信
本事業による「学・社・民の融合」イメージ
地域教育コーディネーター
パートナーシップ推進会議
学校
パートナーシップ推進担当
学社民融合支援主事
社会教育施設
公民館，図書館など
子どもたちに
新潟市教育委員会
地域と学校ふれあい推進課
文部科学省委託・補助事業
「学校支援地域本部事業」

3　県内教育委員会担当者からの実施報告

ア　宇都宮市における学校支援地域本部事業の効果について

宇都宮市教育委員会事務局生涯学習課　社会教育主事　髙田　　玄

本市は学校と地域の連携を重視しており、平成 18 年度より設立した「魅力ある学校づくり地域協議会」において、学校と地域の連携強化を推進してきた。魅力ある学校づくり地域協議会（以下「地域協議会」）は小学校 68 校、中学校 25 校の全校に設置されており、そのうち 53 の地域協議会が学校支援地域本部事業を受託した。

受託した協議会と未受託の協議会の活動状況は次の通りである。(数値は平均値)

	主　な　活　動	受託校（53 校）	未受託校（40 校）
1	学習支援活動（教科補助、総合的な学習　等）	47.2 回	16.5 回
2	学習支援活動（読み聞かせ）	32.5 回	13.4 回
3	部活動指導	4.1 回	1.3 回
4	校内環境整備（花壇整備、遊具の塗装、図書修繕　等）	19.5 回	7.2 回
5	運動会、文化祭の支援	1.8 回	1.0 回
6	登下校安全指導（見守り）	121.5 回	68.5 回

学校支援本部事業を受託した協議会は未受託の協議会と比べ、書写や家庭科、生活科、読み聞かせなどにおける学習支援活動や部活動支援、図書室等の校内環境整備などの回数が多くなっていることから、受託した協議会においては学校支援活動が数多く展開され、地域の大人と児童生徒の交流が十分に図ることができている。

地域協議会活動に多くの地域の大人がかかわることは、学校支援活動が充実するだけではなく、地域の活動者や地域団体間のネットワークが構築されるとともに、これから地域において活動を始めようとする大人にとっても良いきっかけとなっている。学校支援活動を通して人と人がつながり、自ら地域の子どもたちを育てていこうとする意識の高まりが見られる。

また、地域コーディネーターの配置により、学校支援活動が充実するだけではなく、地域教育力向上フォーラムや地域ふれあい清掃などの地域教育力向上事業が行われたり、親学講座や親子料理教室といった親子交流事業などの家庭教育力向上事業が実施されたり、活動の広がりが見られる。それらの運営も学校の主導ではなく、会長や地域コーディネーターが中心となって運営している協議会が多い。この他にも、協議会が主体的に活動することにより、地域と学校の意見交換が進んでいる協議会もある。

さて、私自身も一条中学校地域協議会における活動者である。中学校の役割として、小中連携のコーディネートもあるため、地域カレンダーの作成や親学などの合同研修会の開催、共通理解を図るための合同協議会の開催、地域教育力向上フォーラムの開催などを行っている。

一条中学校の地域コーディネーターは、学校支援本部事業の中で西原小学校において地域コーディネーターとしての経験があり、習得したノウハウを現在の活動に生かしている。例えば、夏休みの作品整理をＰＴＡ会員に呼びかけたところ、多くの会員が手伝いを行った。地域コーディネーターが中心となり、さまざまな事業に取り組むことで、ＰＴＡ活動の活性化につながるなどの効果も期待できる。

学校支援地域本部事業により、地域にネットワークが形成され、楽しみながら地域活動に取り組む活動者が増え、絆が生まれた。このことは地域が元気になっているとも言えよう。

イ　佐野市における学校支援地域本部事業の効果について

佐野市教育委員会生涯学習部生涯学習課社会教育係長　副主幹　須藤　孝浩

佐野市では、佐野市立北中学校区（北中、犬伏小、犬伏東小、城北小）で、学校支援地域本部事業に。取り組んできた。3年間の委託事業は終了したが、23年度も学校支援地域本部における活動は継続されている。本事業を推進したことによる保護者や地域住民等の変化と事業の効果について紹介したい。

1　学校支援ボランティアの増加

本事業の学校支援ボランティア募集は、従来のチラシ配布に加え、コーディネーターの地域住民等への働きかけにより行った。

学校支援ボランティア数は、20年度31人（初年度は実質半年の活動）、21年度108人、22年度152人、23年度156人（11月末）と増加している。このうち、本事業以前から学校支援ボランティア活動をしていた人は15人であり、本事業が、多くの保護者や地域住民が学校支援ボランティアとして社会貢献を始める契機となっている。

2　活動継続者の増加と活動の広がり

学校支援ボランティアのうち、次年度以降も活動を継続している人は21年度12人、22年度55人、23年度66人と増加している。このうち、子どもが卒業した後も地域住民として活動している保護者や、学生として携わっていた人が卒業後も地域住民として活動している例も見られる。

また、学校支援ボランティアの中には、当初活動した学校・分野以外での活動に取り組む人も見られるようになってきた。今年度は、同一校で複数の分野で活動している人18人、複数の学校で同一の分野で活動している人14人、複数の学校で複数の分野で活動している人14人、合計46人の人が、活動の幅を広げている。

これらのことから、保護者や地域住民の活動への取り組みが、受動的なものから主体的なものへ変化してきたことがうかがえる。

3　学校支援ボランティアのスキルアップ

自らの活動を充実させるため、スキルアップを図る学校支援ボランティアが見られた。具体的には、読み聞かせボランティアの改めて基礎を学びたいという要望による研修会の開催、活動を円滑に進めるためにパソコンの操作を学び始めたボランティア、今後の活動に生かせる可能性のある地域の歴史や手芸等を学ぶ、ボランティアによる自主研修の企画開催である。

これらの事例から、保護者や地域住民の、地域の教育力としての自覚の高まりが感じられる。

4　公民館サークルの参加

公民館サークルに本事業への参加を呼びかけたところ、写真サークルによる学校内への作品展示が始まった。当初、通常の風景写真のみの展示であったが、より児童・生徒の関心を高めたいと、大きく引き伸ばした写真や加工を施した写真の展示、加工方法の説明文の掲示も行われている。現在は、水彩画サークルも加わり、多くの作品が展示されている。

このように、本事業が団体の活動成果を生かす場となり、団体の新たな活動意欲を生み出している。

5　人と人のつながりの変化

学校支援ボランティアの情報交換と交流の場としてボランティア交流会を開催している。この交流会で、他校で同じ分野で活動している人たちが知り合い、グループとして活動を始めた事例や、新しい分野で活動する契機をつかんだ人もおり、新たな仲間作りの場として好評を得ている。

今まで、同じ学校に通う子どもを持つ保護者の関係や、同じ地域に住む住民の関係であった人たちが、学校支援ボランティアとして同じ活動に取り組むことにより、それまでの顔を知っているだけのつながりから、より深いつながりへと変化している。

本事業により、保護者や地域住民等の、同じ地域の子どもに係わる者としての連帯感が強まっている。

ウ　日光市における学校支援地域本部事業の効果について

日光市教育委員会事務局生涯学習課主幹　白石　光人

1　アンケートの調査から

事業終了後、人材バンクに登録した学校支援ボランティア74名に対して、アンケート調査を実施した。そのうち38名の方から回答を得た。(回収率51%)(表1)

1番多かった回答が「学校や子どもの様子がよくわかってきた。」25 名(66%)であった。地域の人にとって、学校を外から見るより、学校支援ボランティア活動を実際に行い学校の中に入ったほうが、学校理解、子ども理解が深まると考える。

2 番目に多かった回答が「いろいろな人と出会う機会が増えた。」22 名(58%)であった。人と出会う機会が増えると、学校について、子どもについて、地域について話をすることが多くなると考える。このことは、4 番目に多かった回答「学校や教育のことについて、周りの人と話をする時間が増えた。」につながる。

3 番目に多かった回答が「地域の子どもに対する関心が深まった。」21 名(55%)であった。実際、下校中の子どもたちに対して、「声をかけるようになった。」という声も聞こえた。

5 番目に多かった回答は、「学校以外でも地域のために何かやってみたいと考えるようになった。」10 名(26%)であった。この回答者が、具体的に何をしたかは不明だが、このあと公民館事業や子ども会、学校行事になどに影響を与えていると考える。

2　学校支援ボランティア活動の内容から

以前は保護者中心であった学校支援ボランティア活動が、地域住民が協力する学校支援ボランティア活動になっている。特に、今まで保護者中心であった読み聞かせボランティアに地域の方が入るようになったり、今までPTA が中心であった奉仕作業に地域の方が参加するようになったりしている。また、各教科や総合的な学習の時間において地域住民のゲストティーチャーも増え、(杉並木を守る活動をしている方々、板橋の歴史を研究されている方など)地域住民が自分の能力を生かせる場となり、喜びや生きがいを感じている。これは地域コーディネーターの設置が大きく影響している。

3　公民館や他団体との連携・広がりから

落合公民館や落合中学校にできたピザ釜(これも地域ボランティアが作った。)を利用して、家庭科の授業で調理したピザを焼いている。この授業には、地域婦人会の方々が学校支援ボランティアとして協力している。婦人会の方は、毎回楽しみにしており、婦人会の会合にも積極的に参加するようになったと話していた。

公民館陶芸講座講師が、中学校美術部の支援をしている。そこで作成した抹茶茶碗を活用して、中学生が地域の方々の指導でお茶会を楽しむ授業も行われるようになった。

落合中学校で実施した「緑が丘ふれ合い交流会」では、PTA はもちろん、「自治会」「公民館」「体育協会」「婦人会」「長寿会連合会」など 18 の団体が協力している。このとき中学生と一緒にグランドゴルフをしていた長寿会の方は、「この“緑ヶ丘ふれあい交流会”は、子どもたちが地域のことを考えるきっかけになっているのではないか。私たちは、子どもたちから刺激をもらっている。楽しくて仕方がない。また、長寿会のみんなは、落合中学校卒業生なので、友達同士、その当時の話題で盛り上がり、昔を懐かしむことができた。」と話していた。

日光市　表1

回答人数 38 名（複数回答）

①学校や子どもの様子がよくわかってきた。	25	66%
②いろいろな人と出会う機会が増えた。	22	58%
③地域の子どもに対する関心が深まった。	21	55%
④学校や教育のことについて、周りの人と話をする時間が増えた。	11	29%
⑤学校以外でも地域のために何かやってみたいと考えるようになった。	10	26%
⑥生活に張り合いができた。	8	21%
⑦いろいろなことを学んでみたいと思うようになった。	7	18%
⑧学校に対して、さまざまな提案や意見を言うようになった。	2	5%
⑨よいことはない。	1	3%
⑩その他（少し分かってきた）	1	3%

エ　さくら市における学校支援地域本部事業の効果ついて

さくら市教育委員会生涯学習課副主幹兼社会教育主事　山口　信昭

1　さくら市学校支援地域本部の経緯

さくら市では、平成２０年４月喜連川地区の小学校５校の統合に合わせ、その統合小をモデル校として「学校支援地域本部」を設置した。平成２０・２１年度は組織立ち上げの準備。平成２２年度から「喜連川小学校地域応援隊」を立ち上げた。

2　事業効果について

喜連川小学校地域応援隊の活動も２年目を迎え、ボランティアやコーディネーター、保護者や地域の方たちそれぞれに変容が見られる。その一部を紹介する。

○寒竹囲い作業

城下町であった喜連川地区には、「寒竹囲い」の家があり、それを保存する会がある。その会の代表には、学校正門の寒竹の定植から関わってもらい、毎年７月に行われる全ボランティア対象の寒竹囲いづくり作業においても指導をいただいている。その中で、地域交流・伝統文化継承が自然と行われ、２年目の今年は、保存会の作業に学校支援ボランティアが参加するようになったり、伝統の竹篭づくりの復活につながったりと、地域活動への広がりが生まれてきている。

○総合的な学習の時間　～３年　「ミニ観光ボランティアになろう」～

今年、指導主事・社会教育主事・学校担当者・コーディネーターが３年生の総合的な学習における単元の見直しを行っている。また、市民大学から誕生した観光ボランティアが、校外学習に参加し、地域の歴史や文化を子どもたちに伝えている。地域愛の醸成という学習効果につながるだけでなく、ボランティア自身が子どもたちの視点に驚き、新たな観光のポイントと考え、自分たちの研修テーマとしている。

○ボランティア交流会

市教育委員会として、本事業の目的の１つに「統合した地域同士の連帯感の構築」があり、学校を会場とした小さな地域づくりを行っている。その１つとして、コーディネーター（４名）の立案により、年４回の全ボランティア対象の「交流会」や「応援隊アート展」などを行っている。この交流会をきっかけに、地域団体や活動連携なども生まれてきている。例えば、小学校近くにある石蔵で、毎月１回“駄菓子屋”を開催しているが、その駄菓子屋を運営しているボランティアが、交流会で知り合った日本茶のインストラクターと連携し事業を行うなど、学校外でも週末の子どもの体験活動を支援するようになってきている。

２年目を迎えその他の活動においても、「子どもたちにはこうしたらいいのではないか。」という思いや「更に地域交流を深める」という観点などが生まれ、ボランティア自身の取り組み方が変わってきている。これこそが地域の教育力の向上の１つになるのかもしれない。統合小での学校支援事業においては、地域の大人だけでなく、子どもたちの将来を見据えた１００年後の学校・地域づくりを目的とし、更に学校・地域愛が高まるような粘り強い行政の姿勢やコーディネーターと連携した住民参画の工夫が必要であると考える。

その他にも、こんなことが…。

お琴のボランティア…①学校の学習相談会（６月）において先生から「伝統楽器であるお琴を子どもたちに見せたい」と要望があり⇒②ボランティアは学校から教科書を借用し学習⇒③１２月授業に参加予定

応援隊アート展…Ｈ２２コーディネーターの立案により、登録されたボラの発表の場の確保ともっと先生方に知ってもらいたいと目的でアート展（昇降口）を企画。

波及効果

⇩

Ｈ２３には、教務主任から夏休みの「サマーチャレンジ」提案。⇒７月に講師地域ボラと教師の２１講座の体験学習を２日間開催。

アート展に参加するボランティアの変容

Ｈ２２陶芸の皿を出展⇒Ｈ２３子どもが遊べる土鈴を出展。

Ｈ２２絵画や書道などの展示物⇒Ｈ２３体験できるものを取り入れる（ギター体験。土鈴）

⇒多様な出展（森林ボランティアが、伐採中みつけたリスの巣を展示）（着つけを勉強している読み聞かせボラ…帯締めを展示）

１年間、アート展を予定して作品づくり。子どもたちに○○させたいという思い。

ボランティアの工夫…遊び応援隊⇒子どもの道具を工夫して作成。（シルバー大学OBの活動の場。）

公民館の活動者（東京からの移住者）が、コーディネーターの声かけにより、裁縫ボラに参加⇒活動後のボランティアルームの一言「地域まご」と発言⇒ミシン機械直し（学校の状況等を知って直したいという気づきに）

保護者…読み聞かせに参画している。活動している保護者は、既存の経験者・小規模校からの保護者である。

① 子どもの様子を心配して②自分も友だちづくりを目的に参加。新設校でも、他校だったボランティアの方とも交流して、いきいき活動している。